
聖痕使い

中間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖痕使い

【Zコード】

Z5887W

【作者名】

中間

【あらすじ】

ジンは神様に異世界を魔物の侵攻から救ってくれ、と頼まれ自ら異世界に乗り込む。しかし、自分の力だけでは世界を救えないと神に教えられる。

精霊を操り主人公を中心に世界をまとめ世界を自分好みの世界に作り変える。

主人公は、神ではなく精霊王に力をもらつて戦います。

正直

文章を書くのは苦手です。それでも書いてみたくて書いてみました。

勢いで書いたので五話までの話すこぐ短くなっていますが、気にせず読んでくれると嬉しいです。処女作ですので、拙いですがよろしくお願いします。

プロローグ 神様に会つ

田が覚めると白い空間にいた。
「すればいいのかわからずにボーとしていると

「やあ始まつて天使 仁くん」

後ろから声が聞こえてきた。妙に落ち着いているな俺。

「誰だお前？」

「」の世界の神をやつているものです」

後ろを向くと思いつきり腰曲げて神様が頭下げる。
見た目は、笑つてること以外あまり特徴のないスースツ姿の青年だ
った。

「ずいぶん腰の低い神様だな」

「いやあ今日は、お願ひする立場なもので」

「用件は何だ」

「異世界についてほしいのです」

「嫌だめんどくさい」

「ちなみにあなたが行かなければその世界は滅びます」

お願ひじやなくていきなり脅してきた。めんどくさいつて言つたら

いなあ

「・・・何で俺なんだ」

「あなたしかできないからです」

「だか「神様の事情です。」らな・・・」

話す気はないらしい。

「たくさん死にます。老若男女とわずたくさん死にます。赤ん坊も死にます。美少女も死にます。」

俺はしばらく考えた。美少女につられたわけでがない。異世界に興味がないわけではないのだ、まあまだ夢かもしけないのだが真面目に考えてみた。そして

「・・・わかった、行こう・・・ただ一ヶ月待てないか

「それくらいならゴットパワーで何とかしましょう」

「神様軽いな」

「いまどきの神様ですからそれでは、細かいことまた後で」

「ああ、わかった。」

・・・後で？

そこで目が覚めた。

「おはよつづ」やこめか

「・・・・・」

ベットの横でスース姿の人形が喋つてた。神様だつた。
はあ・・・夢じやなかつたのね。夢に出てきた意味あるのか。

あの後いろいろ聞いた

いわく

- ・その世界は、ファンタジーの世界で剣や魔法や精霊や龍やエルフやらがいろいろいるらしい
 - ・もう少ししたら魔物の大侵攻があるらしいが世界は、それをしない
 - ・それどころか、戦争までやつてるので正直やばいとのこと
 - ・侵攻は三回あつてあとになるほど苛烈になるらしい
 - ・俺が選ばれたのは、精霊と相性がいいからと人格らしい（あまり良い性格だとは思つていらないのだが）
 - ・俺は、まず精霊界で修行をするらしい（神様は碌な戦闘能力はくれないらしい・・・神様使えねえな）
 - ・今の世界のほうが高位であるため戻つてくることはできないうらい。
 - ・基本的に異世界の情報は話せないらしい。
- といつものだつた。

一ヶ月の間にやつたことは、バイトと身辺整理だ。

貯金とバイト代で親に旅行をプレゼントした、学校には退学届けを、
親友とは今までのことをいろいろと清算した。手紙まで用意した。

そして今日が旅立ちなので両親に気分を重かったのだが、別れを告げようと思ったら

「息子の旅立ちに乾杯」

「「「乾杯」」」

なんか両親と親友と後なんか元担任がいて宴みたいになつてた。

「・・なんで?」

「ああ私が教えましたよ」

神様がスー^ツ姿で茶を啜つっていた。

「貴様のせいが――――――」

「まあまあ私たちも大体わかつてたし正確な日はわからなかつたけど」

「普段やる氣ないのにここ最近妙に真剣だったからな

「まさか異世界だとは思わなかつたが」

「応援しているぞ」

上から俺、母、父、親友、担任だ

さすが俺の両親とこの俺と付き合いのある友人だな。担任は・・・まあ流石は教師と言つたところか。

こうして小さな宴を開かれた後俺は、異世界に旅立つた。

あ、精霊界のほうな。

しまつた手紙を処分するのを忘れた。

小さな女の子が聞いてきた。

「ねえ、行っちゃうの？」

「ああ、そろそろあつちの世界に行く。」

女の子が泣きそうになつた。

「大丈夫。大きくなつたらあつちで会えるから。」

抱きしめて頭を撫でてやる。じぱりくすると

「わかった。パパ」

そうなんです。私父になつてしましました。といつてもこの子は、精霊なので人間とは違う生まれ方なんですが、精霊の統合を初めてしたときに、生まれてしまつた子で水と風と土の属性を持ちます。新しい雪の精霊です。名前は小雪。

ちなみに精霊界の修行は大変でしたよ。最後なんて精霊王たちあんま加減してなかつた気がする。

そこに刀神が歩いて來た。前の世界の神の知り合いらしい、たまに精霊界に來て刀術の稽古をつけてもらつっていた。

格好は侍スタイルだが髪は後ろで結んだだけの物だ。

「しっかり鍛錬を怠るなよ」

「最後の一言葉まで小言ですか師匠」

「まあ、いいじゃないか君のことが心配なんだよ彼は」

なんか元の世界の神もきた。

その神が始めて真剣な顔になつて。

「ありがと。元の世界を捨てて来てくれて。本当にありがと」

真剣な顔をして頭を下げる神に、俺は面食らつた。

「まあ任せの今の俺は結構強いぜ」

「うん、パパは強いんだよ～～」

「それに、ほかは勝手にさせてもらひしね」

神様が不思議そつに聞いてくる。

「なにがあるつもつだい」

「せつかく異世界に行くんだ前の世界でできなこととしたじやないか」

「俺はハーレムをつくる」

「・・・・・」

「わーい、わたしもパパのハーレムに入る〜〜
「ああ、待っているぞ我が娘よ」

娘の頭を撫でてやる。

「こなんんだつたつけ?ジンつて」

「まあ時間は人を変えるし、その程度の褒美はいいんじゃないか」と刀神。

「いや、けど娘つて」

「まあ血のつながりはないし神ではよくあるだろ?」

「・・・うん、そうだね・・・だといいなあ」

「それじゃあ行くか世界でも救いに」

「ああジン、これを渡しておくれよ」

懷中時計のようなものを渡してきた。

「最初の侵攻が360日後、ゼロになつた時に侵攻が始まる、場所は大陸の中央に大きな山があるからそこだよ」

時計の上の部分に360と青く光る数字が浮かんでいた。ほかは反時計回りをしている時計が三つ（時、分、秒だらう）ある。

「じゃあ門を開くね、水の精靈王の懇意の神殿に落とすからその方が何かとやりやすいと思つし、あと例の能力もついてにつけてくか

「わかった。」

なんか」こいつからなにかもうひの初めてだな。

「いってらっしゃーい

「達者でな

そこで門が開いた。

「いってきます

「頼んだよジン」

「ひつて俺は第一の故郷に別れを告げた。

2話 異世界の女の子

異世界1日目

門をぬけたと思ったたら、空中に出了た。

下がなんか水溜りになつてたから、水の精霊に手伝つてもらつて自分の位置だけ水をのけた。

よく見ると噴水のようなどこりだつた。今の服装は、黒一色だつた。闇の精霊王が作ってくれた服だ。

闇の精霊王は小さな少女でかわいいやつだつた。

「あなたがジン様ですか？」

女の声が聞こえる。力を上げると（服を見ていた）。水色の髪を腰まで伸ばした綺麗な娘が漫画に出てくるような神官巫女みたいな格好をしていた。

「そうだが。君は巫女さんでいいのかな？」

「は、はい。わたしはこの神殿の巫女をしているソフィアと申します」

「硬いな、別に普通で良いぞ。どこまで聞いている？」

「私の友人が行くとだけ、水の精霊王から聞いています。」

「じゃ簡単に来た目的を話さう」

魔物の大侵攻について話した。

「そのような事が、大変なことになつてゐるのですね」

「へえ、簡単信じるんだな。この世界の人間は知らないって聞いてたけど。」

「巫女ですから」

それでいいのか？ついでに聖痕も見せた。

「すごいです。聖痕はひとつだけでも持つていれば歴史に名を残すような人達ばかりで、こまはもうほとんどいらないのにそれをつつすべてだなんて。」

なんか感動している。

突然雰囲気が変わつて真剣な表情で

「あ、あのお願いします。助けてください。」

「？？？魔物でも出てるの？」

「いいえ、実はこのあたりの村を盗賊が牛耳つていて毎月食べ物などを奪われているのです。」

毎月？

「略奪じゃなくて定期的に奪いにくるのか？」

「はい、それでこれ以上奪われると村が滅んでしまうのです。」

なんだかソフィアの言葉には違和感がある。違和感を確かめるために

「うーん、じゃあ村の人集めてくれる」

3話 村の状況

まだ夜が明けたばかりのようだった。

ソフィアに村の人を集めて集会を開いてもらつた。

思つたとおりだつた村の人間はみんな瘦せている。これでは餓死者が出ていそうだな。考えていると

ほとんどの村人は、不審そう田を見てきた。まあ仕方ないなよそ者だしちょつと強気に言つとくか。

「まず聞きたいんだけどなんで戦わずに滅ぶ方を選んだんだあんたら?」

「な、なんだと」

「よそ者が知つたような口を」

村人が怒り出す。村人A、Bがうるさいな。

「静かに」

なんか村長っぽいのが出てきたな。ダンディなおつちゃんが村人の格好をしいていた。

「どういうことだね食べ物を捧げなければ我々は殺されていた。なのに君は我々が滅びを選んだと言つた。それはなぜだね?」

「なんでつて」

俺は、あきれてしまった。今若者を制したところからもおそらく村長なのだろう。村長ですらこの状況の矛盾に気づいていないのだおそらくあまり物事を考えずにすこしててきたのだうつまあこの世界ではしかたないのかもしれないが

「あんたはすでに食べるのに困つてんだる本来少しそつたべものを奪うのなら生きと殺さずが基本だ。だが、この村は滅びようとしているなぜだ？簡単だ他の村が逆らわなによつにするための生贊に選ばれたんだよあんたたちは」

「そ、そんな」

盗賊が取つたこの手法には、たまに見せしめがないと村が言つことを聞かなくなるからな。

村人たちが絶望の表情を浮かべる。はあ、少しくらい考えような。

「ジンをとどくすればいいのですか？」

いち早く立ち直つたソフィアが聞いてきた。

「少なくともこの村ができることはないな。どにつもこつも瘦せていて碌に戦えんだる」

なんか絶望が深くなつてきた。

「盗賊は、どれくらいいるんだ」

「80人ほどで今日の暁に5人ほどが徴収にきます。」

「ならなんとでもなるな」

「えつ、なるんですか」

なんか驚かれた。まあ問題は撃退した後の復讐だよなあ殺るなら
ついて壊滅させないと後が面倒だ。
しばりく考え。・・・よしこの作戦でいいの。

「じゃあ報酬の方だが」

また絶望の表情を浮かべた絶望好きだな。

「あ、あのジンさんもひこの村にはなにも・・・」

「ああ、俺がほしいのは旅の友だよそこだ。ソフィア」

「なんでしょう」

「それをソフィアに頼みたいんだ。」

あのあと集会が荒れた荒れた。まあソフィアさん美人だもんな。何より俺が信用できないうらしい。特に村長みたいな名前はオルムさん（ソフィアさんの親代わりでもあつたらしい）なんか怒つてたなあ。

まあ仕方ないが、その場は、ソフィアさんのおかげで何とかおさまつた。そこに

「ただの王都までの道案内だよ」

と説明しその後ソフィアさんが

「わかりました。ご案内します。」

といつていたのでそこで集会は解散となつた。

で、今何をしているかといふと田の前で盗賊が三人ぶつ倒れている内ひとりは死んでいる。

「さつさとつれて帰れ、お前らみたいな雑魚が4、50人で徒党を組んでも雑魚は雑魚なんだよ」

盗どもは、仲間を抱えて逃げていった。その顔には、憎悪を浮かべていた。

「どうして先ほど、4、50人と言つたのですか？」

ソフィアさんが聞いてきた

「4、50で言つておけばもつと大人数でくるかなって、それにひとりは殺したから黙つていられないだうし」「

正直作戦といつてもこの程度なのが最初の五人は、格闘だけで倒したから挑発には乗るはず。殺す時だけは、精霊術を使つたが。まあ村人は不安そうだつたが、どうにもならん。もともとこの村のためだしな。

この日は神殿に泊めてもつらた。

異世界2日目

次の日の真昼間に案の定八十人を超える人数で押しかけてきた。これならほとんど来たと思ってよさそうだな。

「てめえか、うちの部下やつてくれたのは」

村のはずれに立つていいかにも村人っぽくない俺になんか話しかけてきた。

俺は、軽く無視して。

「ソフィアさんは、そこで俺の精霊術を見ててくれ」

「はい、ジンさん」

ちよつと震えている。ちよつとかわいい。

「おい無視してんじゃねえぞ」

「知らん、死ね」

手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

・ソフィアサイド・

彼は80人程度どうとでもなるといつていきました。

確かに精霊術は、強いです。魔法のように詠唱を必要としないので単独での戦闘もできます。その分魔法に比べて習得が難しいですが、精霊と通じなければならぬので才能も必要です。

それでも80人を相手にするのは、難しいはずなのですといつより無理です。

なのにどうじょうか考えている間に昨日は昼に来た盗賊を倒してしまいました。今日の襲撃が決まってしまいました。

そして目の前には、80人を超える盗賊がいるのです。さすがにこわいです。

「ソフィアさんそこで俺の精霊術を見ててくれ
「はい、ジンさん」

すでに彼の周りには、かなりの火の精霊が集まっていました。それは、わたしの想像を超える力でした。

これには驚きました。わたしは、てっきり聖痕を使うものだと思つていたのです。聖痕を使わずにこれなのか、と。

彼は、手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

炎の大蛇が四匹出て来ました。

「灰にしろ」

大蛇が盗賊に襲いかかりました。大蛇に噛まれた盗賊は燃え灰になりました。

「ひいい」

「なんだよこれ」

「聞いてねえぞ」

一方的でした。剣で攻撃しても剣は溶けてしまい盾で防ぐこともできず3分ほどで盗賊は、全滅していました。

その凄惨なはずの光景は、私を魅了しました。この人は聖痕に頼り切つた戦いかたをしません。そんな彼が聖痕を使つたらと思うとゾクゾクします。私はこのとき彼に魅せられてしまったのです。

5話 ソフィアの告白

・ソフィアサイド・

村の人たちは大変喜んでいました。わたしもホッとしてしまいました。

盗賊のアジトからお金や食料も手に入つて、今年はなんとか大丈夫そうです。

お昼を食べ終わるとジンさん、いじえやはりジン様と呼びましょう、ジン様が

「じゃあ王都までよろしく」

「え、もう行くのですか?」

「まあ、あまり時間もないからね」

今言わなきやもひ言えないかもしれない。

「あの私も連れて行つてください」

「うん、だから王都までよろしくつて」

「そうじやなくて、その先もずっとお側にこさせつてください。」

「それつてつまり

顔が体が熱くなつてきました。

「はい、その・・・お慕いしています。」

「・・・」

「・・・」

「俺実はハーレム作るのとか考えてますよ。」

「ジン様ならそれくらい、いいと思います。」

「(なんか様付けに戻つてる) 危険ですよ

「私も精霊術が使えます。」

「オルムさん」

「ソフィアをよろしくお願ひします。」

満面の笑みのオルムさん。

「（あんなに怒つてたくせに）・・・僕Jですよ

「大丈夫です。受けとめます」

「・・・わかりました。」これからもよろしくソフィアさん。

「あのソフィアとおよび下さい

「わかった。ソフィア」

「はい。ジン様」

「じゃあ挨拶とかあるだろ」出発は明日の朝で
「わかりました。」

・ジンサイド・

その夜俺はソフィアと同じ部屋にいた。

俺は、ベットの上でソフィアの髪を後ろから撫でていた。

「ありがとうソフィアついてくると言つてくれて。俺実はこの世界
では、一人ぼっちだつたんだよな」

そう言つて俺は、ソフィアを抱きしめた。ちょっと声が震えていた
かも。

「ずっとお側にいますから、もう一人にはなれませんよ。」

「そうだな」

ソフィアが手を握ってくれた。

俺はしばらくの間、髪をもう一度今度は全体的に、撫でまわした後、
ソフィアを抱えてベットに倒れこんだ

「ひや」

「ソフィア実は、この前まで精霊界にいたから実は一年ほど禁欲生
活だつたんだ加減できないかも」

「はい。思う存分に。あの、でも初めてなので最初はやさしく」

「わかった」

こうして俺はソフィアが気絶するまで彼女を抱いた。

異世界3日目

朝ソフィアの体を拭きながら謝った。

「ソフィア、その、すまん」

「いえつ、そのつ、すごかつたです。」

頬を染めてそんなことを言つてくれた。襲いそうになるのを我慢する。

それでもその表情の中に疲れが見える。昨日は氣絶するまでしたからなあ。

村の人間も盜賊の一件で俺のことを認めてくれたのかソフィアがついていくことに反対はしなかつた。

一分の男どもはまた絶望していたが。

俺のことが怖くないんだな。俺は、殺してもあまり罪悪感を感じなかつた自分が怖かつたのに。

確かに俺は、必要なことに躊躇はしない性格だつたが殺しを平然とするとはなあ。

今は、王都への街道を進みながらこの世界について隣を歩くソフィアに聞いていた。ソフィアもほとんどあの村を出ることがなかつたので、あまり村の外のことはあまり知らないらしい。

話を聞くと大陸の中央は、人間の国が多く外側のほうは、人間の国が少なく亜人の国が多いらしい。

今いる国になるとソフィアの顔が少し曇つた。話を聞いてみると、この国の名前はグーロム王国またの名を『奴隸王国』つまり国

が奴隸を推奨しているのだ。

王もかなりの愚か者らしく奴隸を得るために、戦争を起こすような王で、他国の民どころか自国の民にも嫌われているらしい。

だが他の国の支配者階級は奴隸を手に入れられるので黙認している。表立つて反対しているのは、クイント皇国だけであるらしい。

クイント皇国の中は傑物らしく国力も大きい（協力関係を築くならクイント皇国か）。魔物の大侵攻は、俺だけでは無理らしいから国単位の協力が必要不可欠だからな。

クイント皇国を中心は何とかならないだろうか。

「この世界は、本当にだめそうだな。」

「はい、今大侵攻があれば簡単に滅ぶでしょう。」

今日は暗くなり適当なところで野宿になつた精霊達のおかげで野宿も快適だ。警戒もしてくれるし。

そうして、次の日

異世界4日目

「なあソフィアこいつらって

「はい、奴隸商人と子飼の傭兵といったところでしよう」

俺たちは、ガラの悪い傭兵崩れに囮まれていた。商隊が前から来たと思ったら、傭兵崩れが出てきて、いきなりこれだ。

「そんで商品は、あの馬車の中で俺たちもそこに入れと」

「そうでしょうね（気の毒な方たちですね、まあ自業自得ですが）ソフィアは、かわいそうな人を見るような表情をうかべた。俺が手加減しないのがわかっているからだろう馬車から豚が出てきた。

「おまえらも今から私の奴隸だ。ぐつふつふ

気持ち悪いやつだな。喋るなイライラする。

「気持ち悪い豚だな

口が滑つた。

「なんだと貴様！！おいお前たち男は殺してがまわん」

沸点の低いやつだ。

丸腰だと侮ったのだろう傭兵が剣を抜こうとしているがのんびりしたものだつた、と思つたらその傭兵が吹つ飛んだ。

ただの風の精霊を使った突風だ殺傷能力はない。これで時間も稼いだ。

「なつ、精霊術師だと」

その吹つ飛んだ男が立つたところで

「『風刃』」

腕を横に難いだ。

とつさにしゃがんだ一人以外の奴隸商人と傭兵の首が風の刃に切り飛ばされた。

お、避けたよ、見えないはずなのに。よけた内の一人が切りかかってきた。

「まで！」

もうひとりが止めようとするが、俺は半身になつて剣を避けて、風を纏つた左手で剣を右手で顔を掴んだ

「なに！」

剣を握つたのに驚いたのだろうはい時間切れ。

「『流雷』」

顔を掴んだ右手から電流が流れ男は気絶した。もう一人の男が悔しそうにしていたので。

「気に入るな、殺していない」

「えつ」

「俺の質問に答えれば逃がしてやる」

少し困惑していたが。

「わかつた」

敵意がないことを示すためだろう男はその場に剣を置いた。

「何でも聞いてくれ」

「なぜ奴隸商人の護衛をしていたんだ？」

「えつ、どういうことですか？」

ソフィアが驚いていた。

「この二人は、ほかと違う感じがした。」

実際格好からして傭兵もどきとは違った。装備にしつかりと手入れもしているようだし、何より質が違う。

「ああ、俺たちは冒険者だ」

「・・・冒険者がこんなことを

ソフィアが蔑んだ目で見ていた。冒険者が慌てて

「いや、俺たちは商隊の護衛を受けたんだ。それが奴隸の運搬にすりかえられて前金を使つてしまつていて下りることができなかつたんだ」

「そうだつたんですか」

ソフィアの表情が和らいだ俺は苦笑して次の質問につづる。

「なぜ冒険者を雇っていたんだ？」

「運んでいたのが、高級奴隸と戦闘奴隸で結構な額で用心のためだつたらしい」

「奴隸を解放するには、どうすればいい？」

「マスターキーを使うか、主が開放するしかない、キーは購入者の所にあるしどうし主は君が殺しちゃったから」

残念そうに

「中の二人は助けられないと思う」

ソフィアが悲しそうにしていた。だが今は話せない、これはあまり公にはしたくないのだ。

「そうかありがとう。俺はジンこつちはソフィア、俺の女だ。」ソフィアが頬を染め、ジークは羨ましそうにしていた。

「ソフィアです。先ほどは、失礼しました。」

「俺はジーク、冒険者だ。」

「ジークは中の二人について知っているのか？」

「いや、顔もしないな。」

それなら問題ないだろう。嘘をつく必要もないし。

「中の二人とやらは俺に任せてくれ。ジークは仲間を王都に運んだほうがいい」

「そうだな」

ジークは、仲間を荷物のよつに馬にくくると

なんか扱いひどいな、ほかにもないかやらかしているのか？

「本当にありがとう仲間を殺さないでくれて、王都に行くんだろう？」

「ああ」

「じゃあまた会えるかもしれないな」

「かもな」

そしてジークは去つていった。
あれは、前振りだろうか。

それじゃ あなかの二人と」対面しますかね。
馬車の中に入ると暗くてよく見えないが金髪と炎髪の少女が床に座つていた。

首には、複雑な模様のかかれた鉄の首輪のよつた物がつけていた。
俺の顔を見ると金髪には、ビクッと怯えられた、炎髪の方は俺の前まで来ると突然、床に頭を押し付け土下座の格好で

「奴隸の分際でお願い申し上げます。イリヤは逃がしてもらえませんでしょか、わたしが戦闘奴隸も高級奴隸もいたします。
だからどうかイリヤを逃がしてくださいお願いします。イリヤはまだ」

「黙つてくれ」

ビクッ

つい言葉に怒気を混じらせてしまった。炎髪が黙つてガクガク震えている。このとき俺は、かなり苛立っていた。
これがこの世界の普通なのか、自分の認識を改めさせられた。軽く会つてみるか、と思った自分が腹立たしい。

「ちょっと頭を冷やしていく、ソフィア一人を頼む」

俺は馬車から出て少し離れて座り込んだ周りは血のにおいが充满していた。

初対面の誰とも知れない人間に對してすることが、あの対応なのかこの国は、それが普通なのかはわからない。

だが、今決めたこの世界から奴隸制度をなくす絶対になくす。たとえ国を滅ぼしても。ソフィアに心配をかけてしまったな。

しばらくしてから馬車に戻った。

ビクッ

怯えられた

「ああ、さっきはすまなかつた。」

「い、いえ、ソフィアさんから私達に対して怒つているわけではないと聞きましたので」

金髪の少女が初めて喋つた。金髪を肩ぐらいままでって顔はかなり整つている。髪から耳は尖つているのでエルフだった。

「あ、あの先程は、も、も申し訳ありませんでした。」

炎髪の方は、かなりの怯えている近くで怒氣を浴びせてしまったから仕方ないか。

顔が俯いていてよく見えないが、それでも綺麗なのはわかつた。髪をポニーテールにしているのも可愛らしい。

「あの私たちはどうなるのでしょうか？」

「悪いようにはしない」

それでも二人は、不安そうだった。

「ソフィア、マスターキーはあつたか？」

実は一応探してもらつていたんだが

「いいえありません。着飾るための衣装と宝石などがあるだけです。

「やはりないか。・・・しかたない神様のやつにもらった力を使つしかないか。」

「あの助けていただいてありがとうございました。ですが私たちは・

・・・

二人は、あきらめの表情を浮かべた。キーがなければ逃げることはできない、そんな二人に俺は、「一人とも立つてくれるか?」

「え」

「ほら早く」

「は、はい」

その姿勢だとちょっとあぶないな

「ちょっと前かがみになつてくれる」

二人は、言われるがまま前かがみになる。

俺は、両手をあげ二人の鉄の首輪に手をあてて神様からもらつた力『契約の無効化』を使つた。

首輪が少し淡い光を放つたと思ったら。

ゴト

二人の首輪が落ちていた。

「え」

これには、ソフィアも驚いていた。

「驚いているところ悪いけど、どんどん行くよ、いいかい今から君たちは自由だ、そして俺たちと君達は対等だいいね。

ちなみに今の力は、『契約の無効化』つて力で神様とか余程のやつと契約しない限り無効化できる。つまり君たちはもう奴隸ではないんだ」

徐々に状況が飲み込めてきたようだ。絶望の表情は消えその顔に希望が表れる。いいことだ。一人でなにか話しているとおもむろに。

「あのお願いがあります。」

「なんだい、聞けることならきくけど。」

「「私達をあなたの奴隸にしてください」」

「なぜそうなる」

「むう、覚悟はしていましたが、一日で一人旅が終わってしまいまいした。」

俺は、驚くといつより呆れていで。ソフィアはなんだか残念そうだった。

理由を聞いてみると奴隸から開放してくれた恩を返すために側に置いてほしいらしに。

ならばどうすれば側にいられるか考えた挙句出た言葉が「奴隸にしてください」だったのだ。

「それじゃあ意味がないじゃないか」

「そうなんですけど」

「それなら別の形で仕えればいいだけです。それにジン様もハーレムを作ると言つていたではありませんか」

さつきまで残念そうだったのになぜかソフィアが乗り気になつていた。

(これまで夜の営みを満足させて差し上げることができます。)

なんて考えていたことにジンが気づくはずもない。ハーレムと聞いて二人は、頬を染めていた。エルフの少女なんかちょっと嬉しそう

だった。

結局エルフの少女はメイド、炎髪の少女は護衛として仕えることになった。

「じゃあよろしく俺は、ジン。聖痕使いだ。」

「ソフィアです。水の精霊術師です。」

エルフの少女は、恥ずかしそうに

「イリヤです。治癒術師です。その、未永く可愛がつて下さい」とんでもない事を言つてのけた。この子は絶対天然だな。

炎髪の少女は、くだけた感じで

「リリスよ、冒険者でギルドランクはB。これからもよろしくねジン、ソフィア」

こちらが素なのだろう、これはいい傾向だ。

二人には、衣装のなかで比較的に落ち着いた服に着替えてもらつた。ついでに宝石類を預いた。二人とも何か聞きたそうにしていたが。

「先に王都に向かおう、宿でいろいろ話すよ」

「そうしましょう」

「わかりました」

「了解」

聞いていたことだが一一日足らずで王都についてしまった。そのたつた二日の距離しかない村が盗賊に苦しんでいたことに俺は、驚いた。これが国民に対する扱いか王なら治安にも気を使うべきだろうに。だが反乱は難しいのだろう成功しても失敗して死ぬのは奴隸だ。まづ傷つくのは奴隸、この国ではそれが当たり前なのだ。

門はあつさり通れた。怪しいやつなどいちいち取り締まらないのだろ？

もう夕方なので、ソフィアが一度泊まつたことのある宿屋を目指した。王都を眺めているとやはり裕福なところと貧しい者の差は激しい裏路地を見たときは、吐きそうになつた。

首輪の付いた死体がいくつか転がっていたのだ。俺は密かにこの国を滅ぼす決意を強くした。

もう他の物を眺めたりせずに前だけを見て歩いた。ソウイア達もつらそうにしていた。不謹慎ではあるがそのことに安堵してしまつていた。

宿屋に着くとソフィアが女将に、

「ダブルとツイン一部屋ずつお願ひします。」

「いやちょっと待てソフィア、まず三人部屋と一人部屋を聞くべきだろ？」

「三人でやるんですか」

「（何いつてんだこの子は）いや違うから」

「それにツインとダブルの方が安いんですよ」

後ろの一人は、何も言わないので、後づつちやけ女将の視線が痛い

蔑まれているわけではないのだがなんかニヤニヤしている。実はこのとき後ろでイリヤが何か言いたそうにしているのを見たからなのだが。

「わかつた、それでいい」

食堂で先に食事を済ませた後。部屋に行つた。ちなみにこの世界の通貨は、ギルだ。

金貨一枚	10000ギル
半金貨一枚	1000ギル
銀貨一枚	100ギル
半銀貨一枚	10ギル
銅貨一枚	1ギル

になる（半金貨、半銀貨は、混ぜ物があつて色が鈍いのだ）1ギル^{＝約10円だ。}

一部屋150×2ギル、宿泊客は一食30×4ギル しめて420ギルの出費だ

それを盗賊のアジトから取つてきた銀貨4枚で払い半銀貨を一枚受け取つていた。

盗賊は周りの村を食い物にしていただけあつてかなり溜め込んでいた。換金の必要のない貨幣を幾らか貰つてきていたのだ。

その額は1万ギル なので残高9580ギルなり

割り当てられた部屋の、ダブルの方に集まり、イリヤとリリスに魔物の大侵攻と神様に頼まれたことについて話した。

ソフィアの時のようにいかなかつたが、ソフィアが室内なのに空から降つてきたことをはなしたり、『契約の無効化』を思い出して

もうつたり七つの聖痕を見せて一応の納得を得た。

嘘をつく必要性がないこととイリヤが聖痕について少し知っていたおかげだ。その上でついてくるかを聞くともちろん絶対について行くと言つてくれた。

「あのご主人様」

「・・・なぜにご主人様？」

「リリスが、メイドならそれが基本だと」

リリスが、二マ～としていた。まあ役得だからそのままで
「で、なんだっけ？」

「確かに聖痕は、徐々に力を溜めていくもので使用にインターバルがあるのですよね？」

「ああ、よく知つているな。でも今は光と闇以外は、ほぼ満タンだぞ。光と闇についてはまだ聖痕の発動ができないから溜めることができないんだが」

「それでジン様は、盗賊も奴隸商人も聖痕を使わずに倒していくのですね。」

ソフィアが納得していた。

「そゆこと、まあ聖痕のおまけみたいなもので精靈と仲いいからな、でもなんでそんなこと聞くんだ？」

「聖痕保持者が殺されるときは、基本そのインターバルの間ですか
ら、ここにいる人だけでも知つておくべきかと思いまして。」

「やっぱりそうなのか、まあ俺は、素でも強いし聖痕も七つあるから大丈夫だと思うが、ありがとなイリヤ」

頭を撫でてやると嬉しそうに細めた目から涙がこぼれた。

「どうした？ 大丈夫か？」

震えた声でイリヤが

「はい、うれしくて本当なら私今頃誰かに買われてきつと今も奴隸で、でもご主人様に助けていただいてうれしくて怖かったのだろう、頭を抱きしめ頭を撫でてやる。

しばらくそうしていると、リリスとソフィアが、

「じゃあ今日はこの辺でお開きとゆうことで、『じゅつぐじ』両人

「たくさん甘えてくださいねイリヤさん」

部屋を出て行ってしまった。

もう外は真っ暗になってしまった。

「ご主人様」

「落ち着いたか？」

「はいご主人様の腕の中とでも落ち着きます〜」

なんか言葉がとろけてきているな。頭を撫でていると顔を上げてきました近い。周りを見て

「あの、二人は？」

「気付いていなかつたのか。

「ああもうひとつ部屋にいつたよ、『じゅつぐじ』だと俯いたイリヤが顔を真っ赤にして

「・・・あのご主人様、・・・その・・お情けを・・ください」

詰まりながらもそういうってくれた。

「いいのか、俺はハーレムを作るつもりだぞ。」

「はい、ご主人様ならば当然です。私もそこに入れて同じようにしてくださればわたしは幸せです。それにもうソフィアさんは入っているのでしょうか、負けられません」

考えた時間は、ほんのわずかだった。

「わかった。イリヤ、俺の女になつてくれ。」

「はい、あなたの女にしてください」

「早速で悪いんだが・・・耳を触つてもいいか」

「ふえ・・・耳ですか、ど、どうぞ」

触つてみると不思議な感じがした、さわり心地は人間の耳とそこまで変わらない気がするのだがあきらかに耳の形がちがうのが面白かった。

特に触つているとイリヤが

「あつ・ん・・んあ」

ちょっと喘ぐのだエルフで耳が気持ちいいのか、やるなイリヤ。そ

んなイリヤに我慢できずベットに押し倒して

「先に言っておく俺Sなんだ」

「ならば私がMになります。」

さすが天然のイリヤ、凄いセリフを平然と言つた。

俺は、イリヤと体を重ねた。

異世界5日目

朝起きると隣でイリヤが裸で寝ていた。寝起きにイリヤの耳で少し遊んでからベットを出る。

自分が着替えた後、イリヤの体を布で綺麗に拭いていく。

「あ、おはようございます。」主人様。

イリヤが起きた。

「おはよう

俺はそのままイリヤの体を綺麗にする作業を続けた。

「あの、自分で・・・

「いいから、させて

黙つてしまつた。イリヤの顔が赤くなつていぐ。

・・・・・

「よし終わる

「はっ、あつがとついたしました。」

恥ずかしかつたのか急いで服をきている。
ちよつと意地悪をしたくなつた。

「これでイリヤの体で触れていない所はないな」

ピタッ

止まってしまった。可愛いやつである。頭を撫で

「一人を呼んでくるから、早く支度しろよ」

部屋を出ると

「うへへ『主人様のバカ』」

本当に可愛いやつである。

ちょっと時間を置いてからソフィアとリリスをつれて部屋に戻った。

「飯の前に少し話そう、大侵攻については昨日話したな、大侵攻を阻むのが一番の目標だが、それとは別に俺個人の目標もある。」

「『主人様の目標ですか？』

「そうだそれはだな。・・・この世界から奴隸と奴隸制度をなくすことだ」

「・・・ジン様、それはさすがに難しいと思います。」

「そうだよジン、奴隸を持っているのは、基本的に支配者側なんだよ。」

二人は否定的だが、イリヤは、

「「」主様、さすがです。どうまでもついていきます。」

とろん、としていた。

「まあ、これは決意表明みたいなものだ、一応手も考へてる。まだ不確定要素が多すぎるがなんとかなると思つ。」

この言葉に、一人もなにか考へ込んでいたが、何も言つて来なかつた。

俺は、話を変えて

「大侵攻を阻むための協力体制を取る国を探す必要があるんだが、どの国がいいと思う?」

「それはやつぱりクイント皇国がいいと思うよ。あそこの王は、民に慕われているし。奴隸を禁止しているから、ジン的にもありだと思つ。」

冒険者のリリスが発言した。実際のところ村からあまり出ないソフィヤやエルフの里から出てきて日の浅いイリヤ達に比べリリスは世間についての情報を持つていた。これは正直助かつた。

「じゃあクイント皇国と協力体制を取る方向で行こう。クイント皇国となるとさすがに遠いから、まずは金か」

「それならみんなも冒険者になろうよ、そうすれば情報も力もお金も手に入るからさ」

「情報とお金はわかるが力も手に入るのか?」

「うん、あ、そつかジンは知らないか。あのね冒険者登録するときに丸薬みたいなのを飲むんだ。

くわしくは、知らないけれどそれを飲むと体質が変わつて魔物を倒すと気力と魔力が少ししづつあがるんだよ。個人差はあるけどね。

「へえ、便利なんだな。戦えばある程度は強くなれるのか」

それなら俺はまだまだ強くなれるかもしれない。

「まあ強さの上限にも、限りがあつて上限までいくとギルドカードの称号に『到達者』っていうのが出るんだよ。

さらになんと能力ランク5以上の人には、『超越者』っていう称号が出るんだ。『超越者』は、凄く少ないんだよ。後、精霊術より魔術が主流なのもそのせいだと思うよ」

またまたリリス。冒険者なのだから当たり前なのかもだがちょっと意外だ。

「ジンなんか今失礼なこと考えていない。」

するどいな。

「いや。それじゃあ装備とかいろいろ準備しなきゃいけないし。今日は、お買い物と冒険者登録ということでいいかなできれば依頼？クエスト？も受けたい。」

「そうと決まれば朝」はんにしましょう

「ちょっと待つて、あともうひとつ聖痕についてはできるだけ伏せておいてまだ目立つわけにはいかないから、あと『契約の無効化』については絶対に喋っちゃダメ」

「『契約の無効化』もですか。」

「考へてもみて俺はあらゆる契約を無効化つまり無視できるんだ、それでは誰も怖くて契約できなくなるし悪用の仕方はいくらでもある。誰かが利用するために近づいてくるかもしれない。だからもしかれそうになつてもあくまで奴隸解放の能力ということにしておいて。」

実は、もうひとつあるのだがそれについては、今はいいだろ。

「…………」

三人とも呆けた顔をしている
俺まで困惑して。

「どうした？」

「いろいろ考へてゐるのですね、ますます惚れます。
「さすがご主人様です。尊敬します」
「ほえ、ジンつてすごいね、普通は力を誇示したくなると思つん
だけど。人間ができるのかな？」

照れくさくなつたので

「よしこれで終わり飯に行くぞ」

先に食堂に向かつた。

朝食 $25 \times 4 = 100$ ギル

残高 9440 ギルなり

10話 登録とチーム名

朝食を終えた俺たちは、冒険者ギルドに向かっていた。俺は、道中リリスに質問していた。

「わつわつと称号のはどんなのがあるんだ

「こりこりあるよー、ピンからキリまであつて、すいこのはやつぱり超越者かな」

「確かに到達者と超越者は条件があつたよな全部そつなのか？」

「大体はそつだね、でも中には神様の気まぐれで、ユニークなものもあるらしいよ」

神様の気まぐれ・・・・嫌な予感がするな

「なあ、登録するときに称号つて係の人とかに見られるかな？」

「見られるはずだよ」

どうしちゃう

「何か困る称号がでるのですか？」

つと、ソフィアが聞いてくる。

「ちょっと神様を思い出したら不安になつたんだ、宿で言つたけどまだ田立ちたくないからな」

「はあ」

良くわからなかつたらしい。まあ仕方ないかソフィアたちはあの神様に会つたことないからなあ。あいつ神様のくせにいたずら好きなんだよ。

やつこひじりしている内に、俺達は冒険者ギルドに着いた。

王都の冒険者ギルドは、あまり大きくない。この国に冒険者があり来ないから、この国に近づきたくないからだわ。

中に入ると、一応人がいるにはいた。ガラが悪いチンピラみたいなのがたくさん。

チンピラみたいなのは、俺を見た後、後ろの三人を見たら一タ一タと気持ち悪く笑つてこちらに近づいてきた。

「なあなあ、嬢ちゃん達そんなのといないで俺達のところに来いよ」と、腕を伸ばしてきた。動こうとしたリリスを止めて、俺がその腕を掴んだ

「悪いなこいつらは、俺の連れでね」

「野郎によつはねえんだよ。ひつこんでや」

俺は怒気を込めて

「これが最後だ。俺の女に触れるな」

一瞬怯んで何を思ったのかいきなり殴りかかってきた。

掴んだ腕に電気を流す。声も無く男が倒れた。

これだけで終わってしまった。周りは、なにが起ったのかわらな
いといった様子だった。

俺はそれらを無視して三人と奥に向かう。

「やっぱりお強いのですね。『ご主人様は』
「はじめて見たけど、あつけなすぎるでジンの実力がぜんぜんわか
んなかつた。」

さりげなくリスがさつきの男を雑魚だと貶していた。
むかついていたのだろう。

奥のカウンターで受付嬢に

「冒険者の登録がしたいんだけど
「四名様ですか？」
あれ落ち着いてるな。まあいか
「いや、三人だ」
「では、こちらにどうぞ。」

別の部屋に通された。

「ずいぶん落ち着いているんだな
「Jの国では隙は見せられませんから」

よく見ると彼女は、黒い髪を肩でそろえていて少し鋭い目に眼鏡を
かけていて美人秘書といった感じだ。

「大変だな、俺はジンこつちは」

「ソフィアです。」

「イリヤです。」

「リリスだよ。」

「始めてクレアと申します。」

「ずいぶんクールな人だな。」

「それではこちら両手を置いてください。」

見ると部屋の中央に、腰の高さまである四角い石としか言い様のないものがあった。

石の上に両手を置いて十秒ほどしたら強く光りだした。正直眩しい。

「なんですかこれは、こんなに強く光るなんて。それに時間がかかりすぎ」

「さすが、ジンだね。」

何度か見たことがあるであろうふたりが驚いている。

石からカードと黒い丸薬みたいなものが光から出てきた。出てきた

カードは、光になつて体に入つてしまつた。残つた丸薬をもつて

「これで終わり?」

「うん終わりだよ。」

とリリスが答えた。クレアさんは、まだ呆けている。

その間に残りの二人の終わつてしまつた。やっぱり俺のときほど時間はかからなかつたし、光も弱かつた。

この時には、クレアさんも何とか落ち着いていた。

「それでは、その丸薬を飲み込んでください、飲み込んだらカードを見せてください。登録しますので、出し方は、念じれば出てきま

す。」

三人とも丸薬を飲み込んだ後、カードを出してみる。

「お、出た出た。」

「よし、みんなで見せっこしょ」

「そうだな」

まずソフィアか

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム なし

称号 水の巫女 精霊術師

「精霊術師ですか、珍しいですね。」

「へえ、ソフィアって巫女さんだったんだ。」

次はイリヤだ

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力B

チーム なし

称号 ジンのメイド 治癒術師

「 」

次いこつか。

はい、リリス。

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム なし

称号 ジンの護衛 熟練者

「また変なのがある」

「あのクレアさんからでいいですか。」

「まあいいんですけど。」

名前 クレア 女 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

「それじゃあ真打といきますか。」

ソフィアが嬉しそうに言つ。クレアさんも興味があるようだ。顔が
近い

「見せなきやダメだよな。」

「ダメですよ」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力D

チーム なし

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 三人の女の主

奴隸の解放者 精霊術師

「あ、あなたなんなんですか？神の使い？」

クレアさんを落ち着けるために魔物の大侵攻について話すことにな
つた。

「ということで、できれば内緒にしてほしいんだ。」

「わかりました。世界の危機です、わたしも協力を惜しみません。」

ギルドの職員で目の前でカードを出されでは、信じるしかなかつた

のだろうすんなり信じてくれた。

思わぬところでギルド内に協力者ができた。

「気を取り直して一応ギルドやカードのことを説明いたします。最初のギルドランクは、能力ランクから一つ下のものがつけられます。ランクは上位から、SSS - SS - S - A - B - C - D - E - F - G となります。依頼は、自分のランクよりひとつ上の物まで受けることができます。

成功が続けば昇格、失敗すれば降格です。昇格には、自分のランクより下の依頼をこなしてもあまり意味がありません。」

「つまり降格は、依頼のランクに関係なく失敗が続けば落ちるということですか？」

「はい、そうです。丸薬のことは知っていますか？」

「ああ、知ってる。」

「そうですか、あと、能力ランクは、あくまで氣力と魔力の平均なので、精霊術師の実力は関係ありません。なのでジンさんは、すぐにランクを上げていけると思いますよ。」

最後にチームについてですね、依頼や探索は複数ですることが多いですし、チームに専門の依頼もあります。あとチームをつくればお金の貯金ができます。個人の貯金は、人数が多くてできないんです。

チームに関してはそんな感じですね、どうしますか、チームをつくりますか？」

「そんなに簡単に作れるのか？」

「ええ、チーム名をえ決まればすぐこでも」

「どうするか」

「ジン様が決めてください。私達は、ジン様の女なのですから」

「そうです。ご主人様」

「私もジンが決めていいと思つ。」

「それじゃあ」

しばらく考えて

「『世界を結ぶ者達』でどうだろつ。魔物の大侵攻には世界の人々の力が必要だ、そして俺達は国を種族を繋げなければいけない、だから『世界を結ぶ者達』」

どうだろつ、真剣に考えてみたのだが

「おお~、いいね、それ」

「そうですね。頑張りましょつ。」

「今このバラバラな世界を繋げる。これは、戦いの後の世界が楽しみですね。」

「すばらしく、思ひますよ。

こうして俺達のチーム名が決まった。

1-1話 依頼とお買い物

チームの登録が終わるとクレアさんが

「依頼は受けられますか?」

「そうですね、みんなで受けられて、お金を稼げるそんな都合がいいのつてありますか?」

「ありますよ」

「・・・あるんですねか」

「これは、驚いた。」

「チーム限定の依頼でランクが低くいけど、しつこい依頼があります。」

「どんな依頼ですか?」

普通なら疑つところだが俺はもうクレアさんを信用していた。

「討伐系の依頼で一週間以内に一定数以上の魔物を討伐する依頼です。成功報酬はそれほど高くないのですが、どの魔物をどれだけ倒したかで報酬が上乗せされます。」

「討伐すればしただけ報酬が貰えるのか、いいね。それでお願ひします。」

「では、皆さんのギルドカードに依頼をいれますね」
俺たちがカードを渡すとカウンターの石盤の上に置き何か操作していた。

「これで誰がどれだけ魔物を倒したかが分かります。ギルドカードを見てください。一番したに欄が増えますから。」

作業が終わり返してもらつた。

ギルドカードを見ると。一番したに

総合討伐数	000
ジン討伐数	000

内訳

と、いつた具合だ

「討伐指定地域は、オルムの森です。指定討伐数は300です。報酬に上乗せできるのは500なので上限は800ですね。」

「ありがと、次いでに何処かいい武具屋と宝石商を知らないか?」

「武具屋でしたら、ギルドを出て左側の三件先あるところがいいですよ、ギルドが近いので商売もまともですしギルドが懇意にしてるので、宝石商は武具屋の正面にあるお店をおすすめします。」

「ありがと。じゃあ皆行くつか」

「頑張ってくださいね」

「つって俺たちがギルドを出た。

俺たちはまず宝石商で奴隸商人の馬車から取ってきた宝石や装飾品を売りはらつた。

宝石と装飾品は三万、ギルになつた。

そして今俺たちは、勧められた武具屋にいる。

「誰に何がいるんだつけ？」

「わたしはレイピアかな、前使つていたのもレイピアだつたし

リリスは、すんなり答えたが、ソフィアとイリヤは黙つたままだ

「どうした? 一人とも」

「実は何がいるのか解らなくて」

「実はわたしも」

「じゃあ店主に聞いてみよつか」

「じゃあ、わたしはあつちでレイピアをがすね

「ああ、頼む」

リリスは剣が並ぶ場所にいった。

「じゃあ、一人とも行こうか」

奥に行くと部屋のここおじさんがあが話しかけてきた。

「いらっしゃいませ。私はこの店の店主のドルトンと申します、何かお探しですか？」

「ええ精霊術師と治癒術師で使えそうなものってありますか？」

「ふむ、精霊術師のかたは、どの精霊をお使いになるのですかな？」

「水の精霊です。」

「それでしたら」

ドルトンは、奥から小さな箱を持ってきて中を見せてくれた。それは青い石のような物のついた石の光る綺麗な指輪だった。

「このうにこしておる石は、水の石とここまして魔力を込めるときの精霊が集まりやすくなるものです。以前は、そのまま水の指輪といいます。」

「試しても？」

「どうぞどうぞ」

ソフィアに持たせてみる。するとじばりくしていつも以上に精靈が集まってきた。

これは、アリだな。

「これはいくらですか？」

「精靈術師は少ないので、需要は少ないので、水の石が貴重でして。8000ギルになります。」

「買います。」

「え、よろしいのですかそんな大金」

「装備をケチつてソフィアが怪我したら大変だろ、だからいいの。」

「ありがとうございます。（やつた、ジン様から指輪をいただけるなんて）」

「いいなあ、ソフィアさん」

イリヤが羨ましそうにしている。

それを見たドルトンが、気を利かせたのかおもしろそうに

「治癒術師の方は、こちらなどいかがでしょつか？」

別の箱を取り出した。こちらも指輪だ。こちらは、石は無く少し幅広で複雑な文様が描かれている。こちらも水の指輪に劣らず、綺麗な指輪だった。

「これは単純な、治癒魔術を含む魔術の補助ですね。その中でも治癒術を意識して作られたものです。ヒーリング・リングといいます。」

「

イリヤが田を輝かせていた。ソフィアは、少しうつだれていたが。イリヤがおそるおそる

「あの、おこくらですか?」

「そのこちらは、治癒術を意識しているのと、装飾品もかねてあります1000ギルとなります。」

「うう、高いです。」

イリヤが落ち込んでしまった。

「イリヤ大丈夫だから」

と頭を撫でる。撫でていると

「どうしたの?」

リリアが戻ってきた。

「ちょっとな、それより決まった?。」

「うん、ちょっと高いんだけど。」

そして、レイピアを出してきた。

「わたしスピードタイプだから。強度補強と軽量化の魔法がかけられてるこれを選んだんだけどね。値段がね、その、」

リリスが、言いづらそうに

「4000ギルなんだ」

少なくとも二人よりは安い。

ああ、ふたりが落ち込んでしまった。

「あーえーと、後俺だな。刀はあるか?」

「刀ですか、内にあるのは、これくらいしか。」

刀の入った箱を持ってきて中から一本取り出した。あまりいい物ではない。ドルトンもそれはわかっているのだろうバツがわるそうだ。箱を見るともう一本小太刀があつた。俺は妙に気になつて

「それは?」

「ああこれですか。これは不良品として抜けないので。」

「見せてもらいますか」

「どうぞ」

持つて抜いてみると、簡単に抜けた、すると突然、

「【初めてまして、我が主、わたしは『鉄餓刀』（てつがとく）と申します。テツとお呼びください。】」

小太刀が喋りだした。みんなにも聞こえているのだろうみんな驚い

ている。しかし土の精霊術師でもある俺は、落ち着いていた。これは、土の精霊に似ている。

「よろしく俺はジン、誰にも抜けなかつたらしいんだが？」

「【私は、土の精霊使いでないとぬけません。私の製作者が土の聖痕保持者でしたので。】」

「それでか。それで【テツおまえは何ができるんだ?】

「【刀は切るものです。あえて言つなら金屬等を吸収して成長することができますね。】」

「よし買つた。店主】こつは、いくらだ?」

「きみすごいね。土の精霊術師なのかな?勉強になつたよ。凄そうだけど他の人には卖れないし1000ギルでいいよ。」

「これからよろしくなテツ」

「【はい、よろしくお願ひします主】」

全部で23000ギルか・・・

「なあ、鎧以外に体を守れるものつてあるか?」

「それでしたら、防御の護符などいかがでしょう。魔力を通すだけで体の周りに障壁を張つてくれます。強度を魔力に左右されてしまうのが難点ですが。」

「それはいくつだ。」

「ひとつ1000ギルになります。」

「よし四つ買おう、全部で27000か」

「いえいえこれだけの金額を買つていただけるのです。珍しい物も見れましたしサービスで25000ギルドどうしよう。」

「ありがたい。それで頼む」

お金払い各自自分の武器と護符を持つて出口に向かう

「毎度ありがとうございます。またのじに来店をお待ちしております。」

「

$$9440 + 300000 - 25000 = 14440$$

その後も、イリヤとリリスの服や食料などこれから必要な物を買い集め940ギルになつた。

残金 13500ギル

異世界6日目

・リリスサイド・

私は、今イリヤと魔物退治をしてる。

最初はみんなで森に入ったのだが、この森のランクはEランクつまりFランクの冒険者まで入ることができる。

Bランクの私やジンにとって少々退屈だったのだ。総合で50匹ほど狩ったところでジンが（一週間で300なので単純にノルマは終わっている）

「ソフィアの修行をやめないと困るんだ」

という話になり

なので効率を上げるために一手に分かれたのだ。

ジンがソフィアの修行をするため、イリヤと私が組むのは必然だろう。

イリヤと知り合ったのは、奴隸時代に奴隸される際に負わされた怪我を、こつそり治してもらったのがきっかけで友達になった。（奴隸には、自害以外のことを命令でき禁止もできるが、イリヤは治療行為を禁止されていなかった）

奴隸の間、わたしは友達として不安に潰れそうなイリヤを支えることはできたと思う。でもその不安を取り除くことは出来なかった。

それを簡単に取り除いてくれたのがジンだった。イリヤにヒツヒツジンが特別になるのに時間はかからなかつた。

そして私も奴隸の身から救つてもらつた恩がある。好きではある、あるが、イリヤやソフィアと同じなのか自信がない。小さい頃から冒険者をしていて忙しかつたし、同じ場所にいる事がなく恋愛などしたことがない。初恋もまだと思つ。ジンは、ハ、ハーレムを作るつて言つていたし時間はあるだろうから。

わからないことはわからなこのでわかるまで放置することにした。

「イリヤ残念だつたね、ジンと一緒にいられなくて」「うん、ちょっとね」

少し沈んでいる。

わかれの時は、平氣そだつたのにやつぱりジンの側が一番安心できるのだろう。励ますために

「それじゃあたくさん魔物狩つてジンにほめてもらおうよ」「そうだね、頑張つたら。頭撫でてくれるかな」

イリヤが赤くなつてゐる。イリヤは、ジンが絡むと頭が桃色になるなあ。いや天然なだけかな。

私達は、それからも順調に狩りを行つた。氣付くとずいぶん奥に来てしまつた。

そろそろ戻りうかと思つてゐた時に私達はそれに出くわした。

それは、サイのような形をしてゐた魔物で、だが角は太く長さ二つては、2メートルぐらいある。

皮膚は、黒い鉱物の様なもので出来ていてとてもスピードタイプの

わたしやイリヤの攻撃魔法が効くとは思えない。

名前はノワールサイ、サイ型の堅さが売りのAランクの魔物だ。
(何でこんなところに上級の魔物がいるのよ)

心中で嘆いていると、ノワールサイが突っ込んできた。
ヤバい

私はイリヤを抱えて右に跳んだ。ノワールサイは、私達がいた後ろの木を、

三本ほどへし折った。

「デタラメな突進力だ。ジンには悪いがこの突進に護符はあまり意味がないだろう。なので呆けているイリヤに

「イリヤー！ きた道を戻ってジンを呼んで来て」

声が大きくなってしまった。

「リリスはどうするの？」

声が震えている。怖いのだろう当たり前だ今のを見たのだから。それでもこちらを気遣うイリヤに

「私は、あいつを引き付ける。大丈夫ノワールサイの動きは、単調だから時間稼ぎくらいはできるから」

これは事実だが逃げられる保証はない。ノワールサイに障害物は、関係ないのだから

「わかった。待つて絶対にご主人様を連れてくるから」

そう言つてイリヤは走り出した。

「それじゃあ張り切つていきましょうか。」

私は、引きつけるために無駄と知りながら切りかかる

あれからずいぶんたつた。突進を防御せずにすべて回避する。回避しながら考える。

正直イリヤがジンを連れてくるのは、難しいだらうこの森は広いし、木で視界も悪いイリヤの体力も心配だ。だけど諦めた訳ではない、こいつの視界を奪えればスピードタイプの私は、逃げられるはずだ。こいつの動きも大体覚えた。

眼を潰してからの逃走

これしかない。決めたら回避しながら時を待つだけだ。

それから何度も目の突進でノワールサイは、苛立っているのか無理な停止をした。

いい位置だ一步で突ける。

(二二二なら)

私はレイピアを突き出す。

ガキン

ノワールサイは首を下げてレイピアに角を当ってきた。レイピアは弾かれ体勢を崩してしまつ。しまつたこのノワールサイ、自分の弱

点を知つてゐる。ノワールサイが体当たりをしてきた。

ヤバい

助走がなかつたので、私は回避とレイピアと護符で何とか受け流すことができたが。しかし、今度こそ完全に体勢を崩されて転倒してしまいすぐには動けない。

ノワールサイが再度突つ込んで来る。

（避けられない、死ぬ、ジン助けて）
眼を閉じてしまう。

・・・・・いつまでも衝撃は襲つて来ない。
代わりに、心地良い風と暖かい体温を感じる、その体温が戦いで疲れ冷えた体を温めてくれる。

眼をあけると私はジンに、お姫様抱っこされていた。

（タイミング良すぎだよ、ジン）

「ジン！」

ジンに抱っこされたまま首に抱きついて頬にキスをした。

私は、初めて恋をした。

話は一手に別れる前まで戻る。

しかし、この辺の魔物は弱いな。ほとんどの魔物が、動物が少し強くなつた程度のもので護符があれば死にそうにない。危険がないのはいいことなどだが。

俺は、狼に似たハイ・ウルフを、鉄餓刀で切り裂きながら。鉄餓刀に話しかける。

「なんかお前普通だな。」

「【今の私は、主に抜かれたばかり初期性能です】」

「前の所有者のときには成長しなかつたのか？」

「【いいえ、ただ主が移った時に初期化されてしまつのです】」

「そらまた、面倒な機能をつけたもんだ。」

「【いいえ、そうとも言えません。前ままでとあまりに癖が強すぎますし、成長にもいろいろあるので主の好きなように育めてください。】」

好きなように育てて

「具体的にどうすればいいんだ？」

「【金属等を吸收させる時に、私を持って意識を集中してくだされば、勝手に好みに成長いたしますよ。成長を続ければ隠し機能もあります。】」

「それはそれは、楽しみにしていよう。」

いつたん会話をやめてギルドカードを見る。

総合討伐数	050
ジン討伐数	019
内訳	
ハイウルフ	10
グリーングリズリー	2
ラビットドン	7

50か、ソフィアのほうを見る。指輪の力は使っているのだが、攻撃が不得手らしいのだ。まだ、一体も倒せていない。ノルマは終わつたしソフィアの修行でもするか

「どうよつときてくれ」

三人に側に来てもらつ。

「どうしました？」

「ソフィアの修行をやめつと思つんだ」

「何故ですか？」

「私やっぱり弱いですか？一体も倒せていませんし」

イリヤは不思議そうにしていた。ソフィアは泣きそつとなってしまった。

「いやそうじゃなくて、ソフィアって攻撃が苦手みたいだからその指導をしようかと思ってな、これから先自衛は出来たほうがいいだるうしな」

この言葉にソフィアも納得してくれて、泣き止んでくれた。

「たしかにそうですね。それでは」指導お願いします。」

「それでは私達は、どうしましょ、う？」

「二人には悪いけど、このまま狩りを続けてほしい。討伐数がものをいう依頼だからね。」

イリヤは、一応攻撃魔術が使えるので今は、大丈夫だう。

「わかりました。」

「了解」

二人と別れソフィアの修行が始まった。

いくつか術を見せてもらつたが制御はうまいし精霊の力も申し分ない。となると、ただ攻撃用のイメージが持てないのだろうそれなら見せるのが手つ取り早い。

「ソフィア今から俺がいくつか攻撃用の術を見せるからそれをヒントにして。」

「はい。勉強させてもらいます」

ソフィアが意気込んでいる。

見せたのは、圧縮して撃つ『水撃』と圧縮した水でものを切る『斬水』この二つだけこれから自分の形を見つけてくれるといいのだが。精霊術には決まった形が無い、なので自分で形を作ったほうが力を発揮できるのだ。

練習を重ね『水撃』に近い物でハイウルフを倒せるようになつたころ。

探査用の風の精霊がイリヤの声を拾つてきた。イリヤはなにか焦つているようだ。

「ソフィア今日は、ここまでにしよつ」

「はあ、はあ、わかりました。」

しまつたやらせすぎたか。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。早く足を引つ張らないようになりたいですから。」

別にソフィアも集団戦なら問題はないのだが、今はイリヤのほうだ、リリスの声が聞こえないのも気になる。

「ソフィア悪いけどついてきて、何かあったのかも」

「何かつて何ですか?」

「まだわからん、急ぐぞ」

俺は、駆け出す。迷わず森の奥に進みすぐご主人やを見つけた。

「大丈夫か?」

「ご主人様、・・・あの、はあはあ、その

息切れしているし、えらい慌てようだ。

「落ち着け、なにがあつた。リリスは?」

そこでソフィアも追いついてくる。

「ノワールサイに襲われて、今リリスが引きつけてくれてご主人様を呼んできてる」

俺は、ソフィアに聞いてみた。

「やばいのか?」

ソフィアの顔も強張つていた。

「ノワールサイは、Aランクの魔物です。単純な意味でBランクのリリスさんでは勝てない可能性が高いと思います。」

くそ、俺のせいだ一日目から一手中に分かれるんじゃなかつた。こういう依頼は、なにが起こるかわからないものなの。

「すぐに行く。一人はここで待つて

「どうやって行くのですか？」

道案内のことだらう。しかし、それには取り合わず。使う覚悟を、決める。

「聖痕を使つ

俺は、リリスのためにこの世界ではじめて聖痕を使つ」とを決めた。

風の聖痕を発動

「聖痕発動『嵐帝』」

俺の、周りを風が包む傍目には風の衣を着ていふように見える。発動と同時に俺の視界と感覚が広がつていく。

見つけた。

『嵐帝』状態の俺は、このオルムの森をすべてを見通すほどの探索範囲を持つリリスを見つけるのにかかった時間は、一秒ほどだ。呆然とする一人に

「ちよつと行つてくれる。『疾風』」

俺は、ものすごい速さで走り出した。覚えたばかりの氣を使い脚力をあげ、『疾風』で空気抵抗をなくし追い風を起こす、邪魔な木や魔物を風で吹き飛ばしながらリリスの場所に向かう。

二人の目からはすぐに見えなくなってしまった。

「あれが、ジン様の聖痕の発動」

「ご主人様の、本気」

二人は、自分達の近くにラビットドンが来るまで呆然と突っ立っていた。

見えた。

黒いサイの前からリリスを搔つ攫い嵐帝を解く。

リリスが突進を受ける寸前に、助けられた。

ギリギリだった。よかつた本当によかつた。後少し遅れたもうリリスに会えなかつたかもしれない。この世界ではじめて死を身近なものに感じた。

目を閉じているリリスの身体は、長時間の間、回避のみの体力より精神面の戦いだったからか、とても冷えている。

リリスが目を開けると、目を潤ませて

「ジンー！」

抱きついてきて頬にキスされた。

この状況でキスされたことに驚きながらも俺は嬉しくなった。特別になれた気がしたから。

「リリス、大丈夫？」

「うん、平気ジンが助けてくれたから。」

「じゃあちょっと待つてあれ片付けてくる。」

そういうて側に降ろす

リリスは残念そうにしながらも腕を離してくれた

「うん、待ってるね」

リリスが信頼の眼差しを向けてくるな
律儀に待っていた、ノワールサイの前に行き。

「おい黒いの。俺は、俺の大切な女を傷つけるやつを許さない。ち
ょっと残酷な死に方をしてもらつぞ」

次の瞬間ノワールサイが突っ込んで来る。俺は、右足を上げ地面に
落とす。

「『五重・土壁』」

俺とノワールサイの間に5枚の土壁が地中からせりだす。ノワール
サイはそのまま突っ込み土壁を粉碎するが4枚目で突進が止まった。

今度は両手を地面置いて

「『落とし土牢』」

ノワールサイの地面が陥没し円柱状に穴が開き、ノワールサイが落ちこちる。ノワールサイは、狭くて身動きがとれず這い出ることができない。

そこでリリスが近づいてくる。

「もう終わったのさすがだねジン。」

「いいや、まだだよ。言つたろ残酷な死に方をしてもらひつて

「な、何するの？」

「いひする、『炎蛇・六首』」

炎蛇を一分ごとに一匹ずつ穴に順次投入し長時間熱する。皮膚のおかげで燃えることはないが、熱は感じるだろつ。生き物なんだから当たり前だ。

つまり俺は、ノワールサイを生きたまま焼き殺したのだ。

ノワールサイは身動きも息も叫ぶことも出来ず悶えながら死んだ。

「ジンす」、「大好き」

リリスとしては、自分の好きな人が自分のことで怒ってくれたのが嬉しいらしく、抱きついてきた。俺も失ったかもしれない女の子を大事に抱き締めた。

しばらくした後、キスをして離れる。

「二人のところに戻るか」

「ちょっと待って。あれ冷やしてくれないかな?」

リリスが、ノワールサイを指す。俺は怪訝を思いながら水を出して冷やす。

穴に降りてリリスが近づき

「『採取』」

光がノワールサイの身体を包みこむ。するとノワールサイの角が根元で折れたり体から黒い鉱石が出てきた。

「この魔法で素材とか貴重な部分を取れるんだよ。まあランクB以上の魔物じゃないと碌な素材が無いから最初はいらないんだけど。Bランク以上の冒険者では、わりと必須なんだよこの魔法。」

そういうながら角を冒険者用の袋に入れる。この袋は、入れた物を自動で圧縮してくれる優れものだ。リリスのレイピアと同じ軽量化の魔法もかけられている。

次に黒い鉱石も入れていった。

「今度こそ行こうか」

と声をかけるとリリスは近づいて来て、腕を絡ませてきた。今まで一番いい笑顔で、

「そうだね。行こ」

そのまま俺達は来た道を戻った。

14話 三人の思い（前書き）

稚拙な文章ですが、よろしくお願ひします。

14話 三人の思い

戻った俺達を迎えたのは、温かい目線で俺とリリスを見る一人の姿だった。

「どうしたんだ、二人とも？」

「いえ、やつぱりこうなりましたか。」

「ジン様が助けに行つたのです。リリスが惚れても仕方ありません。」

「そのことが、まあ俺は、前から俺の女発言しているしな。リリスを見ると。」

俺の背中に隠れて顔を真っ赤にしてもじもじしていた。なにこれがわいい。

「今日は、譲りましょう」

「今日だけですよ、リリス」

リリスが小さく返事をした。

「うん」

今このテントには俺とリリスが向き合つて座つてゐる。

リリスが髪と同じくらい真っ赤な顔で一生懸命に

「あの、ジンお願い、抱いて」

俺は無言でリリスの手を持つて引き寄せ、キスをする。俺は、長いキスの後リリスのすべてを征服していった。

リリスは、冒険者なだけあって体力がありすべての行為を受け入れてくれた。

異世界フ田目

横で裸のリリスが寝ている。起こさないよつてその場を出る

今日で依頼一日目か、と思いながら鞘からテツを取り出します。取り出した小太刀に

「そりいえばお前、金属とかを吸収するんだよな。」

「【そりですよ、主】」

「これなんかどうなんだ?」

昨日手に入つた、ノワールサイの鉱石をテツの近くに置く。

「【これはノワール鉱石ですね。かなり良い物ですね、吸収しても
よろしいのですか?】」

「ああ、 かまわない」

「【それでしたら私をノワール鉱石の上に乗せてください】

「いいか?」

テツを、ノワール鉱石の上に置く。すると、鉱石が光だし粒子になつてゆつくり吸収されていった。

鉱石がなくなると、今度は、テツが光だし光が消えるとテツの刀身が綺麗な黒色になつっていた。

「へえ綺麗だな。」

「【ありがとうございます。】」

なんか、うれしそうだな。

「【切れ味も良くなっていますよ。昨日の魔物を切れりへりこむ】

「

それは、何気に凄いのではないか?聞いてみると

「【それだけ良質だったのです。倒し方も良かつたのでしょうか】」

「ああ、丸焼きだったもんなあ。たしかに傷なんかもなかつただろうな。」

「あとは、問題がひとつある。これを解決するために討伐に出る前に一度皆にあつまつてもらつた。」

「実は、これから討伐に問題がでてな」

「問題ですか？それはどのようだ？」

「聖痕を使ったときに見つけたんだが。ノワールサイが、奥のほうにまだいるんだ。」

「「「えええ！」」」

「だから、俺が先行して倒すから皆にはこいつら辺の魔物を討伐してほしい」

「わかりました、けど、大丈夫なんですか？Aランクなんですよね。」

心配そうにソフィアが聞いてくるそれに

「大丈夫だよジンなら、私を助けてくれた時も余裕そうだったし。」

「あくまでもリリスが答えた。」

「そうゆうじじやあ行つて来るね。と、その前にリリス『採取』の魔法教えてくれる」

「いいよ」

『採取』を教えてもらつた俺は、一人森の奥に向かつた。

・イリヤサイド・

ご主人様は、森の奥に行つてしましました。私達は、この辺りの魔物の討伐を任せられました。

今日もご主人様とあまり一緒にいられないのが残念です。

それにしてもあの聖痕の発動『嵐帝』といいましたか、あれは凄かつたです。精霊術師ではない私にも精霊の存在がわかるほどの精霊が集まつていたのです。

その後の探知も数秒で終わりました。後で聞いたら、風の精霊は探知が得意で、雷の精霊の次に早いそうです。

その力で救われた、リリスは、帰つてきたときすでにご主人様のことが好きになつていていたようでした。それにすごく可愛くなつていました。

このあたりの魔物を粗方片付けたころ、お昼になつていきました。ソフィアさんが

「そろそろお昼にしませんか？このあたりにはもうあまり魔物はないようですし。」

「の方は、ソフィアさん」主人様のこの世界に来たときから行動を共にしているそうです。羨ましいです。

「そうだね、ジンもまだかかるだらうし」

こちらはリリス、私の友達です。奴隸にされていたときにできた友達でいろいろ相談に乗ってもらいました。ご主人様という呼び方も彼女に教えてもらいました。

私もお腹がすいてきていたので

「私も賛成です。」

三人一致で昼食となりました。周りの良く見える場所に移動して、携帯飲料や果物やパンなど簡単な物を食べています。

実は、このパーティー料理の得意な人がいなかつたのです。ご主人様が一番まともではありましたが、簡単なものしか作れないしこの世界の食材に詳しくないと言つっていました。

いつかは、改善したいです。

「リリスさん、昨日はどうでした？」

いきなりソフィアさんが爆弾を投下しました。

「ど、どうしてなにが」

「夜の営みです。」

「えと、その、ねえ」

リリスはこの方面は、ウブですねえ。

「勘弁してください。」

リリスは、何気に一番ウブだと思います。

そういえば、

「そういえば」いつかって三人で話すのって初めてですね。」

「そうですね。いつもジン様がいましたから。」

「やうだよね、私達の中心って間違いなくジンだしね。」

「あつ」

ソフィアさんがなにか思い出したようです。大事なことなんか真剣な表情で教えてくれました。

「ジン様もいないです、伝えたいことがあります。これは、ジン様がこちらに来たばかりのことなのですが。

ジン様が、（ありがとうソフィアついてくると言つてくれて。俺実はこの世界では、一人ぼっちだつたんだよな）といつていたことがあるのであります。」

「それって」

「「」主人様」

声に、悲しみが混じります。

それは、どれほどの孤独なんだろう。わたしは『主人様の強さに田を奪われて、私はそのことに気づけませんでした。

「当たり前なんですけど、この世界にジン様が来たとき、縁のある人は一人もいませんでした。

ですから、仲間であり私と同じでジン様が大好きなあなた達に話したのです。そしてこれからも一緒にジン様を支えていきたいのです。お強いジン様の孤独を埋め、支えるのは一人では無理ですから」

「そうですね。もつと力をつけて役に立たないといけませんね。その点リリスはいいですよねえ、冒険者の知識を持っているから『主人様のお役に立て』

「でもあたし冒険者なのに戦闘では役に立てなかつたし、イリヤは治癒術があるじゃない」

「『主人様は怪我しませんし、してほしくもありません』

「私も攻撃の術がまだいまいちで。」

・・・

「『はあ』」

みんなでため息をついてしまいました。

「でも好きな人のためです。がんばりましょ。」

「そうだね」

「その点は、ここにいる人は大丈夫でしょう」

私達は、決意と結束を強い物にしてご主人様のため何ができるかを考えます。

日が沈む少し前にご主人様が帰つてきました。私達は三人ともご主人様のもとに走つて向かれます。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「お疲れ様です。ジン様」

「おつかれ」

「ただいま、みんな」

「ご主人様は最初驚いていましたが、すぐにうれしそうに笑つてくださいました。」

「ご主人様ずっとお側にいますよ。」

経過報告としては、昨日より順調に進んでいます。内容としては

1日目 072

2日目	242
内ジン	105
ソフィア	028
イリヤ	036

リリス 073

「これなら一週間より、はやく終わりそうですね。」

「ご主人様、あしたも頑張りましょう。」

14話 三人の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

15話 討伐報酬と幼い龍

異世界1-1日田

「お帰りなさいませジンさん。ご無事で何よりです」「俺達は、5日で依頼を終え6日田には王都に戻りそのまま、ギルドに来ていた。

「クレアさんお久しぶりです。これが討伐数です。」

そう言って俺は、ギルドカードを見せる。

クレアさんが俺のカードを、受け取りながら「二人に」。

「他の皆さんのも見せてもらつてよろしいでしょうか、内訳が計算に必要なので。」

三人も渡す。クレアさんが内訳を読みはじめた

「え」とノワールサイが、さん、た、い?」

「どうかしました? クレアさん」

「あの、欄にAランクの魔物があるのでが」

「ええ、倒しましたよ。あ、リリスに聞いたんですけど、素材つてここで買い取つてもらえるんですね。」

「え、ええ、はいそうです。能力ランクCでAランクの魔物を倒し

ますか、さすが聖痕保持者ですね。・・・ちょっと待っていてください。」

奥に戻り、貴禄はあるが少し疲れていそうな中年の男性が連れて戻ってきた。

「君がAランクの魔物を倒したのかい？」

少し不審そうにしている、仕方ないがちょっとムカつくな。なので証拠を出す

「ええこれがノワールサイの素材です。」

角とノワール鉱石を取り出す。

「こちらの方が例の聖痕保持者です。」

「・・・聖痕を見せてもらつてもいいかな？」

クレアさんが話しているのなら仕方ないか。

「どうぞ」

左腕の聖痕を見せる。

「先程は失礼しました。ギルドマスターのガルダと申します。突然ですが特例であなた達のランクを上げたいと思うのですがよろしいでしょうか、クレアの推薦でして。」

「はい？いいんですか？」

「ええ実力がある人に、依頼をどんどんやつてもいいためにたまにありますよ。受けいただけますか？」

「まあランクが上がるのにはありがたいから構わないが」

「それでは、Aランクを倒した、ジンくんはEランクからBランクに、イリヤさんとソフィアさんはEランクからEランクに上げたいと思います。」

「こきなりBですか、よろしいので？」

「ええそれだけ期待しているのです。それでは、わたしはこれで仕事がありますので」

奥に戻つていつてしまつた。すぐに行つてしまつたな忙しいのか？思わぬ形で昇格てしまつたな。

「それでは、報酬についてですねちょっと待つてください」

討伐した内訳は

総合討伐数	812
内訳	
ノワールサイ	003
ハイウルフ	332
グリーングリ	
ズリー	101
ラビットドン	296
バインドスネーク	0
80	
となつて	いる。

上乗せ報酬は

Aランク = 金貨一枚

Bランク = 半金貨一枚

Cランク = 銀貨一枚

Dランク = 半銀貨五枚

Eランク = 半銀貨一枚

Fランク = 銅貨一枚

Gランクの魔物はいないらしい

「上乗せ報酬としては、Aランクが3、Dランクが181、Eランクが628なので。超過の12体を除いて金貨三枚と半銀貨152枚分なので総額45210ギルになります。」

「　　「　　「　　「　　」」

「お金持ちです。」

「一週間で45000ギル、冒険者つて儲かるんですね。」

「いやいや本来Eランクの報酬じゃないからねこれ、普通なら10000ギル前後つてところだよ。」

リリスが二人の間違いを正している。
それを横目に

「素材の方はどうなりますか?」

「ちょっと待つてください、ええと、ノワールサイの角700ギル、ノワール鉱石ひとつ250ギルいくつ売りますか?。」

「?ほかにも使い道が?」

「ありますよ、鍛冶屋で加工したり需要の高いところで売ったりですね。」

角は3本、鉱石は14個ある（ひとつめすでに消費してこむ）
一応少し残すか

「じゃあ角を一つと鉱石を12個売ります。」

「はい、ありがとうございます。4400ギルになります。」

合計49610を受け取り

$$13500 + 49610 = 63110$$

持ち金63110ギル

「クレアさん」の辺りで一番いい鉱石って何ですか？」

「鉱石ですか？」

「金属ならなんでもいいですよ」

「それなら龍輝石がありますが、これは入手困難なんですね。」

「なぜですか？」

「昔はよかつたんですが、今は龍の縄張りなのです。」

いるのか龍が

「龍つてやつぱり強いの？」

「種類にもよりますが上の方は最強種に選ばれるほどです、知能も高く言葉も扱います。」

「ぜひ見てみたい会つてみたい。

それに協力を取り付けられれば大きな戦力になる。決めた

「それってどの変ですか?」

「・・・行くのですか?」

クレアとしては心配なのだろう

「行く」

「あなた達はいいの?」

クレアさんは後ろの三人を見る。

「どこまでもついていきます。」

「ご主人様の望むままに」

「右に同じ」

クレアさんがしぶしぶ。

「わかりました。教えますよ、龍のいる場所はノーバル山です。」

俺は今ひとりでノーバル山にいる。なぜ一人かというとクレアさんが

「ただしあそこは龍がいるのでBランク以上の人しか入れません。」

「「ええ~」」

「やつた」

リリスが喜んでるが

「リリスは、王都に残つて長旅の準備をしてほしいんだ。」

「ええ~」

三人には駄々をこねられたが何とか説得した。ベットの中で。

そういうわけで一人で山の頂上を日指しているのだ。ここに来るのに一日かかった。

ここは、龍がいること意外はいたつて普通のこところで。龍がいないこののノーバル山は、Dランクの冒険者が入れる山だつた。だから、強い魔物はいないはずなのだ、はずなのだ。

少し先で小型の龍とBランクの牛鬼三体が戦闘していた。いやどちらかというと牛鬼が小型の龍を襲つていいようだ。

どうするか迷つている間に牛鬼の持つ棍棒が龍を襲い直撃を受け倒れてしまった。

（悩むのはやめだ）
まず助ける。それからだ

決めたら即行動、駆けると同時に龍に止めをさそうとする牛鬼の顔に炎球を叩きつけ一番近い牛鬼の首を後ろから鉄餓刀で切り飛ばす。

あと一匹、こちらから手を出さなかつた牛鬼がここで状況を理解したらしく棍棒を振り下ろしてくる。これの攻撃に対し、右の鉄餓刀で受け流しながら風を纏つた左手で喉を貫く。首に穴の開いた牛鬼は、血を吐きながら後ろに倒れる。

あと一匹、最初に炎を顔にぶつけた牛鬼は、仲間が倒されたことで逃げようと背を向ける。その背を見ながら左手を空に掲げる

「『落雷』」

上空に集めていた雷の精靈で牛鬼に雷を落す。

『落雷』を受けた牛鬼は黒焦げになり絶命する。

ひとまず片付いたな。

龍の状態を確認しようと、後ろを向くと女の子になっていた。

「・・・何故に?」

氣を失っている女の子が答えてくれるはずも無く、疑問はなくならないが。

「まあまあ安全なところに移すかね」

近づくと顔が見えた。文句無しの美少女だ。驚くほど綺麗で長い銀髪だ。年は10歳くらいに見えるが龍であるなら見た目はあてにならぬのかわからない。

少女が横になれる場所を作りそこに寝かせ、精靈術で結界を作る。荷物の中で一番回復効果のあるポーションを少しづつ飲ませる。

俺にはこれ以上のことができない、駄目だなあ俺。

夜通し看病を続けいつの間にか寝ていた。

異世界14日目

座つたまま眠つていたらしい、田が覚めると少女は先に起きていた。どうすればいいのかわからないつとついた感じだ。昨日のこと思い出し、こちらから話しかける

「おはよう、体大丈夫？」

「は、はい。大丈夫みたいです。」

答えてくれた。さてどうしたもんか。

「良かつたよ、ポーションが効いたんだね。龍に効くか心配だったんだ。」

「あの、ありがとうございます。わたしは、ティリエルと申します。

」

「そんなにかたくないでいいよ。俺はジン、冒険者だ。」

「あの、何で助けてくれたのですか？それにこんなに親切に」

「うーん、何故と聞かれても特に理由は無いんだよなあ。牛鬼がムカついたからかな？親切にしたのは、君が可愛かったからかな」

「な、なな、なんです。いきなり」

真っ赤になつて慌てている。初々しい反応だ。

「こや俺は、君の問い合わせただけなんだけど」

「むう、変な人です。それだけ助けるなんて」

「こやこや、美少女は貴重だよ、宝だよ」

「も、もひこいです。それでなにかお礼がしたいんですが」

「そんのこよ。」

「ナハニハナハナハナ」

身を乗り出さうとして

「イッ」

痛みに顔をゆがめるティリエルに

「じゃあお皿までは安静にしておいてくれると助かるかな」

「わ、わからました。そつせてもうこます。」

やはり本調子ではないようだ。不服そつではあったが横になつてくれた。

「 もういいえれば龍つて、なにが食べられるのかな？」

「 人と同じ物を食べますよ。」

「 それじゃあ軽く食事にしよう。」

持つてきた食べ物の内、果物類を中心に渡す。

「 いいのですか？」

「 いいのいいの。 もういいえればこれからどうある?」

「 父の所に戻るのと思つます。 心配してくるでしょ？」

「 もうか」

そういうえば俺つて龍に会いに来たんだつけ。 ティリエルに頼んでみよつかな、と考えていると。

「 あの、一緒に来てもらえませんか？」

その後、いつしょにティリエルの父親の所に向かうことが決まった。朝食を食べた後にポーションをもうひとつ飲んでもらい、いくらか良くなつたがまだ体が痛むようなので、俺が背負つて行くことにした。

背負われたティリエルは、この時、道を指差しながら
(背中広いです。強いし優しい、私にはいないけどお兄様とはこんな感じなのでしょうか。)

なんて暢気なこと考えており、この後起こるであろうことをまったく考えていなかつた。

ティリエルの言つとおりに進み、開けた所に山小屋が見えてきた。
山小屋?え?

「もしかしてあれ?」

「そうですね。」

なんというか。イメージが崩れていつた。

「家なんだね」

「わたし達を何だと思つてるんですか。私達は、人の姿になれますから、家にくらい住みます。それに人の方が燃費もいいんですよ、怪我したとき人の姿になつたのもそのせいです」

それとかと俺が疑問をひとつ解消していると。山小屋の扉から

「ティリエル、 いつたいど・・・に・・・」

渋いおっさんが出てきた。おそらくティリエルの父親だらう。心配していたのだろう慌てて出てきた、しかしそのティリエルの父親の言葉が途中から小さくなつていつて最後は俺に焦点を合わせる

「貴様の仕業か——」

「・・・面倒そうな父親だね。ティリエルちょっと降りてもうつていい」

「人の娘を勝手に呼び捨てにするな——」

「落ち着いてください、お父さん」

「だれがお父さんだ——」

最後はちょっと遊んでみた。

「貴様殺す」

ティリエル父は、いきなり銀色の光に包まれ丸い光の玉ができる。それが一気に大きくなつて一階建てくらいの大きさで光がはじけた、すると中から、いかにも強そうな銀龍があらわれた。銀龍は、この世界でも有数の力を持つた存在らしい。たしかに、彼から受けるプレッシャーは、戦闘時の精靈王たちに近いものを感じる。手加減なんてできそうにない。

「ティリエル急いで離れて、ちょっと派手な喧嘩になりそうだ。」

「ダメです。死んじゃいます。私の方が」

泣きそうになつてゐる。まつたく父親の癖に何してゐんだ。
ティリエルの頭を撫でながら

「大丈夫どつちも死んだりしないから」

いざとなれば切り札もある。

「信じますよ。」

「信じて。」

ティリエルは急いで距離を取る。

「娘といふ霧囲氣をつくるな——」

「うつせー、子離れの時間だ親バカやうつ」

聖痕使いと銀龍の喧嘩が始まつた。

「『七重・土壁』」

まず土壁で俺の姿を隠すが、すべての土壁を尻尾の一振りで破壊される。狙いの定まつていない尻尾をなんとかよけて、土煙の中側面に回り込む。

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇、四匹で多角的に攻撃する。三匹直撃した。

が、まったくの無傷、しかし驚いてはいた、俺が一種類の精霊を使つたことに対してだらう。それでも銀龍はその驚きを押し隠し、避けずにつくつた時間を使って魔法を使つてする。

「駆けるは魔の風、無数の刃となりて我が敵を切り刻め『トルネード』『ド』」

チツ、口を狙うんだつた。といふか喋れるんだな。放たれた『トルネード』は広範囲に回転する風をぶつけてくるものようだ。その中に、風の刃が無数に存在する。詠唱そのままだな。

これは防ぐのも避けるのも難しい。なのでもうひとつ的方法を取つた。

次の瞬間俺のいた場所に『トルネード』が直撃する。風が止むと俺は、

地中から這い出た。

つまり、地中に潜つたのだ。それを見た銀龍はそれならばとブレスを放とうとしている。

このバカがこいつクラスの龍がブレスを放てば周りが吹き飛ぶぞ、ティリエルのこと忘れていいな。

仕方なく

「火の聖痕を発動『炎王』」

体を炎が包み炎の鎧を着ているよりも、ジンが燃えているようこも見える。

銀龍はまた驚きながらもブレスを放つ、規模は小さい意外と冷静か
？それとも悔つていいのか？

「『陽炎竜砲』」

俺はそのブレスを、超高温の熱線で全力を持って迎え撃つ思ったよ
りブレスの規模が小さかったため、一瞬の拮抗の後、熱線がブレス
をお押し返し銀龍に向かう。

銀龍は、自分に向かってくる熱線を見て、ブレスを中断し熱線を避け
る。熱線は後ろの森に落ちクレーターを作る。

「避けんな！」

「避けるわ！」

ちつ、炎蛇はよけなかつたくせに。

あゝあ、銀龍の後ろの森が火の海だよ。

「貴様、聖痕持ちかそれに複数の精靈術を扱つ。人間か？」

「失礼なやつだな。俺は異世界人だ。」

「ほう、いっそその方が納得ができる。面白い、良からう次の攻撃
を凌いだら娘との仲を認めてやる」

まだ勘違いしてるよ。まあ親に先に認めてもらひの悪くない。

俺は『炎王』を解除し、

「いいだらう受けてたつ。土の聖痕を発動『岩皇』」

『岩皇』は『炎王』とは違い見た目は変わらない。しかしそく見るとジンの足が地面に沈んでいる。ジンがとてもなく重くなっているのだ。

「ほかの聖痕もあるのかますます面白い受けてみる、銀龍の最大のブレスを」

「受けてたつ。全力防壁『土鉄岩金壁』」

これは、土壁・岩壁・鉄壁・金剛壁の壁を最大の大きさでつくる術で、もつとも防御力が高い。

完成と同時にブレスが放たれる。土壁が岩壁が受けて威力を散らし鉄壁と金剛壁が防ごうとする。

金剛壁に亀裂が入った。地形すらも変えるだろう凄まじい威力。しかしこの術の最大の特徴、

それは、防壁の維持が必要ないことだつまり。

「雷の聖痕を発動『雷神』」

『雷神』は雷が体を包みジン自身が雷のように見える。

「『タケミカヅチ』」

雷で螺旋状の槍を作り出し、ブレスが防壁破ると同時に投げる。雷槍は、ブレスの中心を突き破つて進む。勢いは止まらず銀龍は、直撃する前にまたも避ける。

「どうよ」

「・・・完敗だ。まさか人に押し返される、いや貫かれるとは思わなかつたよ。」

そう『タケミカヅチ』は、雷の槍を回転させて一点を貫く技だ。

「いいや、まだだ、あなたに見せたいものがある」

「まだ何があるのか?」

「ある。」の後話すことを円滑にするために見といてくれ

「いいだろ?」

俺は、銀龍に切り札を見せる。

今日の前には、誤解を解いたあとティリエルと銀龍あらためアルベルトさんに、魔物の大侵攻についてと異世界人であること、精霊界で修行しすべての聖痕を持つていることを話し終わったところだ。

「そのための切り札か。それでここに来た目的はなんだ? 大体予想はつくが。」

「まずは、アルベルトに戦列に加わってほしいんだ、頼む

俺は、頭を下げる。

「・・・いいだろ？ 我はしばらくの間ここにいるから、必要なときには呼んでくれ。」

「いいのかそんなにあつたり、龍でも危険な戦いかもしねないぞ」

「かまわない、ジンは我を凌駕しているし、全力をぶつけ合つた仲だ。龍は強い物に従う。それに私はジンと友になりたいと思つていいる。」

凌駕か、確かに切り札の俺は反則みたいなものだからな。しかしこれはありがたいので。

「ああ、これからもよろしくアルベルト」

「そこ」でだな。ひとつ頼みがある

「なんだ？」

全然予想がつかない。

「ティリエルを連れて行つてやつてほしい」

「なにを言ひ出すのです。お父様！」

「はつ？ お前ティリエルのことであれだけ怒つてたじやないか。」

「まあ、そろそろティリエルにも世界を見せるべきだと思っていたんだ。ジンなら安心だ。それにティリエルもお前のことを好いてい

るよつだしな。わうだらうティリエル?」

「うう……はい」

頬を染めて小さく頷く。

「えと、俺複数の女性と関係持つてますよ。」

「龍はそんなこと気にせんよ、なあティリエル。」

「はい、その、連れて行ってください。お願ひします。」

「いや、でも、まだ年齢的」

「私これでも15歳です!」

15歳なのか12歳くらいに見えるぞ、でもかわいいしつか。

「わかった。ティリエル一緒に行こう。」

うれしそうな表情を浮かべた後、恥ずかしそうに頼んできたのが

「あの、お兄様と呼んでもいいですか?」

これはいい、可愛すぎる、アルベルトの前なのにティリエルを抱きしめてしまった。

抱きしめられて赤くなつたティリエルに

「……からお願ひしたいくらいだ。よろしくテイリエル。

「はい、お兄様」

「わわわ——」

アルベルトが暴走しそうなるが、

「お父様！またお兄様に迷惑をかけたら承知しませんよ。」

「うううわかったよ、すまなかつたよ」

「本当に反省していますか、お兄様でなければ死んでいたんですよ。」

俺としては、この世界で始めて本気で戦闘をできて楽しかったのだが、ティリエルは先の戦いについて父に対して少し立腹らしい。旗色が悪くなつたのを感じたのか

「そういうえば先程、まずは、といつていたね。まだあるんじゃないかな？」

話を変えてきた。なのでもうひとつの方をきりだす

「竜輝石つのを探している。ついでに入手もしたい。知っているか？」

「ああ、知つてゐしちょひどいあるぞ。もう必要ないからあげよう」

「もう必要ない？」

「竜輝石は幼い龍が成長するのに必要な物でな、人間で言ひ栄養みたいな物だ。そしてティリエルには、もつ必要ないからな。」

それでこの山に住み着いていたのか。それより少し前は、必要だつたのか。

引き出しから袋を取り出し、渡してきた。竜輝石がいくつか入つているようだ。

これが竜輝石か。竜輝石は、自分で光を放つてゐる宝石の原石に見えた。光が強いほどの物らしい。

「そりか、ならありがたく貰おひ。」

竜輝石の入つた袋を冒険者の袋に入れる。

「今日は、泊まつていいくといい、戦闘で疲れただろう。わたしも今すぐ娘と別れるのはつらい。」

後半に本音が出でてゐる。まあ聖痕を三つも使って疲れているのは事実だから。

「やうやくもひおうかな

「それでは、もう遅いですしお食事にしまひう。」

ティリエルの雰囲気に反し料理は丸焼きといつワイルドなものだつた。こんな山奥ではしょうがないか。

夜、枕を抱え黒いひらひらした寝巻きを着たティリエルが、

「お兄様、あの一緒に寝てもいいですか？」

本当に可愛いなティリエルは、

「いいよ、おいで」

この夜は一緒に寝た。ティリエルは抱きつき癖があるので、腰に腕を回し、脚を俺の脚に絡ませてきた。

この日は俺もティリエルを抱き枕にして寝た。寝ただけだぞ。だってアルベルトいるしな。

16話 聖痕使いVS銀龍（後書き）

「指摘・感想等ありましたらよろしくお願ひします。」

17話 小太刀が少女

異世界15日目

目が覚めると綺麗な銀色の髪があった、下を向くとティリエルの寝顔があった。

起こすのも忍びないので起きるまでティリエルの感触を楽しむことにした。

しばらく楽しんでいるとティリエルが起きた。

「おはよう、ティリエル」

「おはようございます。お兄様」

寝ぼけ眼で、すりすりしていく。徐々に、目が覚めてきたのだろう。恥ずかしくなったのか顔が赤くなってきた。逃げられないように頭を抱きしめる。

「あうあう」

ちょっととやつすぎたかな。開放してあげて

「起きよつか」

「はー」

「それでは、お父様行つてきます。」

「行つてらつしゃいティリエル。ジン、ティリエルのこと頼んだよ。」

「ああ、大事にするわ。」

こうして俺と顔が赤いティリエルは、王都に向かつた。

異世界16日目

王都に戻つたのは昼過ぎだ。集合場所の宿に行つてみたが、皆出かけていたのでもうひとつ一人部屋を取つて部屋に向つ。

部屋に入つてテツを取り出す。

「【主、どうかしましたか?】」

「ひや」

ティリエルが驚いている。一人しかいないはずの部屋で突然知らない声が聞こえたのだから当然だろう。

「こいつは鉄餓刀のテツ、俺の小太刀だ」

「【初めまして、ティリエルさん。】」

「は、初めまして、テツさん」

「テツいい物が手に入つたんだ。」

竜輝石を取り出しそ。

「【竜輝石ですか、吸収してもいいですか?】」

なんかテツの声がはしゃいでいるように感じる。

「いいぞ」

テツと竜輝石を重ねる、いつかのよに竜輝石が、粒子になつて吸収された。黒い刀身が変化して白い龍の模様が現れた。しかし、今回はそれで終わらずに光が強くなつていき光が球体のようになつた。アルベルトが銀龍になつた時のものに似ている。光がはじけてなくなつたとき裸の少女が現れた。

「主二つ目で人の姿になれました。」

「・・・テツか?」

「はい。テツですよ主。」

にっこり笑つて抱きついてくる

「テツまず服を着ようかティリエルも驚いてる。ティリエル服を貸してあげてくれないかな。」

「『主人様帰つてきたんですか。』

「ジン!」「ジン様」

三人が来てしまった。

簡単に今の状況をいふと、龍のいる山から戻つてきた主が一人の美女を侍らせていてしかも片方は裸だ。どう説明しようか。

「『主人様、龍の山に行つたはずでは?』

「どうして女の子を侍らせてるんですか?」

「どうして裸なのかな?」

「・・・まずはテツ服着て。」

何とかなだめてベットに座つて説明を始める。

「こつちはテツだよ。」

「えつ、テツさんなんですか」

「そうだ、俺も驚いてな。竜輝石を吸収させると人の姿になつたんだよ。」

「あらためて、はじめまして主の刀で所有物のテツです。ハーレム加入を希望します。」

テツがすかさず俺の膝の上を占拠する。

「歓迎するよ。」

「こんな子だつたんだ」
「わかんないもんだね」
「羨ましいです。」

「」
「」
「」

「わ、わたしもハーレムに入りたいです。」

「ティリエルが何故か焦っている。テツのせいか？」

「もちろんだよ、おいでティリエル。」

ティリエルは、うれしそうに俺の右隣にやつてくる。

「まあもうあきらめていますが」「
「そうだね、目を離した数日で一人も、いやテツは元からいたんだ
つけ。」

二人はあきれていた。もう一人は

「わたしも」
「主人様の隣に行きます」

といつて左隣に座つて服の袖を摑んできた。

この世界の女の子は、本当にハーレムに抵抗がないんだな。力が第一の世界だからか？ それとも側室があるからおかしくないのか？ まあいか俺にとつていいことには変わらないからな。

「それじゃあ細かい事情を話すよ。」

説明が終わると

「龍にまで勝つたんですか。それも成体に」

「それもティリエルの父親つてことは銀龍だよね。龍の中でも上位のはずだよ」

「ご主人様、凄いです。」

「本当に凄かつたんですよ。」

「ええ、主は凄いです。」

後半凄いしか言われていないな。

「これからのことについてなんだが、リリス準備の方はビビつった。」

「

「ぱつちりだよ。長距離移動だから馬車と馬を買ったよ。ほかに保存食や必要な装備も。それで全部で15000ギルくらいだったよ。馬車は、ソフィアとイリヤが練習したから多分大丈夫だよ」

「ありがとうございます。三人とも」

「ふふん、夜楽しみにしているよ」

「久しぶりですね」

「ご主人様、たくさん可愛がってくださいね。」

三人一緒にですか。それは楽しそうだ。

外はもう夕飯時だ。

「それじゃあ飯に行こうか。明日はギルドに行くからね。それでクイント皇国に行く日を決めようと思つ。」

異世界17日目

目が覚めると身動きが取れなかつた。右腕をリリスの、左腕をソフィアの胸に抱えられている。体の上にはイリヤに占領されている。皆裸だ。左右の二人にいたずらする。

「んつ

「あつ

起きたのでいたずらをやめて。

「おはよつ」一人とも

「おはよつ」やれこます。ジン様

「おはよつジン」

解放してもらつた両腕でイリヤにいたずらじて起きる。

「やん」
「おはよつイリヤ」
「おはよつ」やれこます。主人様

まだ半分寝ているな。

とても刺激的な朝だつた。

ティリエルとテツを起こして食事を済ませてギルドに向う。

ここ数日の出費は

宿泊費	1500ギル	食費	1000ギル	その他	610
ギル	合計	3110			
63110	- 15000	- 3110	= 45000		

今の持ち金45000ギル

ギルドについたが何か慌ただしいクレアの姿も見えないので。
ほかの係りの人に頼んでギルドカードの更新とティリエルのギルド
カードを作つた。

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

・・・神のやつ義妹つてなんだ義妹つて。

それにしても『幼い銀龍』か幼いがとれるときが楽しみだな。

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主
奴隸の解放者 精霊術師

俺は、気力と魔力が両方ランクが上がっていた。そういうえば牛鬼と戦つたときよく動けたんだよな。
気力が上がったおかげだったのか。

「ジンは、成長も早いね。まあAランクの魔物とか倒しちゃつてるから当然っちゃ当然だけど。」

「五人に、増えています。人化してテツさんも含まれたんでしょうね。」

「はい、次ソフィアとイリヤ」

名前	ソフィア	女	18歳	人間
ギルドランク	E			
能力ランク	総合C	気力D	魔力B	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	水の巫女	精霊術師		

名前	イリヤ	女	17歳	エルフ
ギルドランク	E			
能力ランク	総合C	気力D	魔力B	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	ジンのメイド	治癒術師		

「うんうん、順調だね。こっちが普通だよ
「二人の能力が綺麗に並んだな」

「リリスは」

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

「変化ないな」

「まあBランクまで行くとCやBランクをたくさん狩らないといけないからね」

ギルドカードの確認が終わつたこと、懐かしい声が聞こえた。

ジークだ。もう一人たしか俺が一撃で気絶させたやつだ。

「ジンくん久しぶり」

「誰なんですか?」

「そういえばソフフィア以外初めて会つたな。」

「ああ、彼はジーク。王都に来るときに知り合つたんだ。」

「彼女達は、俺の連れで」

「ソフフィアです。ジークさん久しぶりですね。」

「イリヤです。『ご主人様のメイドをしています。』

「リリスよ。肩書きは一応ジンの護衛、ほとんどいらないけど」

「ティリエルです。お兄様に最近同行させてもうひとつになりますた。」

「テツです。」

「「れは、」」「寧に俺はジーク」」「はカイル一応俺の相棒だ」

「何だよ一応つて。あの、ジンあの時はすまなかつた。」

「こや別にこよ

「やうだ。そんなことよつジン早く王都を出た方がいい

「？何故だ、その内出るつもりだつたんだが

「まだ、正式に公表されていないが、おそらく戦争が起る。ギルドが騒がしいのもやのせいだ」

「の國の王は、どうまでバカなんだ。

「・・・ビ」とやるんだ?」

「クイント皇国」

「待て、クイント皇国は、ソリソリで一番強いんだろ?。戦争なんかして勝てるのか。」

「いいや。勝てないだろ?」

「なら何のために

「奴隸を作るため、だろ?」

「わけがわからん。奴隸もなにも負ければ国がなくなるだろ」

「・・・かつてこの国は、自分より大きな国を倒したことがある。その方法は相手の国の奴隸を軍のいたるところに配置しての特攻だつた。兵は、戦えなかつた。戦えた者も心を病んだ。」

「・・・」

俺は怒りで一瞬訳が分からなくなつた。この国はこの世界はこのままで酷いのか。許されるのか。

「たぶん、勝つことが目的じゃなくて、クイント皇国の奴隸を得ることが目的だろ? そうなればクイント皇国も下手に動けなくなる。」

「ジンさんー戻ってきたんですね。」

クレアさんがギルドの外から入つてきた。

「お願ひです。助けてください。」のままでは、この戦争は泥沼化します。」

さつきの説明だけなら長期戦にはならないと思つたのだが、まだ何があるのか。

「ジンに「う」とですか?」

「「う」では、ジンさんだけで奥に来ていただけませんか」

「わかつた。皆は待つてて」

奥に来てと言わってきたが、そこはギルドマスターの執務室だった。もちろん俺を迎えたのはこの部屋の主ギルドマスターのガルダだった。クレアもいる。

「よく来てくれた。立ち話もなんだし座つてくれ」

正面のソファーを指しながらの言葉に力がない。前会った時も疲れてるのかと思つたけど今は、度をこしている今にも過労で倒れるんじゃないかとすら思う。俺がソファーに座ると

「すまない、ギルドカードを見せてくれないか」

あまり見せたい物ではないんだが

「どういだ」

しばらく俺のギルドカードを眺めると突然頭を下げて

「頼む、力を貸してもらえないだろうか」

「頭を、上げてくれ。まず何があつたのか何が起こるのかを教えてください」

「そうだな、单刀直入にいづ。この国の愚王が大使として来られる予定の姫を捕らえよづとしている。」

「……そんなことをすればクイント皇国は引けなくなる。なるほど、泥沼だな」

あきれて怒りを忘れてしまった。

「ええ、何とか救つてお国にお返ししなければいけないです。だが我々では大使達の居場所が分からぬのです。力を貸してくれないか？」

「わかつた、協力する。わかつてゐることは？」

「ほとんど分かっていないのです。」

それなり

「少し調べてみましょ。」

部屋の窓に近づき

「『風見鳥』」

どこにでも届そつた鳥を二羽ほど作り出す。風の精靈に形を取えて偵察を行う術だ。これなら景色も見えるし音も聞こえる。

「それは？」

「偵察用の精靈獸です。」

そして言おつか迷つたが一人に

「……場合によっては、俺はこの国を滅ぼしますよ。」

「それもいいでしょ、この国は、たくさんの犠牲で成り立つ国じゃなくなるべきなのでしょ。」

「わたしも、別にこの国は好きではありません。ジンさん、思いつきやつちやつてやつ。」

これで決まった。國民が滅べといつていいのだ。決まりだ

この國、グーロム王國には消えてもらひ。

17話 小太刀が少女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

「ヒムグーロム王国の王都にある王城。

贅を凝らした広い部屋の豪華な椅子に豪奢な服を来た男が座っていた。周囲には、見事麗しきの奴隸の女性を侍らせていた。

若い兵士が、伝令に来た。

「申し上げます国王陛下。」

「話せ」

「クイント出身の奴隸の選別はまもなく終わります。その、その後国内のクイント皇国出身の者を奴隸にするとありますか、よろしいのですか？」

「余に意見するのか？」

「い、いえ決してそのようなことは」

若い兵士は、慌てて弁明する。

「しかたない、余自ら話してやる」

国王は、すばやじことのよつて

「此度の計画は、クイント皇国の中の皇女レティーシアを捕らえ奴隸とし戦争の旗頭とする。そして今回の戦争でクイント皇国の方を削ぎ、

手にいれた奴隸で最近うるさいクイント皇国を黙らせる、というも
のだ。そのために多くのクイントの奴隸が必要なのだ。しかし数が
少ないならば作るしかないだろ？ 奴隸を。何か意見があるか？」

「いえ、そのようなことは、ありません、陛下の深いお考えに感服
いたしました。」

このとき若い兵士の中に、
(そんな理由で奴隸を作ればこの国から人が出て行くのではないか、
皇女を奴隸にしたら皇国との泥沼の戦争になるんじゃないか等疑問
は尽きないが、ここは追従するしかない)
その言葉を聞いて満足したのか

「さがれ」

若い兵士を下がらせ、別のこと口にする

「おい、レティーシアの方はどうなつている？」

側のふくふく太った文官風の男が

「ラシード将軍に騎士団500名を変装させて持たせ捕獲に向わせ
ました。今頃コルテス地方の辺りでしょ？」

この王城内の奴隸以外のほとんどの人種は、こんなのはばかりである。
他国の姫を呼び捨てにしたり、捕獲などとほざくのが当たり前なの
だ。

「それでは、期待しよ？ かの姫騎士を奴隸として迎える日が楽し
みだ。」

といやらじい笑みを浮かべた。

これを精靈で作られた鳥が一部始終を見て聞いていた。

といひ変わってギルドのギルドマスターの執務室のジン。

「なんだ、これは！。皇国を黙らせるこれだけのために戦争をするのか、そんなことをすれば最悪の場合共倒れだぞ、負けなくとも、この国から人は離れる。この国は、何もせすとも滅びる。混乱だけを残して」

「それがこの国の末路ですか」

少し寂しそうにクレアさんが聞いてくる。

「ああ、この国は、終わる。だから最もいい形で終わらせる。終わらせでみせる。」

決意を込めて一人を見る。

「手を貸してもらいますよ。ギルドマスターあなたの依頼だ。」

「任せてくれ。どうすればいい？」

「まずは、後見人になつてもらつ。一つ目はこれからクイント皇国に行くにはどうしたらいいか教えてくれ」

「後見人の件は任せてくれ。クイント皇国に行くには二つの道があります。」

「ならその二つの道が描かれている地図はあるか?」

「クレア取つてくれ」

クレアさんが慌て部屋を出る。

「あとこの世界の戦争を簡単に教えてくれ。」

ギルドマスターに、簡単な説明を受けるが、ほとんど予想の範疇だつた。飛び道具が魔法になつていて、兵戦が基本らしい。

「持つてきました。！」

「ありがとうございます。コルテス地方とはどの辺りですか?」

「！」

ガルダが指したのは、王都とそんなに離れていないところだった。近いかなりやばそうだ。だが、離れていないとはいってもおそらく徒歩で一、二日はかかる。まだ間に合つかもしれない。

「！」の地図は借りりますか?」

「本来はよくないのですが。持つていてください。」

「最後に、俺のことは内密にお願いします。」

「わかつた」

「わかりました」

「では、姫様を救いにいきます。」

皆のところに戻り開口一番に

「すまん、またちょっと出る。ティリエルだけ付いて来てくれるか、テツは小太刀に戻つてくれ」

「「「またですか」「」」

三人が泣きそうになる
帰つて来たばかりだからな。

「すまん緊急なんだ。三人は、クイント皇国の皇都に向つてくれ。ジーク突然で悪いが、三人の護衛をしてくれないか、金は払う。」

みんなの表情が変わる。この情勢での緊急だ碌な事ではないだろう。
「お金は、いいよ。もともとこの国を出るつもりだったんだ。借り
も返したいしな。」

「じゃあ頼む、お前達は皇都に行くのに一番短い道を通つてくれ。」

むくれる三人の頭を撫でてやる。

「すまないな、すぐに出ることになつて。」

「早く来てくださいね。」

「怪我しないでくださいねご主人様」

「いつか絶対ジンに「ついて来てくれ」って言わせてやるから

「楽しみにしいてるよ。あれテツは?」

「【主】に【】」

テツが座っていた椅子に小太刀があつた。

「ティリエルできるだけでいい俺を乗せて飛んでくれないか?」

「お兄様、喜んで」

嬉しそうに言つてくれる

「ありがとう、時間がないすぐに出る。いいかい?」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ行こう」

外に出て三人に振り返り出てきた三人をまとめて抱き締め。

「行つてくる。」

「はい。行つてらっしゃいませ。」

三人が見送つてくれる。

龍化したティリエルに乗つて飛びだつ。

なんの障害物もない空を飛んで目的地に向かつ。

一時間ほどでティリエルが疲れ始めていた。

まだ幼く体もあまり大きくないのに良く頑張つてくれた。

一度地上に降りて方向を確認してから、ティリエルを脇に抱えて走り出す。

ランクAに上がつた氣力を使って『鬪氣』（全般的な身体能力の強化）を使う。

一時間ほど走り。

コルテス地方の手前で

「ティリエル飛べるか？」

「なんとか、乗つてください」

「いやここからは探索もやるから、自分で飛ぶよ

「飛ぶ？」

ティリエルが、きょとんとしている。

「聖痕発動『嵐帝』」

精靈を使ってコルテス地方全てを見渡す。いた、かなり街道をそれている。逃げている最中のようだ。追つているのは百人ぐらい、別のところに四百人いる。

追っている方を潰すことにする。

「ゆっくりでいいから付いてきて。すぐに降りたらダメだからね。終わったら俺が呼ぶから」

そうティリエルに注意して

『嵐帝』の力で人の身で空を飛ぶ

追い着いたときには、もう乱戦になっていた。

人間が入りに乱れているこれでは白兵戦しかできない。テツを抜いて空から落ちるように飛ぶ。

三人で一人に攻撃する山賊風の男達がいたので、真ん中の男を、空から地上に落ちるのに合わせて肩から斜めに切り殺す。男の体は切った軌跡にそつて斜めにずれ血を噴き出して絶命した。

着地と同時に一人殺し、立ち上がって右の男を小太刀で首を切り飛ばし、左の男は風を纏つた左手で首を突き刺す。

三人を瞬殺した俺は、攻撃を受けていた奴を見ると

ジリッ

警戒されていた。しかたない突然空から降ってきたのだからな。

驚いたことに、助けたのは女だった。女騎士だった。美人だが今は時間が無い

「助けにきた。今は、先にコイツらの殲滅を手伝つて欲しい。」

女騎士もそうするべきだとわかっていたのだろう。頷いて

「わかった。感謝する」

俺は、近くの山賊風の一団に突っ込んでいく。女もついてきた。一番近い敵を小太刀で切り、別の者を炎で燃やす。囮まれそうになると風で吹き飛ばす。三方向から攻撃されれば水で防いだ。その間に、俺は刀技の実践を重ね洗練されていく。

戦いの中、刀神との修行を思い出し、徐々に精霊を使わずに回りの敵を片づけるようになり、精霊は周りの援護につかうようになっていた。

三人を相手にしていたことから見当はついていたが女騎士もやはり相当の手練だった。

長剣を巧みに使い危なげなく敵を倒している。一対一なら不覚を取ることはない様に見えた。女騎士ひ援護はいらなかつた。

数が減り不利を悟つた敵は逃げ出した。

「『風刃』」

敵味方がはつきりしたので『風刃』で逃げる敵を、横に真つ一つにして殺して戦闘は終わつた。

これからが問題だ。残つた周りの人間は、感謝はしているが、その強さに得体の知れなさを感じているようだ。時間がない早めに話をつけたい。まず、どうやって皇女に会うかが問題だ。そんな時、女騎士が近づいてきた。

「君、一緒に来てくれないか？話を聞きたいんだ。」

この状況で話しかけてくるのだ、少なくとも話は進むだらう。

「わかつた。ちょっと待つてくれ、ティイリエルー！」

「はーい

空から龍が降りてきた。みんなが驚き身構える中、ティイリエルは空中で人の姿に戻る。

落ちてきたティイリエルを受け止めた。

「お兄様、疲れました。」

周りは唖然としていた。

「君は龍なのか？」

「俺は違うよ」

女騎士は訳が分からなくなつたようすで

「とにかく来てくれ」

考えることをやめ連れて行くことにしたらしい。

馬車に案内された。馬車は、派手さはないが質がよく皇女が乗るのに恥ないものだった。

中に案内されて、女騎士が

「「」の者が、先程助力してくれた者です。」

俺のことを中の人に紹介する。馬車にいたのは、ドレスを着た令嬢が一人とメイドが一人、護衛が一人と俺を連れてきた女騎士の五人の人間いた。

メイドが喋る。

「此度のご助力まことにありがとうございます。主が何かお礼をしたいと仰いまして。こうしてお呼びさせていただきました。」

お礼をするのに呼びつける必要はない、つまり

「ですが、その前に何故こんなところにいたのか、お聞かせ願えませんでしょうか？」

こっちが本命だろう。ここは街道を外れていてたまたま通りかかった、ということはありえない。

目的があるはずだ、と思っているのだろう。

時間がないさつさと終わらせよう。令嬢を見て

「あなた方を助けるためですよ。皇女様」

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

『』挿描・『』感想等ありましたらよろしくお願いします。

「あなた方を助けに来たのですよ。皇女様」

五人全員に動搖がはしる。それを見て確信した。

「よかつた。あなた達が皇女様ご一行であることは間違いなさそうだな。」

「お前は何者だ？」

「俺は、冒険者のジン。グーロム王国のギルドマスターに頼まれて助けに来た。」

俺は皇女様といいながら。口調を変えなかつた。ティリエルは、戸惑つていたが、俺は改めなかつた。案の定、

「き、貴様こちらのお方を皇女様と知つてゐるなら、その口調を改めろ！」

護衛の男が怒りだす。

これからこのことを考へると俺は皇国とは対等でなければいけない。従つてつもりはなかつた。

「断る、俺はあんたの國の民ではない。公の場ならともかく、この場にその必要性を感じない」

「なんだと！」

「落ち着いてくださいレオン卿。ジン殿あなたギルドマスターの部下なのですか？」

「訝しげに見てくるメイドさん。にしても皇女は喋らないなお飾りなのか？」

「いや、違うあくまで対等な関係だ。依頼主ではあるが」

ギルドマスターは基本一国に一人しかいない。そして冒険者を束ねる存在でそれなりに力があるだが、俺はそのギルドマスターと自分を対等だと説明した。

「じゃあ、あなたは」

「ちょっと待つて、時間がないんだ、まだ続くかな？」

その無礼な物言いに護衛が声もなく怒りを顕にするが

「では、最後に・・・あなたは味方ですか？」

「それはこれからする話を聞いてから、あなた達が判断してくれ。」

「貴様は、私の敵だ」

話の腰を折るなよ。

「ちょっと黙れ单細胞、話が進まん」

「单細胞?どうこう意味だ?」

あ～細胞がわからんか、そりゃそうだな。男は無視して

「時間がない、そろそろ俺の話を聞いてもらひ。まああんた達には、
皇国に戻つてもうついたい。」

「それは無理です。皇女は大使として来ています。その責任を放棄
することは出来ません」

「果たせない責任を守る必要はないだろ」

メイドさんが声を荒げる

「果たせないとはじつこつ意味ですかーー？」

皇女をバカにされたと思ったのかな？

「皇女に問題があるわけじゃない、グーロム王国があんた達を大使
として扱わないといつている。」

「な、何故ですか？私達はグーロム王国に招待されて」

初めて皇女が声を出した。戸惑っているようだな

「招待はおそらく罷だらう。大方、奴隸制度の緩和か皇国出身の奴
隸を解放するとかなんとか言つて呼びつけたんだろ」

「（そこまでわかっているのかー）」

交渉の内容を知っていた皇女付きのメイドは驚愕していた。
事実なのだ交渉の内容は皇国出身の奴隸の解放についてだった。何

を要求されるかはわからないが無視できない内容だったのだ。実際グーロム王国は皇国出身の奴隸を集めていると聞いている。

「グーロム王国は戦争の準備をしている。そして、その前に皇女を捕らえるつもりだ。」

「えつ、そんな

皇女の顔が青ざめる。他の者も動搖している。

「姫様、落ち着いてください。ジン殿それを証明できますか?」

「あんた達の状況そのものが証明だろ?」この襲撃初めてじゃないんだろ、おやうぐなんどか襲撃を受けたはずだ

「なぜそんな」とまで

「生き残りと死体の数を数えたが皇女を守るには少くと少ない

「それが何故襲撃を受けたことが証明になるのですか?」

「普通は勝てない相手を襲撃したりしない、なのにあんた達は何度も襲撃を受け護衛が少なくなってしまった。しかし、壊滅したわけではないから、戻ることもできない」

「護衛が少なく?」

「戻ることができない?」

女騎士とメイドが呟く

「そこが大事なんだ護衛がある程度いれば勝てなくても皇女を逃がすことができる。今のあんた達は敵から皇女を逃がせるかな？それに壊滅させでは皇女に逃げられる。」

「しかし…それは証明にはなりません」

メイドは、理解できても納得できないらしい。さつきの戦闘を考えれば皇国に戻ることはおかしくないはずなのだが

「私は彼の言葉を信じる。先程の戦闘、彼がいなければ我々は死んでいた。信じるには十分だろ？ ミリア、今は耐えてくれ。」

女騎士が援護してくれた。

「わかりました。皇国に戻りましょう。」

「なら急いでまだ追手は四百人ぐらいいるから

「え？」「」

「だから急いでいると言つているだろ。いつぞ、そいつらを証拠にするか」

「で、では早く戻らないと」

「駄目だ、相手は四百もいるんだぞ当然前の街道は封鎖されてる」

地図を取り出して一つの街道をしめす。そこは前の街道の反対側の街道だった。

「だからこの街に出てる」

「何故だ？その街道はもつとも皇都まで距離があるが。それに道はわかるのか？」

「道はわかる。理由は追手が分散してかなり数を減らせる。それに元々この道しかない」

道は、聖痕を使ったときにはあらかた調べていた。

三つの内一つには敵がいる、もう一つには今の場所からは行けない。

「……わかった。皇女様」

女騎士が皇女に採決を促す。

「わかりました。あなたの言葉を信じましょう。直ちに皇国に戻ります。」

「了解しました。それでジン殿、君を雇いたいのだが

「ああ、俺が裏切らないよう。なにか繋がりが欲しいのか

「すまない、何かないかな？」

「謝る」とじゃない。やうだな皇都についたら戦争について皇王と話したいその渡りをつけてもらいたい

「わかった。掛け合つてみよ」

「それで君達、名前はなんて言つんだ？」

「やつだつたな。私はレイシアだ。やつときはありがと。」

女騎士が名乗りほかも名乗りはじめる

「私はミコアと申します。」ひらは、我らの主のレティーシア様です。」

「よろしくお願ひいたします」

「ひらは、応答していたメイドと皇女

「ミー・シャです。」

「レオンド」

終始喋らなかつたのがミー・シャで護衛がレオンドらしい。

「これからのことについて話したい、戦えるのはどれくらいいるんだ？」

「・・・八人」

「八人が、戦うのは無理だな。どうするか？馬は？」

「人数分はある」

「移動しながら話そう、すまないがティリエルを馬車に乗せてくれないか」こに來るのに無理をさせた

「かまこませんよ」

「よこでま行く」

俺が馬車を降りると

「ジン殿馬を」

「いやいい乗れないからな、走る遅れるなよ」

「はい？」
外の騎士が今に乗るのを確認してから走る
気力と精靈の力で驚く早さで駆ける

「は、早い。全員遅れるな」

レイシアは、慌て馬を走らせる。近くにきたレイシアに
「街道に出るまで走る」

「本当に何者なんですか？」

その後、道なき道を進み、時には道を強引に作り進んだ。
街道に出た時に

「新しい道ができてしまった。」

皆呆然としていた。

「すまん疲れた。馬車に乗せてくれ」

周りの人間は安堵していた。

「よかつた。ちゃんと疲れるんだな」

と別の騎士が呟いた。失礼な馬車に入った俺は、最初のメンバーを集めて話をはじめる

「これでゆつくり話が出来るな」

「正体について教えてくれないか」

「それは時間がかかるから追手を振り切つたらな」

「いこまで來るのか」

「来るだろな四百人の内一百ぐらいは騎兵だった。分散しても、その内五十人前後が来るだろ。」

「どうする、相手は騎兵なのだろ馬車のいる我々はすぐ追いつかれ
る」

「だからこの先の川まで行く。そして橋を壊す」

橋の手前で追手に見つかった。

「手筈どりに」

八人の騎士が引き付けながら橋を渡る。

追手が橋を渡りはじめ、土の精靈術で脆くしたところまできた時

「『炎蛇・六首』」

炎の蛇がその場所にいた騎兵^{アーモンド}と橋を破壊した。石造りの立派な橋が木つ端微塵だ。

何故こうなったかといつと橋の破壊方法を言つた時にミーシャが

「橋と一緒に敵さんを破壊すれば、後のことを見逃して良くて
一石二鳥ですね」

と、とても怖いことを言つてのけた。

ミーシャは見た目は小動物みたいで性格も引っ込み思案なのだが、たまに怖いことをいつ、それも天然なので腹黒いのとはちがいよく分からぬ子だ。

俺達は、夜になり移動が困難になつたころ開けたところで野営にすることにした。

準備が終わつたころレイシアが

「そろそろ君の正体を教えてくれないかな?」

19話 皇女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

『』指摘・『』感想等ありましたらよろしくお願いします。

20話 龍の思いと小太刀の思い

「俺は異世界人だ。」

「…………」

まあそうなるよな。ちなみにこの場にいるのは、皇女のレティーシアとメイドのミリアそして女騎士のレイシアそして俺とティリエルの五人、これは俺が人数を減らすように頼んだ結果だ。この五人で、馬車の中で話している。風の結界で防音して外には漏れないようにしている。

「まあ、信用できないだろうから、これを見てくれ。」

そういうてギルドカードを見せる。

名前	ジン	男	18歳	人間
ギルドランク	B			
能力ランク	総合B	気力A	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	聖痕使い	精霊王の友人		
奴隸の解放者	精霊術師	救世主	五人の女の主	

「救世主？精霊王の友人？」

「そ、俺つて救世主らしいんだよね。」

「聖痕使いというのは？まさか

「これが聖痕か、それでの精靈術か、納得だな」

左腕の聖痕を見せる。

「これが聖痕か、それでの精靈術か、納得だな」

「そんで、俺が何をしにこの世界に来たかだけど」

魔物の大侵攻について話した。

「そんなことが本当に起っているのですか、とても信じられません」

ヒメイデさん。

「誰が何を言おうと起らせるものには起らせる、それに嘘をつく必要もないだろ。」

「やうひですが

「というより、考へても答へなんかでないだろ。今は、知つていてくれていればいい。皇族が知つてているだけでこれからのこととも変わらぬ。」

「ジン殿、聖痕を使えば簡単に勝てたのではないですか？」

レイシアが不満といつよつ単純に不思議がっていた。

「あ～実は、いま水の聖痕以外使えないんだわ」

「…………えつ」「」「

「実はここに来る前に銀龍と戦ったときに三つ使ってあんたら見つけるのに一つ使っていてな。聖痕って連續しようできないし、力が戻るまで少しかかるんだよね」

「ぎ、銀龍？銀龍と戦ったのか！」

「ああ、勝ったぜ。ちなみにティリエルの父親な。」

「…………」

「だから、魔王との謁見よろしく頼むよ。」

「【△】主人様、人の姿になつてもよいでしょうか?】

ビクッ

三人が驚いているな。

「いいぞ。」

テツが人の姿になる。

「こいつはテツ、俺の小太刀だ。」

テツは突然、

「皆さん主はお疲れです。主については、これ以降ティリエルさん聞いてください」

「どうしたんだテツ今は、」

テツが無理に俺を外に連れ出そうとする。

「お願いです。主一緒に来てください。お願いします。」

テツの声が震えている。

「わかった。すまない後は、ティリエルに聞いてくれ、ティリエルも何でも答えていいから。」

俺はテツを連れて馬車を出る。

・テツとジン・

人気の無いところまで俺を連れていくと、突然テツは、抱きついてきた。

「どうしたテツ大丈夫か？」

「私は問題ありません。私が心配しているのは主のことです

「俺の、こと？」

「人を斬つた時、主の心が軋んでいるようでした。」

その時に持たれていたからこそ、聞けた心の悲鳴だ。

「・・・俺は、この世界で何人も殺している。今さらだな」

盗賊、奴隸商人とそれなりに殺している。

そのはずなのに、

なぜ俺は今泣いている。

「私は、ずっと主の側にいました。なので主のいた世界のことでも一番聞いています。」

それは他愛もないことを話した、ソフィア達との会話のことだらう。

「だから知っています。主の周りは、とても想像できないくらい平和な世界で、魔法はなく亜人もいない世界だったと」

テツは、俺のことを理解しようとしてくれていた。

「だから主にとつて、人を『斬る』というのは、精霊術を使ってのものより『殺し』を特別意識することだ。その事で、自分を責めているのだとわかりました。」

そうなのだ俺は今までの人間を、精霊術だけで殺してきた。怖かつたのだ人を斬った時の感覚を覚えるのが、殺した人間の血を浴びるのが。

そして今日俺は斬る感覚を覚え、血を浴びた、恐怖を隠すために途中からは稽古に見立てたりもした。稽古に見立ててたくさん『斬つた』のだ。

「主は優しいです。すべてを捨てて、この世界を救いに来ててくれました。主は強いです。銀龍にすら勝ってしまいました。主は私たちの誇りです。」

テツが喋ることを、やめない。

「ですけど、主は人なんです、時には私達に甘えてください。自分の中に溜めず、たまに吐き出してください。わたし達は受け止めますし支えます。そしてずっと側にいます。」

「ありがと、テツ

今日俺はテツの胸の中で泣いた。

馬車の中

ジンがでて行つた後の馬車は沈黙が続いていた。テツ出現しその後すぐにジンを連れて行つたことで、その場をしばらくの間沈黙が支配していた。

レイシアが、沈黙を破つて口を開く

「その、ティリエル殿」

「ティリエルで結構ですよ。」

「じゃあティリエル、ジン殿もああ言つていたしジン殿について聞いていいかい？」

「どうぞ、なんでも聞いてください」

「ありがとうございます、わつき龍がどうたら言っていたがジン殿はやはり強いのか？」

「ええ、強いんですよ。私の父に勝ってしまいましたし、個人で勝てる人間はいないと思います。聖痕を使えば一国とも戦えると思いますよ。」

「ヤレヤレでか、お兄様ってどうして？」

「旅に同行する方に私からお願ひしました。」

こうしてレイシアが、質問しティリエルが答えレティーシアとニアは聞き役に徹した。

質問にこゝつか答えたころにレティーシアが

「お一人の様子を見に行かなくてよろしいのでしょうか？」

「絶対に行かないでください！」

幼いティリエルの剣幕に二人が戸惑つ

「お兄様は今きっと辛い思いをしています。」

「ユリに来るまでに何かあつたんですか？」

「いいえ、お兄様が辛いのは、人を殺したからだと思います。そのことはテツさんの方が分かると思います。」

。だからお兄様を任せたのですから。」

「人を殺したから？ それだけ？」

「お兄様は、お優しいのです。本当は殺しなんてしたくないです」

「あれほど力を持っているのに」

「そんなことは関係ありません。お兄様は、この世界を救うために力をつけたと言つていました。人を殺すためではありません。」

また馬車の中が静かになる。レイシアは、ジンの力のみに気を取られていたことを恥じていたし、ティリエルも今自分がジンになにもできないことを再確認して沈んでいた。

「え」と、ティリエルちゃんは、びつしてジン殿と一緒にいるのですか？」

皇女が場の空気を変えるために新しい質問をする。

「えつ、え、えと、大好きだから」

空気がやわらぐ

「あ、あと支えになりたいんです。お兄様はこの世界に一人で來たらしいので故郷もないですし、だから、その」

「俺の話か？」

「うひやー。」

「どうしたティリエル？」

「ど、どこから聞いて」

「どうしてジン殿と一緒にあたりからだな」

ポン

真っ赤になった。

落ち着くのを待っていると

「その、大丈夫ですかお兄様？」

「大丈夫だよ。にしても俺つてそんなに顔に出てるかな」

「大丈夫ですよ。少なくとも皇女様方は気づいていなかつたので」

「それはよかつた。」

「お兄様、あの、今日は二人で寝ましょ。」

「・・・ありがとうございますティリエル。じゃあまた明日、お休み皇女様」

そつこつて馬車を後にする

その後の馬車

「ティリエル様の言葉を聞いてどう思われますか？レティーシア様」

「信用していいだろう。ティリエルの信頼は本物だった。」

「その上でどうするのですか？」、皇女様

「わたしはあいつが気に入った。何より強い」

（姫様がここまで異性を気に入るのは初めてね。どうなるのかしら）

「強いのは関係ないでしょう、まあいいです。では、渡りはつけるといふことでいいんですね？」

「ああ、そうしてくれ。ふふ、あいつの驚く顔が楽しみだな～」

20話 龍の思いと小太刀の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界21日目

俺達は今、追手に追いつかれそうになっていた。その数80前後の完全武装の正真正銘の騎士団だ。

「あいつら軍馬まで出してきやがった」

レオンが毒づいている。

しかし、騎士団と軍馬を出してきたといふことは軍が、つまりは国が動いていることの証明だ。

この行動は、皇女達に俺の言葉に信憑性を持たせてくれた。

この場を切り抜くことができれば、交渉はしやすくなる。

「どうするんだ、貴様のせいだぞ」

たしかに、追いつかれたのは、一番距離のある道を選んだ結果ではある。他の道が2、3田で皇國に着くのに対してこの道は、5田もかかるのだ。

他の道が正解だとも思えないが、軍馬を出してきたのは、想定外だった。

グーロム王国はもう隠すつもりがないようだ。

それに敵は、甲冑を着けていて、聞くとあれには耐魔耐精霊の術がかけられている。負ける気はしないが、守りながらでは厳しい、だから

「あの狭い道まで行けば俺が何とかする

「本當だらうな？」

レオンがさつきからいつぬせいいな

「レオン卿今は逃げる」ことだけ考えなさい

レイシアが一喝する。

「了解しました。」

狭い道までたどり着いた。俺は、馬車から飛び降りた。

「お兄様！」

「ジン殿！」

「先に行け」

これ一度言つてみたかったんだよな。

「『『』』」

道を走る壁でふたぞ馬車が見えなくなる。

「悪いな、ここから先は、通行止めだ。死にたいやつはかかってこ
い。」

俺は、高低差を埋めるため土で足場を作り80近い敵を迎撃つ。

皇女達は、夜にはなんとか国境を超えて、国境の近くで野営をしていた。皇女たちはジンを待っているといつよりティリエルへの配慮のつもりだった。

「お兄様」

ティリエルは、ジンが来るであろう方向をずっと見ていた。

そこに、レオンとミリアが近づいて来た。

「お前、戻つて来ると思つてんのか？」

「コラ」

「コラ」

声にびっくりしてティリエルが振り返ると、ミリアの拳が脇腹を抉つていた。

「言葉を選びなさい」。ジン様は、我々のためにあの場に残つたのですよ。」

「ふふつ大丈夫ですよ。お兄様は帰ってきます。」

二人はその年下の少女の揺るがない声に呆気に取られていると

「あつ」

街道に一つの人影が見えた。次の瞬間ティリエルが走り出す。

「お兄様！遅いです。」

ジンのところまで走り飛び付く

「痛い、痛いティリエルそこはやめて」

「お兄様どこか怪我したんですか！」

「ああラシード奴がわりとできるやつでな、痛み分けになった。」

そこにはコトたちも追いついてくる。

「ラシード将軍ですか、よくこの無事で彼は気力がSの実力者なんですよ。」

「へ～じゃあ、あいつ『超越者』なのか？」

「いいえ、彼は魔力が低かったのでAランクなんです。超越者は、能力ランクがSランクからなのでちがいます。彼は『到達者』です。」

「

レイシアまで出てきた。

「ジン殿戻ってきたのか、信じていたぞ。」

「ああ、レイシア達は、怪我はなかつたか？」

「我々は大丈夫だ。それよりジン殿怪我しているのか、大丈夫なのか？」

「かすり傷だよ。」

レイシアは、心配そうな顔をしていたがそれを聞いて安心し今度は真剣な表情で

「ジン殿此度の件、真に感謝する。グーロム軍が出てきていたのだ、あなたの言葉は真実なのだろう。わたしはあなたを信る。皇帝陛下への取次ぎは任せてくれ。まあ元々皇女の恩人だ、会うことは簡単だと思うが。」

「それはありがたいな。」

「ジン様は異世界から來たのでしたね。ジン様は、なんのために戦つているのですか？この世界に思い入れのないあなたがどうしてそこまでできるのですか？」

ミリ亞にとつて、それはとても不思議なことだつた。しかし、ジンはとつては当たり前のことで

「自分のためだな」

「自分のですか？」

「そう、まあ明日は皇都までもまだ距離はあるんだ今日は休もう。と

「もう少し休みたい」と、

そういって締めくくった。

異世界24日目

三日かかって、やっと皇都の城門についた。
もう昼を回っている。

「やっと、皇都についたな。」

「「主人様～、「無事で～」

イリヤが凄い勢いで走つてくる。側まで来ると飛びついてきた。

「「主人様、寂しかつたです。」

「ずっと城門前で待つていたのか？」

呆れるような嬉しいような。

「はい。三人で順番に待つてました。」

「ジン殿我々は、先に城に向います。明日の毎日お出でください。
い。」

氣を使ってくれたのか、レイシアたちとはここで別れことになり
先に城に向つた。

「わかった。イリヤ一人のところに案内して。これからのことを持
そう」

「わかりました。行きましょう」

イリヤはさう言つて俺と手を繋いで歩き出す。

クインント皇国は皇都は、グーロム王国の王都に比べてとても綺麗な所だった。少なくとも表通りには孤児は、見えない。しかし、孤児院も見えなかつたからどうかにはいるのだろう。

市場にも活気があり個々の家も立派だ。あらゆる点でグーロム王国を凌駕している。

なぜ、グーロム王国は、皇国に戦争しようとしているのか、わからぬ。とても皇国に勝てるとは思えない。そこで、グーロム王国の目的が勝つこぢではないことを思い出し怒りを覚えた。

いかんな、こんな状態であいつらに会つのは、なんとか気を鎮めようと思つて、テツを抱きかかる。

「ど、突然、ど、どうしたのですか主？」

「ちょっとだけ」さわせた

「は」、ど、どうか、好きだけ、むしむすつとでも

「むづく

ティリエル達がむくれてゐるのは見ない」として一人の待つ宿を指す。

宿に着くと

「ジン様」「ジン」

テツを降ろして飛びついてきた二人を抱きとめる。
ソフィアなんかちょっと泣いている。

二人を解放して全員の顔を見る。

「これから忙しくなるぞ、なんせ国を一つ潰すんだからな」

「わたし、あの国嫌いです。」

「そうそう」

奴隸にされていたことがあるイリヤとリリスは、全面的に賛成とう感じで、他の者も

「主が潰すと言うのなら潰すまでです。」

「人の国にあまり興味ありません。」

龍と小太刀の二人には、人の国という形に興味がないらしい。
ただソフィアだけは

「ジン様、わたしの村は大丈夫でしょうか?」

ソフィアの村は、王都から近いため巻き込まれないか心配なのだろう。

「大丈夫できるだけ綺麗に片付けるつもりだし、皇国が勝てば国民からは問題なく受け入れられるだろ?」

ソフィアは、一応それで納得してくれたようだ。

「わかりました。」

「明日の晝に、登城だ。皆準備しておいてくれ。」

「はい」

「それで、主人様今日の夜は」

「イリヤさん、お兄様は疲れています。そういうことは後日にしてください。明日は登城なんですよ」

「む～、いいじゃないですか、お一人はずっと一緒に寝ていたんでしょう」

「うえ、まあそれは

「やつぱり寝てたんだ」

「うう」

「大丈夫だよティリエル。まあでも一緒に寝るだけな

「やつた」

イリヤが嬉しそうにしているところ

「じゃあわたし達もいいですよね、ジン様」

「そうだね、ジン」

「なんでそうなるんですか！」

「まあまあイリヤ、一人も一緒にいられなかつたのは、同じだろ」

「う～わかりました。」

世界は救うつもりだが、やつぱりこういつのは大事だよな。

結局この夜は、三人を抱くことになつたが。

21話 皇都へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこます。

『指摘・感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界25日目

「すごいぶんと大きいな。」

まあ当たり前なのだが、皇都の城はかなり大きく贅を凝らしている。グーロムの城は遠目にしか見ていないが、皇国の城との格の差は歴然だ。

正直日本出身の俺としては無駄な気がするが、この時代には権威を保つためには必要なのだろうな。

城門に近づくと//コアさんが待つていてくれた。

「お待ちしておつきました。ジン様」

「//コアさん、どうなりましたか？」

顔見知りのメイドが迎えてくれた。

「すぐにお話にならう。ついで来てください。」

問題なく通してくれた。

入つてみると城内はとても慌ただしい、グーロム王国が動いたんだ

うつな

「//コアです」

//コアさんが扉を開ける。俺達は//コアさんと共に、部屋に入ると

部屋には、男女が三人ずついる、その内一人に問題がある。

「レイシア？ 何故？」

レイシアがドレスを着て座っているのだ。

「はつはつはつ、実はわたしが皇女だったのだよ

「え――――――」

これはティリエルだ。

「はあ」

俺はため息をついていた。

ため息を吐く俺を見て残念そうに

「なんだジン驚いてくれないのか」

「想定内だよ、想定内だが」

レイシアいやティーシアの元に迎い両肩に手を置いて体重をかける

「驚いてはいない、だがな、どこの国に影武者がいるのに一対三をする皇女がいる。この国の皇女はアホなのかバカなのか、というかミリアさんはあれを認めているのか、影武者の存在意義は、なんのための護衛だ、俺が着く前に死んでたら全部台無しだつたぞ、だいたい」

「わ、悪かった。すまん謝る」

レティーシアを知る者たちは、怒るというより感嘆していた。

(おお、あの姫に謝らせたぞ)

「まだ言い足りないが、まあ許そつ。そんで誰が皇帝かな」

「わたしだ。娘が迷惑をかけた。」

皇帝は、髪を伸ばした、威厳のありそうな男だった。

それにもしても、皇族に対する無礼を受け流すか、ずいぶん器の大きい男だな。誰も騒がないところを見るとこれは、身内だけの会議らしいな。

「まあ、まず自己紹介からしまじょうか

「やうだな、わたしはクルト・クイントーの国の皇帝だ。」

皇帝の左側の女性が

「アイリス・クイントよ。皇妃よ」

右の男が

「アッシュ・クイントです。一応皇太子をやっています。」

優男みたいだが、目に力のある青年だ。

「アリシア・クイント。第一皇女」

第一皇女と名乗つたが、明らかにレティーシアより小さい。その上、

表情があまりない子だな。

「一応名乗らうレティーシア・クイントだ。第一皇女だな」

「ゲオルグだ。将軍をやつている」

老将軍といった感じの軍人だな。

「じゃあこっちだな。俺は、ジン異世界人だ。神のバカにこの世界のことを頼まれこの世界に来た。」

「ソフィアです。ジン様の付き人のよつなものです。」

「イリヤです。ご主人様に仕えております。」

「リリスです。護衛をやつっています。まあジンには必要ないんですが。」

「ティリエルです。銀龍です。」

「テツ。主の小太刀」

ある程度聞いていたのだろうとくに質問はなかつた。

「自己紹介も終わつたことだし、話に移らう。」

「せうだな。そちらの目的は何だね?。」

「要求じやがない提案だ」

「提案?」

「そうだ。魔物の大侵攻については聞いたんだろそれを一緒に防がないか、ていう提案」

「それについては、一応起らるものとして行動することになった。わたし達としても協力体制を敷きたいと思っていた。」

「それはありがたい、これからよろしく」

「人握手を交わす。

レティーシアのおかげか簡単に話がついたな。

「しかし、それには問題もある。軍を動かせば、他国が黙つていな
いだろう」

「他国は巻き込むしかないだろうな、巻き込まないと攻められる、
そうなつたら魔物の大侵攻を知つていても王の立場上動けないだろ
うし、元々魔物の大侵攻は、皇国独力では厳しい」

「田の前の問題もある」

「グーロム王国か、外の様子だと宣戦布告でもされたか」

皇帝は、田を見張った。その情報は、ここにいる者しか知らないはずだからだ。

もつとも感づいている者はいるだろうが、それは少数で情勢に詳しい物だけだ。その少数に入っていることが異常なのだが。

「ほかには、他国を巻き込む方法か、それは後回しにしよう。まず
この戦争だな」

「他国を巻き込むことについては、この戦争に勝てればを何とかなるだろう。勝ち方にもよるが、かなりの発言力を持つては必ず。その

ためにジン殿力を貸してもらいたい。」

「わかった。それだと勝ち方が問題だな。」

「話が早くて助かる。では、戦争に関する話に入つても」

「お願いする。しかしながらは一国の王なのでしょうもう少し上から田線でもいいと思うんだが」

「いいのですよ。ここには、身内しかいませんし。戦力についてですが、グーロム王国は

奴隸兵	5万
戦闘奴隸	1万
兵士	2万
貴族の私兵	2万

の約10万こぢらは

兵士	5万
貴族の私兵	3万

の約8万の兵がある

「それなら正面からでも勝てるんじゃないか？5万は奴隸何だろ？」

「三つ問題がある。一つ目は、クイント出身の奴隸がいること。二つ目は、戦えば損耗は避けられない。三つ目、これが一番問題なのが、わが国の北側の国境付近にカルモンド王国の軍が近づいているその数5万これが問題なのだ。宣戦布告はされていないがあの国

の王は、グーロム王国と仲がいいのだ

「どうするつもりなんだ？」

「損害を小さくして勝つ方法が今のところない」

しばらく考える。

「俺にいくつか案がある」

「おお、ありがたい。聞かせてくれないかね」

「まずはな・・・」

こうして二人の間でポンポン話が進んでしまい。周囲は、口を挟む隙もなく果然として一人を眺めて終わってしまった。

「二人は、何か打ち合わせをしていたのでしょうか？」

「いや、していないと思つが」

レティーシアとニアさんがそんな会話をしていると

「これなら何とかなりそうだ。アッシュ、ゲオルグ将軍の方針で以降と思つのだが？」

「問題ないと、思われます。」

「それで進めましょう。」

「レティーシア」

「ん・・は、はい」

レティーシアは、呆けていた。

「お前にジン殿の副官を命ずる補佐するよつ」
「たゞよつ」

「はつ」

「アッシュ、ゲオルグあとは頼んだぞ」

「はつ」

一人が、部屋を出て行く。

「と」うでジン殿後の女性は、君の女かね

「はいつ？」

「いや、君が複数の女性を愛する男ならレティーシアもむづだね」

「な、なにをいつているのですか、父上」

レティーシアが、照れている。脈アリなのか？しかし

「何が目的ですか？」の間に留めておくためですか

「そんなに深く考えなくていいよ。先程娘を叱つて謝らせただろう。あれは、おてんばでなかなか嫁の貰い手がなくてな君ならばと思つてな。あれも君を気に入つていてるようだし」

「なつなな」

レティーシアが超照れている。どちらかといつと綺麗といつ感じだが、意外と可愛い所もあるな。

なんだかこの流れアルベルト（ティリアルの父）のときと似てるな。

「まあ、すぐでなくともいいさ、今は戦時だからね。」

その戦時に娘の縁談の話かよ、図太いやつだな。

「それじゃあ失礼するよ、特訓しないといけないからな。」

後ろの水の精霊術師の方を向つて

「がんばるぞ、ソフィア」

22話 燐城と皇帝（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

23話 戦場へ

異世界32日目

宣戦布告から一週間後俺達は戦場にいた。

「時間がありません。急いで陣地を組んでください。」

陣地設営の指示を出しているのは、アッシュュ皇子だ。総指揮は、ゲオルグ将軍が執っている。

「アッシュュ、俺は手筈どつり時間稼ぎと、仕込みをやつてくれる。」

アッシュュとは、すぐに気安い中になれた。アッシュュにとつて身分を気にしなくていい相手は初めてで、付き合い易いらしい。

「お願いします。なんせこの戦いは、あなたにかかりているのですから」

そうなのだ。ここにきているのは兵は三万のみ残り五万は、カルモンド王国との国境の近くに行かせてカルモンド王国軍を牽制している。俺達は三分の一以下の戦力でそれも野戦を行わなければいけないのだ。国境を越えられると国民を奴隸にされるから国境付近まで出るしかないのだ。

「テツ行ける？」

「はい、大丈夫です主」

「わかった。アッシュュ、行つてくれる」

「行つてらつしゃい」

俺は、敵軍が来るであろう方向に向つて走り出す。

時間稼ぎ自体は簡単だった。

まずは地の精靈で落とし穴を作る道具を使わない天然の落とし穴だ。次に水の精靈で沼もどきを作る。

これを行軍進路にいくつか作つただけだ。

それだけで行軍速度は落ちた。

あるかもわからないものを気にしながらの行軍は、格段に落ちるし沼も人数が多くて迂回するのも一苦労なのだ。

「ええい、なにをとろとろやつている。」

グーロム軍のコートル将軍は苛立つていた。この戦争は、コートル将軍にとって勝ち戦なのだ。将軍としては、さっさと勝つて報酬と奴隸を手に入れたいのだ。

実際この戦いを勝ち戦と見て予定より貴族共が多く集まっている。まあ集まつたっても奴隸商からのなりあがりの貴族ばかりで、昔からの貴族は不参加だったが。

「兵が落とし穴を気にしているようですね

これはラシード将軍だ、レティーシア皇女を捕まえられなかつたため、コートル将軍の補佐をするはめになつた。

「そんなもの、指輪の力でゼウスのでもしれ」

奴隸を兵隊にするときは、一度奴隸を王の下に集めそのあと命令権を与えた指輪を将軍に『与える』、という仕組みをとつてこる。そこからさらに奴隸を指揮するようために命令権の一部を指輪に移譲して士官に渡していく。実際問題、五万の奴隸を一人で指揮できるはずがないのだ。そのために、指輪を与えて指揮をやせるのだ。

「それは不可能です。穴を無視しようと命令すれば、穴に気づいても落ちていくことになります。それに後続も避けずに進むのでそのまま落ちてしまいます。」

「ちつ、所詮は奴隸か」

奴隸にしたのも奴隸を取り入れたのもグーロム王国ゆえだろ？
、アラシードは思ったが、口には出せなかつた。

「このままいくと着くのは、夕刻ですな。決戦は、明日にした方がよさそうですね。」

「そんなこと知るか、こちつは三倍以上なのだ。ついたら夜だろ？
と攻撃を開始する」

「こつは疲労のことは考えないのか、アラシードが呆れていると

ドン・ドン・ドン・ドン

（来たか）

一度爆発音が聞こえ外が騒ぎになつてゐる。これなら今日の決戦は

さすがにないな、トライシード将軍は落ち着いていたが

「なんだ、何の音だ」

『コードル将軍にとっては、それどころではないらしい。』

「『炎爆』」

これの技は、殺傷能力はかなり低いが爆音と衝撃が強いくらいで混乱させることが目的のときは、大いに役立つ。一応直撃はさせないよう、全体に満遍なく『炎爆』を落とした。程よく混乱したら地中から潜入する。案外地中が一番発見されないので。

潜入したのは、戦闘奴隸一万の軍団でそこで孤立しているやつを探す。

いた、少年だ。風の精霊を使って音を消して後ろから近づき少年を物陰に引きずりこむと同時に首輪の契約を破棄する。

「えつ」

少年は驚いて首の手を伸ばす。引きずり込まれたことよりも首輪が外れたことに驚いているようだ。

次第に落ち着いてきたのだろう。感謝を、言つためか大声を出されそつになつたので口を押さえ黙らせる。

「静かに」

コクコク

「時間がないんだ。頼みたいことがある」

言いながら手を離す。

「何でも言つてください」

奴隸から解放されただけで「」まで信頼されるのか

「戦闘奴隸のリーダー格つてわかるか？」

「何人かはわかります。」

「居場所に、見つからないように案内してほしい。」

「わかりました。お名前を聞いてもよいでしょうか？」

「ジンだ、君は？」

「僕は、レイトといいます。」

陣地内を移動して

「あの人です。」

「」に呼べる？」

「はい、呼んできますか？」

「頼む」

レイトが男に近づいていて何事か話すすぐにこちらに来た。

「レイトイいものってなんなんだ？」

それで釣れるのかよ、まあ見た目からしていかにもなマッシュチョではあるが。

レイトの時と同じようにして氣づかれないように首輪をはずす

「え？」

レイトと同じ反応だな。

俺は、これを何度も繰り返し敵陣地で味方を増やしていった。
数が増えたら作戦を説明し、さらに数が増えていくと誤魔化す係りや説明する係り、奴隸を連れてくる係り、捕まえる係りと効率を上げていった。

その後リーダー格の人達に後を任せて皇国軍に戻った。

「お帰り」

「お帰りなさいませ」

レティーシアとソフィアが迎えてくれる。

ソフィアとテツとレティーシア以外の女には、後方に下がつてもらっている。イリヤを医療関係のところに行かせてリリスとティリエルは、その護衛についている。

「しかし、以外だな。君の女達あつさり後方に下がったんだな。冒険者風の女とか来たがると思ったんだけど」

「それはですね。それがジン様のためになるからですよ。ジン様は、私達が戦場にいるどどうしても気にしますから。」

「ありがとな、ソフィア」

ソフィアの頭を撫でていると

「主、わたしも」

テツが人に戻り、おねだりしてきたので
片腕で抱き上げてテツの小さな体の感触を楽しむ。

「ジン殿には戦場たぞ」

レティーシアが怒つたので

「わるいわるい」

俺は謝罪して、テツを降ろす

「羨ましいんですか？」
「羨ましいんですね。」

「ち、ちがうもん」

自分の叫んだ言葉を思い返したのか、真っ赤になつて無言で走つて
逃げていつた。

「今の可愛かつたな」

「やりますね。皇女様」

「主に気があるの本当みたいで

「やっぱりそうですね、皇帝も一人を認めるよ

うな」とを言つて

いましたし

「仲間になるかな?」

俺は、一人がレティーシアについて話しているのを聞きながら陣地を見渡す、3倍の敵と戦うのにみんな諦めていた。希望を持つていたのだ。この状況で希望を持たせることのできるこの国は、やはり良い国なんだろうな。だからこそ絶対に勝つ。

「やれる」とは、やつた。後は戦つだけだ。まあ完勝するだ

「「はい」」

23話 戦場へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこます。

『指摘・感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界33回目

グーロム王国[軍側]

「なんだ聞いていたのよりもさらに少ないではないか」

「一トル将軍は、敵の数を見てほくそ笑む

「やつでござりますね」

副官が相槌を打つ。ラシード将軍は、自分の部隊を率いている。

「これから仕掛けてやる。全軍に伝令、あのよつな陣地正面から粉碎せしめろ」

クインント皇国[軍側]

ワアアーー

「来たな」

「ええきました。手筈どつり陣地内まで引き込みます。」

「ああ頼むぜ、なんとか持たせてくれよ。」

「わかつていますよ」

しかし、この陣地には、今一万しか残っていないのだ。残りは、伏兵として左右に、一万ずつ伏せている。今は、旗を増やしたり陣地を使って数をこまかしている。一万で十万を受け止める時には不安がある。不安が顔に出ていたのだろう。

「大丈夫です。相手は奴隸兵こちらは、正規兵です。見事に釣つて見せます」

「わかつた。信じるよアッシュ」

「全軍迎撃準備、各部隊長は手筈どりつこ

一番隊から十番隊まで作り各部隊長に千の兵を持たせたのだ

「敵近づいてきます。」

「弓構え・・・放て」

無数の矢が敵軍に降り注ぐ。

この矢のさきは潰してあるが、万の軍が動く戦場では、死者も怪我人もである。

だが、もちろん被害は普通の矢に比べ少ない。その代わり勢いもあまり落ちないまま先頭の部隊がぶつかり合つ。何とか初撃を受け流すと

「一番隊と二番隊は、後退していください。七番隊と八番隊はその援護を」

この陣地は元々逃げやすく作っている。

第一と第二部隊は陣地をうまく使い難なく後退をこなし、追撃してきた敵を七番隊と八番隊が攻撃する。一番隊と二番隊は、体制を整えたら部隊の援護に回る。これを繰り返しながら戦闘を行い敵を引き連れながら後退する。

これを難なくこなすのは、皇国軍の練度の高さの賜物だろう。

グーロム王国軍側

「いいぞ。押している」のまま一気に全軍で攻め落とせ。」

「一トル将軍には、それがわからず意氣揚々と指示をだす。

「全軍で、ありますか？」

「やうだ、やうじじる」

隊長達は、渋々言われたとおり全軍が前進した。

皇国軍側

「思ったより早く。後続がでて来ましたね。」

アッシュが、嬉しそうな表情を浮かべる。

「よほど、『らえ性のない将軍なのでしょうな」

副官が相手の将軍を評価する。その評価は見事に当つていた。

「ではそろそろ。全軍、全力で後退してください。ジン殿に伝令を

ジンの側には、ソフィアとレティーシアあと小太刀のテツがいた。

「ジン殿、アッシュ様から『いつでもやつてくれ』とのことです。」

「了解。ソフィア準備はいいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ、いくよ」

俺は、そついつてソフィアの手を握る

「水の聖痕発動『水龍』」

水の精霊が俺とソフィアを、包む。

「『水翼』」

さらに背中に、大きな水の翼ができる。

『水翼』は、大量の水を使うための準備だ。

「ソフィアは、危ないと思った人を助けることだけを考えて」

「はい！」

「いくよ。『陸津波』」

次の瞬間、翼から大量の水が噴出し、大量の水は制御され津波になる。陸に出来た2メートルの津波が五万の奴隸兵を押し流した。

ジンヒソフィアは、この技そのものより、呑み込まれた人間を助けることに全力を尽くした。

ソフィアとの修行とは、この共同作業のことだったのだ。

溺れそうな人間を、波から出したり、流された武器を安全なところによけたり、何かにぶつかりそうな人をそらしたりした。

陸の津波がおさまった時五万の奴隸と後続の突出していた正規兵五千の兵が左右に押し流されていた。戦線復帰は不可能だろう。

「すごいな、これがジン殿の実力の一端か。」

アッシュは、しばらく呆けてしまった。その間に空に、青い光が撃ち上がった。

ジンが、光の精霊術で出した合図だ

この合図を、待っていた複数の人間がいた。

例えばクイント皇国軍には、
アッシュが、

「合図だ。騎馬隊を先頭に、突撃してください。魔術師はその援護を」

アッシュは、今まで温存していた九番隊と十番隊の騎兵一千を出して正面から反撃にでた。その後ろを、馬に乗った魔術師千人がつづいく。

伏兵の指揮をしているゲオルグは、

「合図じゃな。一気に攻める。我らの目的は、貴族の私兵二万のみじゃ、それ以外は、手柄にならないと思え。突撃！」

次の瞬間一万もの伏兵が、地中から現れた。ジンが土の聖痕の『岩皇』を使って作った地下の空洞から出てきたのだ。ジンが、敵軍の足止めをしていたのは、彼らをここに伏せる時間を稼ぐためだつたのだ。グーロム王国はこの空洞を知らないため伏兵に対して無警戒だつた。

さらに敵軍を挟んで反対側には、ゲオルグの副官が、同じ内容を叫んで突撃を仕掛けた。

グーロム王国では、

戦闘奴隸の一 角のレクト達が

「合図ですムガルさん」

ムガルとは、レクトの次に解放した戦闘奴隸だ。レクトをつけて後を任せた一人だ。

「見えどるよ。」

彼の目の前では、部隊長だった者の死体がある。この時、いたると
ころで奴隸を操る指輪持ちの部隊長が不意討ちで戦死していた。

「虜げられるのは今日で終わりだ。俺達には、救世主のジン様がつ
いてる。ジン様の頼みで今から貴族共を殺しに行く。いいか野郎ど
も」

「「「オオオ——」」」

「ここにいるのは、五十人程だが、解放した戦闘奴隸は、二千いる。

「救世主様のために」

「「「救世主様のために」」」

二千の奴隸が牙を向いた瞬間だ。

正規兵の一角ではラシード将軍が

「我らラシード将軍と共に」

「私は、民達を守るためにこの国を捨てるついてくれるか?」

彼らは、ラシード将軍に鍛えられ、ラシード将軍を尊敬している兵
達だ。その数五千。

「ありがとう。これよりコートル将軍を討つ。ついてこい

ラシード将軍と五千の兵が、駒から人に戻り。反旗を翻した。

合図を聞いた五ヶ所が反撃に出たとき、ジンはティリエルの背に乗り空から戦場を見渡していた。ティリエルも合図を見て行動した一人だ。

戦場は、すでにほぼ決着がついていた。

奴隸兵五万は、すでに『陸津波』により左右に割られており、元々高くない士気が全くなくなつていて、騎兵を止められる筈もなくほぼ素通りして貴族の私兵に肉薄する。

戦闘奴隸一万は、指揮官をすべて失い、何もせずに伏兵一万と元戦闘奴隸一千を、貴族の場所に通した。

正規兵二万は、五千を『陸津波』に呑み込まれ、さらに五千に裏切れ半分になつていて、残つた一万もラシード将軍を見てどうすればいいのか分からなくなつて、ラシード将軍と合流したゲオルグ将軍率いる一万に簡単に突破されてしまう。

こうして

貴族の私兵 二万

対
正面 三千

右 一万二千
左 一万五千

の三万の戦闘入った。

貴族の私兵は、何とか抵抗しようとするが、『陸津波』を見せられ動搖しているところに、突然の三方向からの攻撃に組織立つた抵抗ができず簡単に崩されていく。

それに比べて攻める側の、皇国軍、ラシード将軍の兵、元戦闘奴隸と三種類の人間が混じっているにも関わらず、かなりの連携が取れている。

この時、指示していたのは、戦場の流れを空から見ていたジンだ。風の精霊を使って各リーダー格に命令を出し、合流させ連携を取らせていた。空から戦況を見ていたジンには簡単なことだった。

グーロム王国側は、

「なんだこれは、なぜこんなことになつてゐる。」

命令を出すべきゴートル将軍は呆然としていて、碌に命令も出せていない。

しばらくして自分を取り戻した時の第一声は

「もう無理だ。私は、逃げるぞ」

とだけ叫び一番最初に、逃げたした。元々将軍の器でわなかつたのだ。それを見た他の貴族（奴隸商人でもある）達も我先にと逃げ出す。逃げる彼らの道は、後方しかない。

前方は三千の敵と五万の奴隸の壁その後ろには七千の敵、左右には一万を超える敵がいる。彼らが後方を選んだのは必然だつた。しかし、その必然は作られた必然だつた。

後方には、『嵐帝』を発動したジンが待つていたのだ。

ゴートル将軍がジンを見かけた時すでに辺りは血の海だつた。すでに逃げようとした者がいたようでジンは、『嵐帝』の広範囲索敵を使い後ろ側に逃げてきた敵をすべてを殺していた。一人残らずだ。

「お前がゴートル将軍だな。その首貰うぞ」

ヒュン

小さな風の音がした。

それだけでコートル将軍は、首を体から切り離され絶命した。この時のジンは、口以外全く体を動かしていなかつた。

コートル将軍の首が風に運ばれジンの近くに落ちた次の瞬間、

「『削嵐』」

逃げてきた貴族とその私兵は、声を出すこともできずに無数の風の刃にすり潰されて肉片になつた。

間もなくして、正規兵の指揮を取つていたグーロム王国側の最後の将軍が降伏勧告を受け入れ戦いは、終わりを告げた。

こちらの被害は死者百人、怪我人が七百人ほどだ。

グーロム王国側は、貴族の私兵二万のほぼすべてが戦死、それと正規兵に少し死傷者が出た。

文句無しの完勝だった。

この場の戦いは終わつたがまだまだやることがある。

俺は簡単な後始末を終わらせると一人に

「アッシュ、ゲオルグ将軍作戦の第一段階に移りたいと想う。」

「わかった。ゲオルグ将軍後はお任せします。」

「わかりました。」

「さあ行くぞ、王都へ」

異世界34日目

休まず馬を走らせて（俺は自分の足で走つたが）何とか次の日には、王都にたどり着いたその数は、騎兵八千その騎兵が王都の四つの門を2千ずつ付き東西南北の門を封鎖している。この八千は、皇国軍五千頭とラシード将軍率いる千頭、残りの一千頭は王国軍から奪つた馬だ。八千もの騎兵はそうそう見れるものではない。

「ラシード貴様、娘がどうなつてもいいのかー。」

今城壁の上で肥満体型の男が、首輪のついた小さな女の子を引き連れてラシード将軍を脅している。

驚きはない、以前ラシード将軍と戦い今回の謀を持ちかけた時に、何故現政権に逆らわないのか聞いたら、娘を人質に取られていることを聞いていたのだ。

「ジン殿頼む娘を助けてくれ」

もちろんだ。

今のラシードには、俺と戦った時の雄壮さはなく娘を出され精神に余裕がなくなつてゐるようだ。

「大丈夫だラシード。お前を連れて来たのは、お前がいればあいつらがお前の娘を連れて来るとthoughtたからなんだ」

「どういう意味だ？」

つまり外に連れて来てくれれば絶対に助けられるってこと……

雷の聖痕を発動「雷神」

次の瞬間には、雷速で近づいた俺は肥満体型の男からラシードの娘を奪い取っていた。

「な、」

呆然とする男を無視して城壁の上から飛び降りる。雷速で逃げないのは、女の子が耐えられないからだ。

「ひやく」

女の子の悲鳴を上げている。良い悲鳴だ元気そうだな。
気付いた兵が矢を射かけて来るが、すべて雷で焼く。

地面に降りるとすぐにラシード将軍の元に行く。

「おお、フローラ良かつた本当に良かつた」

「お父さん、うひ」

「どうしたー、フローラー。」

突然フローラが苦しみだした。首輪の逃亡防止のための機能だらう。
すぐに、首輪を外してやる。

「あつ
「なつ」

きょとんとしたフローラがじらじらを見ている。
頭に手を置いて

「もう大丈夫だよ。君は自由だ。」

フローラの目から涙が零れた。そつなるともう止まらぬ泣き出しへ
しまう。

ラシード将軍が、娘を抱き締める。

その場を離れ

「アッシュ降伏勧告は、すんだか」

俺の声はかなり冷たくなっていた。

「その返事が、あの子だつたんだよね」

「そうか。じゃあ適当に殺して来るから」

「気を付けてください」

「誰にいつてんだよ。」

俺は、そのままにしていた『雷神』の力で城壁の上に戻る。そこから、一方的な殺戮が始まった。

人間が雷速に、反応できるはずもない。めぼしい者を雷で殺していく。

奴隸と女子供以外をあらかた片付けると城門を開けて外で待っていたアッシュュ達を中に入れる。

その後王都からも人を集め城の庭園に来てもらひ。

庭園には、皇国兵、王国兵、国民、奴隸達にラシード達が集まっていた。

そこに、俺は一人の男を放り出す。

「ひい、わ、わたしを誰だと、お、思つている

「男をこの国の王を無視して。

「皆聞いてくれ。この男は、この国の王だ。此度の戦争はすべてこ

の男がやつたことだ。そして私は、この国と奴隸制度を否定する。この男は、その象徴だ、ゆえに俺が判決を下す。そして俺は奴隸のいない世界をつくることをここに宣言する。」

周りは状況をあまり理解できていないようだ、構わず

「『炎蛇・四首』……消えろ、元凶」

俺は男を四肢から炎蛇に食わせる。喰われた部分は、焼かれ血はないそのせいで失血死はせず長い苦しみを味わって死んだ。死刑のあと男の存在したはずの場所には王冠だけが残っていた。

近くに、アッシュュがやってきて

「私は、アッシュュ・クイント、クイント皇国の皇太子です。ここにクイント皇国皇帝クルト・クイント名の元にクイント皇国の勝利とグーロム王国内の奴隸の解放を宣言します。」

一時の静寂後に、ここに集まつた全ての人間が歓声を上げた。

王都は、そのまま宴に入った。

しかし俺には、仕事が残つていた。奴隸を解放する仕事だ。首輪を外しても次から次へと奴隸が来るので休む暇がない。

この戦争で、聖痕を四つも使つたのでかなり疲れていた。それでも休む訳にはいかないのでふらふらになりながら解放していた。一度寝ぼけて頭からこけてしまった。奴隸の解放は、見かねたテツが止めるまで続いた。

「ありがとうな、テツ。実は結構限界だつた。今日は、一緒に寝よう」

「う

「はい。お供します

俺は、城にあつた一室でテツを抱っこして眠りについた。奴隸兵五万と戦闘奴隸八千のほうは、城からマスター・キーが見つかりどうしても見つからなかつた少数だけですんだ。あぶなかつた六万近い人間を解放していたらぶつ倒れていた。

異世界35日目

マスター・キーがみつからなか五百人の解放が終わつた時すでにお昼を過ぎていた。全員が感謝を口にするのでかなり時間がかかつた。中には忠誠を誓う者までいた。

今俺の側には一緒に寝たテツしかいの仲間達を探すことにする。つとその前にアッシュに挨拶するか。

「よつアッシュ大変そうだな」

アッシュの部屋には、紙の壁が出来ていた。

「やあジン、失敗したよ。秘書官を連れてくるんだつた。」

「レティーシアは、手伝わないのか?」

「役に立たない」

バツサリ切った

「ジン手伝つてくれないか?」

「いやだ、それに俺じゃあ大したこと出来んだろ。それより俺の女達を知らないか?」

「ああそつちの問題があつた。実は一人判断に困る人がいてね、その人の扱いに困つていてレティーシア達に頼んだんだよ」

「判断に困る人?」

「ここの國の王つて子供はいなかつた筈なんだけど。その人、「私はあの男の娘だ」って言つんだよ。変だろ」

確かに敗戦國の王女を名乗る意味がわからない。普通敗戦國の王族なんて殺されるか良くて妾にしたりと政治の道具にされるのがおちだ。

「確かに変だな。俺も女達に会つてみるよ。」

居場所を聞いてその場に向かう。

教えてもらつた部屋に行きノックすると中からソフィアが顔を出した。

「ジン様ー！」無事で

「ジン」「お兄様」「じ主様」

聞き付けた三人が飛び出してきた。なんとか三人を受け止める。

「みんな元気そうだな。中の人に会わせてくれる」

中に通してもらい自称王女に対面する。

見た目は、森を思わせる深い緑色の長い髪。顔立ちはかなり整っているが、どことなく表情が硬い。体は小さく10才を越えた辺りだろうか。

「はじめまして俺はジン、君は？」

「これはどうも私は、ミコーと申します」

傍目にはわからないが、どことなく不安定な感じがする。

「みんな外で待つてて」

「ジン様、彼女に王女についての話をするなら気を付けてください」

「わかった

みんなを外に出す。

バタン

「それで何が聞きたいんですか？」

「君は何者だい？」

一瞬ピクッとなつたが

「私は」の國の王女です。」

「どうして王女を名乗つたんだい？」

「王女が王女と名乗るのがおかしいですか、英雄さん

「知つていたか」

「ここから見ていました。」

なるほどここは昨日の庭園がよく見える。

では、俺は仇になるのか

それにしては、彼女から憎しみは感じない

「どうして王女になりたいんだ？」「

「ですから」

苛立たそうにしたミリー

「いやこの際君が王女かどうかは問題じゃないんだ。」

「な、何で？」

あきらかに動搖だ

「君のことを知っている人がいない以上、君は王女になれない」

「そんな」

彼女は、かなりの衝撃を受けているようだ。

「この国の高官の、ほとんどは死んでいるんだが、君を知っているのは？」

彼女の言つたのは重臣ばかりでようするに、王室のよつな奴らだった。つまり俺が殺している確認はできない。

「王室でその人数しか知らないということは、君は何処かの村で王室とは直接関係なく生まれたんじゃないか？」

「そうです。私は妾ですらない女から生まれて。数年前に連れてこられました。」

ミリーの声が低くなつた気がする。

それでも続ける

「なら村には帰れないのか？」

「私の村は燃やされました。」

「・・・」

「私はこの国に全て奪われました。私の家族は殺され、村は焼き払われ、忘却の魔法で名前を忘れさせられ偽りの名前を『えられ。娘と呼ばれながらも、わたしの立場は伯爵の娘でした。そしてほとんどの間ここに監禁され教育だけを受けていました。」

ミニーは、全てをぶちまけるように語る

「もう私には、家族も生れた村も名前すらありません私には、何もないのです。確かなものが、信じられるものが、なら愚かであるとのこの国の王女でいなければ私は何なんですか？教えてください私は何なんですか？嘘で着飾った私は何者なんですか？」

空虚な顔に涙を浮かべた彼女を見ながら思つた。

この子は俺に似ている。

一度世界との繋がりをすべて失い自分のことがわからず、とても不安定になつてゐる。

違うのは、俺は自分で選び、ミニーは奪われた。

「たしかに君は何者でもないのだろ？」「

「ツ、そう、ですよね」

絶望に打ちひしがれるミニーに俺は近づき脇に手を入れ抱き上げる。

「な、何ですか？」

できるだけ声に力を入れて話しかける

「何者でもないのなら、何者かになれば良い、まあ名前を『えでや』
る。これから一生使つ名前だ。」

「名前？」

「そうだ。そうだな・・・・・・・・今から君はフェリスだ。」

「フェリス？」

「そうだ。フェリス何か好きなことや得意なことはないのか？」

「えつえつ」

この時女の子は、ジンの勢いに呑まれていた。

「何があるだろ？？」

「えと、料理が好きです。」

「上手い？」

「と、得意です。」

「なら俺のところで料理人をしないか？」

「え、なんで」

「俺の仲間で料理が得意なやつがいなくてな。」

「そうじゃなくて・・・なんで、そこまでしてくれんですか？」

「俺も似た経験がある。その時、俺はすぐにソフィアたちに出会えたから大丈夫だった。」

「え？」

「だから、俺が居場所になつてやるよ、名前もやる、だから新しい人生を歩んでみないか、君には未来も自由もある、これから君は何でもできるんだよ。確かに君は一度終わったのかもしね。だけど、もう一度俺の側で始めてみないか？」

「あつ、わたし」

フュリスの目から涙が溢れる

「いいんですか？」

「おいで」

フュリスになつた女の子は、ジンの胸に顔を埋めて

「わあ――――」

大きな声で泣き出した。

「はじめよつ、新しい君を」

フェリスは落ち着つくと

「ありがとうございます。それで、そのお願いがあるんです」

恥ずかしそうに

「あのジンちゃんのこと、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「えつ」

「ダメ？」

「いや、いいよ」

それだけで、顔を輝かせてくれた。
ティリエル、なんて言つかな。

「フェリス仲間になってくれる？」

「はい」

新しい仲間が加わった。

そこで外の皆を呼び戻した。

あらためて自己紹介をした。みんな名前が変わったことに驚いていたがフェリスが名乗った時にとても嬉しそうに笑ったのを見て、なにも言わなかつた。

ただ、ティリエルは

「お兄様は、私のお兄様です」

「お兄ちゃんになつてくれるつていつたもん。だからお兄ちゃんは、
私のお兄ちゃんだよ」

フェリスが子供っぽくなつてゐる。こちらが素なんだうな

「む～」

「う～」

「いひ、二人とも仲良くなさい。」

二人を左右に抱き抱えキスをする。

「お兄様」

ティリエルは、うつとりしていつたが

「～～～～～」

フェリスは、言葉にならない悲鳴を上げ、顔を真っ赤にしていつる。

フェリスは、初々しいなと和む。

「そついえばアッシュに話通さないとな。ついでに皇國に帰る」と
も話すか、皆それで良いか?」

「はい。いいですよ。」

ソフィアが返事をして他の旨も頷く。

「もういえばレティーシアは、どうあるんだ？」

「私も戻る。事務仕事は苦手だ。」

うん、アッシュも期待していなかつたみたいだしね。
今日は、もう遅いから帰るのは明日だな。

「よし、暫で夕食にしよう

「はい」

アッシュに、フェリスは俺が預かることになったことと明日京都に
戻ることを伝えた。戻ることを伝えた時泣きそうになつていたが男
の涙なんかに興味はないので無視だ。

27話 新しい我が家

異世界36日目

皆で朝食を取つてゐる時に

「そういえばフューリスの位置付けはどうなつたのだ？」

レティーシアが聞いてきたので

「料理人兼メイドだな。」

「まあ、メイドはなんとなくわかつてゐたけどね。あの格好だしね」

俺の隣のフューリスは、メイド服を着ていた。少々幼いが服装は正統派のメイド服だ。ちなみにイリヤも対抗してメイド服を着用している。一人とも可愛い、フューリスは小さなメイドでイリヤはエルフメイドに仕上がつてゐる。

「料理得意なんだ」

「はい」

「IJの料理もフューリスが作つたんだぞ」

「え、そうなの。いつもの料理と比べても遜色ないよ」

「はい、とってもおいしいです。」

「すういのね。まだ小さこのこと」

「小さいは、余計です。」

そつ言いながらフヨリスも満更ではないらしい、頬が緩んでいる。

食事も終わつた頃に、アッシュが訪ねてきた。

「やあジン、お密さんが来てるよ」

「お久しぶりです。ジンさん」

そこには、ギルド職員のクレアさんがいた。

アッシュにクレアさんを皇国に送るよつに頼まれ何がなんだかわからぬまま城を出ることになった。
道中何をしに行くのか訊くと

「ギルドマスターは基本一国に一人なんです。普通は戦争などで国が潰れたり増えたりした時に採めるんですけど、今回はうちのマスターがあつさり降りたんです。そしてギルドマスターがいるところが冒険者ギルドの本部になるので、それで皇国ギルドの方といろいろ調整するためにわたしが赴くことになつたんです。」

「大変だな。わざわざ皇国を行き来するなんて」

「いえ、そうでもないですよ。もともと皇国には興味がありましたし、それに向こうに住む予定なんです。」

「え、住むの?」

「はい、まだ住む家は決まっていませんけどね。」

「またなんで?」

「毎回報告に戻るのも面倒ですし、それに興味があるんです。英雄様に」

「ぬ

「む

「あらあら

「一名様追加

「はは

女達の反応はそれ、それだな。最近の英雄といえば俺しかいないからな。

「あ～まあよろしく。」

「ええ、よろしくお願ひします。」

異世界38日目

皇国の城についた時、俺達は国賓待遇でもてなされた。召し使い達が左右に立つて道ができるている。

「ジン様、ご無事で」

たくさんのお迎えの中からミコトさんが出でて迎えてくれる。

「皇帝がお待ちです。」カラリビビツ。

クルト皇帝の執務室に案内された。

「ようクルト久しぶりだな。」

「ジンくん、ありがと。君のおかげで問題がいくつも解決したよ。単純な意味での脅威であったグーロム王国を潰してくれたのをはじめ、グーロム王国内の奴隸推奨派の貴族達の殲滅、ラシード将軍の引き入れに奴隸の解放これらすべて君がいなければなしえなかつた。」

「といつても、まだ問題は残つてゐるだる。一応戦場の貴族と王城の貴族はすべて始末したが残党はいるだる。ラシードだけにグーロムの軍を任せるわけにはいかないしな。元王国領が落ち着くのはいつ頃になりそうなんだ?」

「半年以内には一先ず終わらせたい、他国に集まつてもらつのに時間がかかるからな。それまでには終わらせないと魔物の大侵攻に対して動けないかもしれないからね」

「半年か、実際に元王国領を立て直すのまだ先になるのだらうな。一先ずといつのは、本当に緊急の要件だけを片付けるのだらう。」

「まあそれまで俺はゆつべつさせてもらつよ。」一ヶ月忙しかつたしな。」

「おおそろかゆつべつするのか、そこでだ、どうだねジンくんゆつ

くつするためには自分の屋敷など欲しくはないかね？」

「なんだよ、突然」

「いや、君への報酬を考えていたんだよ。先程言つたとおり君の戦果は計り知れんそれで報酬に関して悩んだ結果、その候補のひとつが屋敷になつたんだよ。どうだね？」

「そうだな、ありがたく貰つておこうかな。」

「あれ？ 意外だな。君はどこかの国に肩入れするのは嫌がると思つていたのだが」

「まあな、でもいつまでもどこかの宿屋に泊まるのも問題だし、それに屋敷は報酬なんだろ。それに帰る所があるつていうのは良いことだからな」

帰る家があるのは、割と重要だと俺は考えている。

「そうかい。それはそれとしてレティーシアについては、考えてくれたかい？」

「俺としては、歓迎なんだが国としてどうなんだ？」

「たしかにすぐに結婚というわけにはいかないな。だから今は一緒に屋敷に住ませてやつてくれないか？」

「ち、父上！」

縁談は以前にきいていたが今度は同居の話まで出てきたのだと黙つて

いられない。まあレティーシアは、怒っているとこうより恥ずかしがっているようだが。

「俺は構わないが、屋敷は大きいのか?」

「まあまあ大きいよ。それでレティーシアは、どうするんだい?」

「わ、わたしは」

「ジンくんの側には魅力的な女の子がいっぱいいるようだが、このままでは出遅れてしまうぞ」

「うへへ、・・・・ジン殿そのへ厄介になつてもいいのだろうか?」

「もちろん」

「よし決まりだ。それじゃあ、屋敷の場所は、ミリアが知っているミリアに案内してもらつてくれ」

「わかった」

そして俺達は、ミリアさん先導のもと俺達の家になるところに向つた。

「「「でかい」「
「「「大きい」「」

「確かにでかいな。」

「ミコトを見ているんですか！」

ソフィアに怒られてしまつた。

「ミコトさんの胸」

「確かに大きいですけど、今はそつそつじゃありませんお屋敷のことです」

大きいを連呼されミコトさんが赤面している。

「皇帝が言つてたじやん大きいって」

「ですがこれは」

田の前には、豪邸と呼ぶにふさわしい建物だった。軽く迷子になれる大きな大きさだ。皇族のレティーシアはともかく、ほかの女達は、萎縮してしまつてゐる。

「それだけの仕事をしたつてことだよ。」

「でもそれはほとんびりジン様の手柄で」

「なに言つてんだよ。俺はお前達がいるから頑張れるんだ。お前達のおかげで俺は孤独にならずにすんでいるんだからな。俺が住む以上俺の女が住むのになんの問題もないさ。」

「うへん、わかりました。」

まだ、不服そうだがその内なれるだろ？

「それでもこの規模だと掃除が大変だな

「それなら大丈夫ですよ。私がジン様のお世話をさせていただくな
とになったので、掃除等はお任せください。」

これには、焦った。

「いやいや、それはさすがに悪いだろ。せっかく皇族付きなんだし、
それにいくらミリ亞さんでもこの規模を一人で管理するのは

屋敷を見ても慌てなかつた俺が、ミリ亞さんという個人が関わつた
瞬間焦りだしたのを見て。

「　　あはは　　」

ミリ亞さんを含めみんなに笑われてしまった。

「主らしげです。」

テツよ、どうこう評価なんだそれは。

「ふふつこれは、私から志願したんですよ。レイトといつ名前を覚
えていりますか？」

「ああ覚えてる、戦闘奴隸一千を解放したとき一番最初に解放した
やつだ」

「レイトは私の弟です。」

そうだったのか、そういえば俺が皇女を助けた時、ミリアはどうしてもグーロム王国との交渉に行きたそうだった。弟が奴隸だったからなのか

「ジン様、弟を助けていただきありがとうございました。この恩を返すために私は志願したのです。」

言ひきつた後顔を赤らめて

「あと、その、気になるのでしたら、わ、私の胸を好きにして下さつてもいいですよ」

女達は、少し呆れ顔だ。俺としてはつれしい、ミコアさんの胸は、この場では一番大きいのだ。

「それでは夜にでも」

ポカ
ビシッ

フェリスにパンチされレティーシアにチョップをくらつた。その後その二人を何故か周りの女達が諭していた。
内容を聞いてみると内、ジンと一緒にいるなら早くなれなさい、といつことらしい。

「でも一人だと大変だろ」

「私も手伝いますよ」

「私も」

ジンのメイドをやつているフュリスとイリアが名乗りを上げる。

「それでも三人だしなあ」

「それも大丈夫です。ジン様が解放された奴隸の方達から志願した人を国で雇つて屋敷にいれるので大丈夫ですよ」

至れり尽くせりだな。

「出来れば屋敷内は女の子だけがいいなあ。俺の女をジロジロ見られるのは嫌だし。それはそうと、いろいろありがとうございます。それじゃあ改めてようじへ//コアさん」

「私はもうあなたの物です。//コアと及びください」

「わかった。//コア」

そうして俺は、新しい我が家に入った。

その夜に、ジンの寝室に//リアが訪ねてきた。

「本当に来てくれたんだ」

「来ちゃいました」

「本当にいいのか？恩とこつても弟を助けたことだろ？」

ミコアははにかみながら

「ふふっ、お忘れですか、レティーシア様を助けに来て頂いた時わ
たしも助けてもらつてるんですよ」

「まあ、 そうかもしれないが

「それとも魅力ないですか？」

そういうながらミリアは服を脱いでいくそして下着姿になり。胸
を強調している。

明らかに体に自信があるし余裕もある。ならば

「いいや、かなり魅力的だよ。」

そう言つてミリアを後ろを向かせて胸を両手で包む。そして氣と電
氣を使って一瞬でミリアを絶頂に導く。
この世界に来てから少しづつ性技を練習していたのだ。ミコアの余
裕は一気に消え去つた。

「寝かさないからな

「あ、ちよ、まつ、~~~~~ツ

異世界38日目

食事中にイリヤが

「これからどうするのですか?」主人様

「そうだな、今は聖痕が使えないから、使えるようになるまで、家で束の間の休みを楽しむことにする」

「それでしたら皆ちゃんと順番に楽しむところのはじりですか?」

それいいな、個人と一緒にいられる時間少なかつたからな。

「それ採用」

「わたしも賛成です」

声が膝の上から聞こえる。フェリスが俺の膝の上で食事を一緒にとつてているのだ。

料理人の特権だそうだ。毎日すると皆が怒りそうなのでほどほどにしよう。

皆と遊ぶところとはお金を使うな今の残金は

それほど大きな買い物はなかつたがお金は消費するものなので、これまでに細かいところで使つたのが1000ギル、フェリスの服類

に1000ギルの2000ギルを使ったので

45000ギル - 2000ギル = 43000ギル

皇国軍と一緒に行動していたのであまり出費はなかったようだな。

でも「これ俺だけの金じゃあないんだよな。まあ、なんとかなるか。

・レティーシアの場合・

お昼すぎにレティーシアが俺の部屋に現れた。

「ジン殿、ぐじ引きの結果最初はわたしになつたのだが、・・・・・
何をしよう?」

「確かになほとんど考える時間なかつたからな

「うーん、・・・あつ、そうだジン殿手合させをしないか、一度や
つてみたかったんだ。」

「休みじゃあなくなつているが、まあいいか。中庭でやひつか

「やつた」

レティーシアが嬉しそうにしてくれているなういいか。

中庭に出て俺は木刀を、レティーシアは木剣を構える。

「はじめ」

途中で捕まえたメイドさんに合図をいても「うつ。 捕まる時に手を掴んだら赤面された。 メイドのほとんどは俺が奴隸から解放した人たちで、 恩を感じている人が多い、 中には好意を持っている人もいるらしい。

打ち合戦を始める。

打ち合つてわかつたがレティーシアの剣はリリスのような戦いの場で鍛えられた剣ではなく誰かにならつたのだろう技があり型があるようだ。 何かの剣術なのだろう動きが洗練されている。 ただし単調で型に嵌つていて分俺にはやりやすい。

フェイントで釣つた所に懐に入り足を引っ掛け肩で押し倒す。 あつさり転倒してそこに木刀を突きつける。

「負けたか」

ちょっと不満そうなレティーシアを立ちあがらせる

「しかし、 依然見たときはもつと早かつたと思つただが」

それで不満そなのが、 手加減したと思われたか

「手加減したわけじゃないぞ、 普段は精靈にいろいろ助けてもらつてるんだ。 さつきのが俺本来の力だよ」

「そなのが、 それでも私は負けたのか」

今度は、落ち込んでしまった。

「まあ俺の師は、刀神つまり神様だからな」

「か、神が師なのか羨ましいな」

「そつでもないぞ、あいつの修行つて滅茶苦茶だつたし。なんど死を覚悟したことか、おまけに期間が短いからつて一時期は、朝日晚、飯時、寝てる時も風呂の時も不意打ちしかけてきやがつて。風呂の時なんか壁壊して女子風呂と繋がつてしまつて闇の精霊王と鉢合つし。」

「ちょっとアラウマになつていろらしい。少しトリップしていく。

「ジ、ジン殿帰つて来い。そ、それより私に対してなにか指摘はないか?」

「あ、ああそだな攻撃が単調に感じたかな、俺も未熟だからよくわからないけど、少なくともレティーシアの攻撃を受けていて驚きはなかつたな。まあその分まだまだ強くなれると思つが。」

「やうなのか、ジン稽古に付き合つてくれないか?」

「いいよ。存分にやるつ」

「一人で夕方まで汗を流したが、全くといつていいくらい色氣のないす」し方だなレティーシアらしいが。

・ソフィアの場合・

レティーシアとの稽古が終わりレティーシアに先にお風呂入つても
らつてゐるといふ

「ジン様、次は私の番ですよ。」

「こんな時間からでいいのか?」

もつ口が沈んでゐる。あまり時間もないとと思うのだが。

「大丈夫です。さつき中庭の稽古見ていたんですけど汗を搔かれて
いたので、その、一緒にお風呂に入りませんか?」

なんだこの展開、レティーシアとは正反対にとても色氣のある展開
になつてゐる。まあ断る理由もない

「じゃあ俺からもお願ひするよ

「ジン様、お邪魔します。」

レティーシアがあがつた頃に浴室に向かい、先に入つて待つてゐると

タオル以外なにも身につけていないソフィアが入つてきた。髪を頭
の上で団子にしてゐるのが新鮮で可愛らしい。

「お風呂お流します。」

「ああ、頼むよ。」

ソフィアに背中を流してもらつた後で

「次は俺が背中を流そう」

「えついいですよ。そんな

「いいからいいから」

「ジン様手つきがいやらしいです」

「気にするな」

「あつ」

しつかりソフィアの背中を流してもらつた。じょっとだけいたずらした。
体を洗つたら二人でお湯入る、もちろんタオルは外して入るので全裸だ。
やつと恥ずかしさが薄れてきたのかソフィアが

「ジン様見てください」

精靈術で作つた見事な水の鳥を見せてくれた。

やつぱりソフィアの制御は、すばらしいな。この能力があつたからこそ奴隸兵5万を押し流す決心が出来たのだ。
ソフィアは俺をすゞいと言つがソフィアも少しは自身を持つてもいいと思うのだが。

「すゞいなソフィアは、俺も何か作つてみようかな」

そこからは、一人で精霊術を使つたり精霊術の話をしたりして時間をすごした。

そろそろあがれうかと思ったときソフィアが型に頭を寄せてきた。

「私村にいた頃は、こんなことになるなんて思いもしませんでした。ずっとあの村で巫女をやりながら精霊術で農作業を手伝つて暮らすものと思つていきました。ジン様のおかげで世界を見られました。ありがとうございました。ジン様のうれしい顔がうれしい・・ま・・・・す」

バシャ

言葉が尻すぼみになつていつて最後には顔から湯船に顔を落としました。

すぐに抱き起しすと真っ赤になつてている。完全にのぼせている。体を拭いて服を着せ自分の部屋で介抱していると

「うへん

「起きたか？」

「あ、ジン様申し訳ありません」

状況も理解できていないようだ。

「駄目じゃないか無理しちゃ」

「だつて」

ソフィアが口の辺りまで毛布を上げて

「ジン様と一入つきりで話すの楽しかったんですね」

可愛いなオイ

「まあ、まあそれじゃあ仕方ないな、うん」

「ジン殿いますか?」

レティーシアだ

「どうぞ」

「失礼します。よかつたソフィア殿は気づかれたのですね」

「ああ、ついにやつきたな」

「それでですねジン殿、その、夜は私とソフィア殿が闇を共にすることになつてゐるのですが、よろしいでしょ?」

そんなことになつていたのか。明日もそうなるのだろうな。

「もちろん、歓迎するよ。もともとソフィアは、動かせなかつたしね」

その夜は、俺を中心に川の字で寝ことになつた。ソフィアとレティーシアは、二人とも疲れていたのだろう(一人は、手を繋いできた程度で静かな夜をす)した。

29話 女達との休日 2日目

異世界39日目

・ティリエルの場合・

「あの、お兄様はお空のお散歩に行きませんか？」

朝にティリエルが訪ねてきた。

「うーん、今聖痕は使えないからなー難しいな」

「いえ、私の背に乗つてくださいさればいいです。」

「いいのかい？前乗つたときはかなり疲れていただろう」

「わたしも成長していますし、そんなに早く飛ばなければ大丈夫です。」

「ティリエルがいいならいいけど」

「じゃあ行きましょ」

俺とティリエルは、朝のお散歩に空を飛んだ。

以前に乗せてもらつた時は、とても速くて余裕がなかつたからあまり楽しいとは思わなかつたが、実際龍の背に乗つて空を飛ぶのはけつこう楽しい。前の世界では夢想でしか出来なかつたことがこの世界では出来る、じついう時異世界に来てよかつたと思つ。

ティリエルに乗って皇都を一週してから屋敷に戻る。

「あ、ティリエルそのまままでいて」

「どうしたんですか、お兄様？」

「龍の姿のティリエルの世話をしてみたくてさ」

龍の姿のティリエルは、とても綺麗だ銀の鱗に覆われていてすべて本物の銀のような輝きを放つていて。そしてその光が不快にならないのだ。そんなティリエルを世話したくなつたのだ。

メイドさんに頼んで、タオルを持つてきてもうひとつ持つてきてもうつたタオルでティリエルの体を拭く。

「気分はどうだ？」

「気持ちいいです。もつと強くして下さつても」

「やうか」

ティリエルにどうして欲しいかを聞きながらお世話をさせてしまつた。

ティリエルの世話が一通り終わりティリエルも人の姿に戻る。

今は膝の上で遅めの朝食を取つていて。昨日フエリスが膝の上で食事しているのが羨ましかつたようだ。

食事をしていると突然ティリアルが

「お兄様、どうして私は夜伽に呼んでくださらないんですか？」

「「ホ、「ホ」

むせてしまつた

「どうした突然？」

「私だつてもう十五ですよ、前の世界はよくわかりませんが、この世界では結婚だつて出来ます。」

ティリールの見た目は、少々幼いフェリスほどではないが、アルベルトと話してからと考えていた。答えに困つてると悲しそうな聲音で

「やつぱつ見た田ですか？」

「やつぱつじやあないけど」

「じゃあ私のことがお嫌いなのですか？」

「それはありえない。愛してゐる」

「なら」

「・・・わかつたよ。やつだな16歳になつたら、俺の方から呼ぶよ、俺の国では女性は16歳から結婚できるんだ。頼む俺はティリエルを大事にしたいんだ。」

「・・・わかりました。今はその言葉で我慢します。ただ一つお願ひがあります。」

「なんだい？」

「キスをしてください」

「わかった」

そう言つて俺はティリエルにキスをする。するとなんとティリエルが舌を入れてさうに舌を絡ませてきた。俺もそれにこたえる。

少し長めのキスが終わつたとき

「『うわあ』までした。」

うつとりした表情のティリエルがいた。

その言葉は、朝食の終わりともう一つの意味をもつていた。

・テツの場合・

ティリエルとの食事が終わり部屋でくつろいでいると

「主、私の番」

「どうして足音を殺してきただ。」

テツが音もなく現れた。

「主を驚かせようとした。けど、驚かなかつた足音聞こえた？」

「いいや聞こえなかつた。ただ精霊が教えてくれるんだよ、不自然

な行動を取ればわかるんだ。」

「主に奇襲は効かないの?」

「少なくとも俺個人には、奇襲は無意味だな。」

「主す」、「さすが私の主です。」

「はは、ありがと。テツは、何をするか決まったのか?」

「決まらなかつた。主何かない?」

「せうだな、・・・街に出よつか」

「街に?」

テツの頭を撫でながら

「何か楽しいことがあるかもしないだ」

「はい、行きましょう」

今は、テツと手を繋いであってもなく街を歩いている。テツは、歩いているだけなのに楽しそうにしてくれている。だからといって何もしないわけにはいかないよなあ、装飾品店が見えてきた。テツは、女の子だし鉱石を吸収する、興味があるかもしない。

「テツ、あそこに入る?」

テツを連れて店に入る。

「わあ、主寶石がいっぱいです。」

よかつたテツは、興味をしめしてくれた。テツと店内を見て回る。

「主ありがとうございます。」

テツが小走りで展示品を見て回る。テツのこんなにはしゃいだところは、はじめて見たな。

「この穴は、何でしょう？」

テツが見ている者は銀細工の首飾りで翼を模して作られているようだ。二つの翼が重なるように作られていて、翼に一つずつ穴がある。店主に聞くと

「その穴に宝石を埋め込むんです。プレゼントでよく使われていて受け取る側と渡す側で宝石を選ぶんです。」

その説明を聞きながらテツは、ずっとその首飾りを見ていた。気に入つたようだ。

「お値段は？」

「付ける宝石によつますが付ける石自体は小さいので、2000ギルから2500ギル程度になります。」

「テツは、何を付ける？」

「いいのですか？」

「いいよ、初めてのテートのプレゼントだよ」

「ありがとうございます。」

テツはダイヤモンドを俺はブルートパーズを選んだ。俺は、確か前の世界で、トパーズの石言葉でいい感じだった気がしたから選んだ。テツにダイヤモンドについて聞くとダイヤモンドは、硬度がとても高いのでテツのような存在には特別であるらしい。

「どうですか主？」

「似合つているぞ」

「えへへ～～」

今日はテツがよく笑つてくれるのが嬉しい、テツはあまり表情をださないから笑つていていうことは本当に楽しんでくれているのだろう。

いつもは、落ち着いていているからか見た目より大人っぽく見えるが、笑うと雰囲気が見た目相応に幼く見える。笑顔のテツと腕を組んで俺は帰路についた。

テツの首には銀の首飾りが揺れていた。

これ以降テツが小太刀の姿になった時、柄の下の部分に銀の装飾と一つの宝石が輝いていた。

43000ギル・2400ギル＝40600ギル

- フェリスの場合 -

「テツさんが笑顔で部屋の方に歩いていっていたんですが、お兄ちゃんがないところで笑うなんて結構珍しいですね。お兄ちゃん、テツさんと何してきましたか？」

「テツとは、街でデートをしていたんだ。それより、フェリスは何をするか決まった？」

「デート羨ましいですね。私がしたい事はですね、わたしといえばやっぱり料理なのでお兄ちゃんの故郷の料理を再現したいです。」

「・・・ありがと、フェリス」

思わずフェリスを抱きしめてしまう。フェリスは、顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに

「それで、その、食材のお買い物に一緒に行きませんか？」

「いいよ、それじゃあお買い物といつものおデートにいきますか？」

「い、いえデートとかそんなのじゃあ・・・デートなのかな？・・・デートかあ」

最初は狼狽していたが、最後の方は嬉しそうに顎を緩めていた。

出る前に料理を決めるのが意外と悩んだ。出来そうな物でこの世界で似ている物がなく、かつ俺が食べたい物となると意外と少ない、この世界の食べ物は、異世界人の俺が不自由しない程度には、前の世界と似通っていた。

結局作るのは、ハンバーグになつた。この世界では、基本的に肉は焼くだけだつたのだ。

「お兄ちゃんの話を聞くと混ぜるお肉と野菜が問題ですね、香辛料はなんとかなりそう。」

「いくつか買つて帰つて試そつか?」

「せつしましよう。余つたお肉は、別のときに使えばいいですし

「それじゃあ行こうか」

まずは、肉屋だ。聞くところの世界のお肉は、魔物の肉が多いらしい。一応牛や羊は、いるらしく放牧もしてはいるがそれは毛や乳を得るためだ。魔物の危険があつて大量に家畜を飼つのが難しいらしく、家畜を潰して食べることはまれらしい。ちなみに豚はいの魔物にずいぶん昔に絶滅させられたらしい。

「それじゃあ牛型の魔物のお肉を一種類と猪のお肉に猪型の魔物のお肉をお願いします。」

四種類のお肉で挑戦することになつた。
おじちゃんが話しかけてくる。

「嬢ちゃん、家の手伝いかい?えらいねえ、」おじちゃんがお兄さんかい?」

フエリスは、今メイド服を着ていないので家の手伝いと思われたらしい。

「いいえ違います。」

「あれ？ でもお兄ちゃんって呼んでなかつたっけ。じゃあ近所のお兄さんかい？」

「違います」

「じゃあ親戚」

「うへ、ちがうもん

フエリスの素が出てきて泣きそうになってしまった。理由がわからぬ理由がわからぬので慰めることも出来ない。おじひやんもお姫を泣かせたことにかなり焦っている。

「あんた、なにお姫泣かせてんだーーー。」

「こや、俺もよくわからんべつね」

「まったく、」の二人は「トーントの途中だつたんだよ。それをあんたは、妹の枕に押し込めよつとして」

「や、そうのかい嬢ちゃんそれは悪かった。」の鳥肉もおまけするから許しておくれ

おじひやんが慌てて謝罪を口にする。

「いえ」迷惑をおかけしました。大丈夫です、私のほうにも問題がありましたから

居心地が悪くなつたので店を出る」とあります。

「お兄ちゃん、私たちつてデートしてるのは見えないんだね」

「周りの田なんか気にするな実際はデートをしているし、俺はフェリスを大事に思つてこる。それでいいじゃないか、それにその内、気にならなくなるさ」

「どうしてですか？」

「俺は、精霊界で長く過ごしていったから体質が変化して少し自然そのものに近くなつてているんだ。そのおかげで俺は長寿で歳を取るスピードも遅いんだ。水の精霊王の話では300年は生きられるらしい」

フェリスの頭を撫でながら

「三年後には、しつかり連れ合いに見えるわ」

「嬉しいんですけど、それだと私のほうが先におばあちゃんになつてしまいそうですね。わたしも冒険者にならうかな」

「どうしてそこで冒険者になるんだ？」

「冒険者的人はある程度強くなると少し長寿になるらしいんです。能力ランクA以上必要らしいですが」

「へ～それなら同じ時を過ぎさせるかもな。」

「はい、がんばります。」

フエリスがやる気になっている。まあいか護身にもなるし

「それじゃあ残りの食材を買ってくるか」

「はい」

後は、混ぜる玉ねぎとかの野菜だなこれは、もうフエリスにお任せだつた。

家に帰り、フエリスと一緒に夕飯を作ることに手間のかかる挽肉は俺が担当した。

結果ハンバーグは牛型の魔物のお肉と猪型の魔物のお肉が一番おいしかった。

その夕食には食卓にハンバーグが並び、フエリスはいつも以上に幸せそうに俺の膝の上で食事を取っていた。

その夜

「　　「今日は私たちです。」」

やつぱり、寝室に二人娘がやって来た。ティリエルとテツとフエリスだ。

ティリエルの抱き付き癖に対抗するようにほかの一人も抱きついてきた。

一番小さいフェリスが体の上でティリエルが右、テツが左に抱きついたままの就寝となつた。三人ともやわらかかった。

異世界40回目

・ミコアの場合・

「（レ）主人様失礼します。」

「どうしたんだ、ミリア急に（レ）主人様なんて」

前までジン様だったのに

「ジン様は私の主になりましたので、わたしもイリヤさんを見習つて（レ）主人様とお呼びしようと思いまして。」

「いやまあ、俺はいいんだけどね。それよりミコアは、どうするのか決まった？」

「それが決まらなくて」

「？・・・なんで」

「私は、使用者としての教育を受けていたので自分の主だと思つと何かを頼むのも気が引けるといいますか」

生真面目だなミコアはそこもいい所だが。

「それじゃあ、ミコアの仕事を見学させてもらおうかな。」

「見学ですか？それは楽しいのですか？」

「あつと楽しげ」

そして今、俺とミリアは普段使わない部屋を掃除していた。これは、通常の仕事ではない、そもそも一人でやる仕事でもない。何故こうなつたかといふと

ミリアと話し、やることは決まったが、問題が発生した。仕事がないのだ。今日ミリアは、オフなので仕事を入れていなかつたのだ。他の人の仕事をとるわけにもいかない。そこでミリアが出した案が

「空き部屋をお掃除しましょう。」

といふことになつた。元々ミリアの仕事は掃除が多いらしい。食事をフェリスが、掃除をミリアが担当して周りのメイドはその手伝いをしていくやうだ。

さすがに一人で片付けるのは大変なので俺も、手伝つことにしたのだ。

「ご主人様は、ご主人様なのですから、あまり他の人の仕事を取らないようにしてくださいよ。」

まあ、仕事を取ることが悪いのは何となくはわかる。仕事がない使人人は肩身が狭くなるようなのだ。

「わかつたわかつた。でも今日はミコアと共同作業がしたかったんだ。」

「「」、「」主人様」

「おお、照れてる照れてる。

「ほら、外に出たらあまつミコアに会えないかもだろ」

「あつ、そうですね。」

「ミコアが少し落ち込んでしまった。落ち込んでくれるのなら提案ぐらいはしてみよう

「フーリスにも話したんだけどミコアも冒険者登録をして一緒に旅をしないか?少し危険だから断つてもいいんだが」

「いえ、行かせてください!。私てつきり置いていかれると思つていたので、誘つてくださつて嬉しいです。」

「そこまで、嬉しいものなの?」

「だつて誘つてくださるとこ?」とは、わたしを側に置きたいと思つて下をつてているところ?と?で、それが嬉しいはずがありません。」

「そ、そつか。それじゃあ明日でモギルドに行くか

そつ言わると少し照れるな。ミコアは興奮した様子で

「はい、それでは、引き継ぎなどをしないことだけないので、ひょりと行つてきます。」

行つてしまつた。掃除の途中だつたがまあいいか、まだ終わつていなが切りは良いのだ、後は本職に任せよ。

・リリスの場合・

お昼を過ぎたころリリスが部屋になつて來た。

「リリスは決まつた?」

「私も手合わせ・・・と言いたい所だけどそれじゃあ、つまらないから一緒にお出かけしよ」

「わかつた。何処に行くんだ?」

「武具屋」

目的地に向かう道すがら何故武具屋なのか訪ねると

「実は、ノワールサイと戦つた時ので、レイピアの損耗が激しくて新しい武器が欲しいから下見をしたくて」

「そんなんに前からか、大丈夫なのか?」

「大丈夫だよ。すぐには折れないと思う

「それならいいが」

「ついでにいふことに皇國の武具屋の一つに着いた。

「前の武具屋では、武器を見るのに付き合へなかつたんだよな。リ
リスは今回もスピード重視なのか?」

「やのつもつだからレイピアにしようつと黙つただけど」

惱みながらレイピアの棚を見るリリスに

「ちょっといいか?」

「なに?」

「リリスつて基本刺突がメインだよな」

「やうだよ、なんで知つてゐの? 手合させしたことないよね?」

「リリスのことは、よく見てこらな」

「あ、ありがと」

顔をそらしながら礼を言つてゐる、照れてるようだ

「それならエストックなんかどうだ、刺突を重視した武器だからリ
リスには合つと思つんだ」

エストックとは両手用の刺突重視の武器だ。エストックは、剣身の

断面は菱形で、先端になるにつれ狭まり先端は鋭く尖っている。レイピアと違い両手で突ける分威力が期待できる。

「リリスのスピードは申し分ないし少しはパワーを求めてみたらどうだ。ノワールサイのよつたな固いやつに出会つたら大変だろ」

「エストックかあ、みてみよっか」

エストックは、刀同様数が少ないから奥に仕舞われているらしく表には並んでいない。

店主に奥から持つてきてもらいエストックみてみる。全てに目を通した結果一つのエストックを手に取つた。

「これが一番いいかな」

そのエストックは、軽量化の魔法を始め、一重強度強化と雷を纏わせて貫く力をかなり高めた物だ。かなりの業物だ。

「これは、いくらですか?」

「それでしたら複数の魔法をかけられているので、15000ギルになります。」

「た、高いよジン」

「確かに高いな、まあ大丈夫だろ。それをくれ

「ジン今日は下見のつもりだつたんだけど」

「いいのいいの、なあ護符つてあるか?」

「ありますよ、いくつまで？」

「一〇〇くれ

40600 - 17000 = 23600 ギル

残金 23600 ギル

「ジンは刀見ないの？」

「テツがいるだろ？」

「ふふん、レティーシアとの稽古を見ていた時に気付いたなんだけ
どジンって本当は、一刀流だよね。」

「・・・気付かれたか。皆を驚かそうと思つて黙つていたのになあ。」

「

「他には、誰も知らないの？」

「テツは、知つてるよ、なんせ俺の小太刀だからな。話さない訳に
はいかないし、自分で気付いていたしな」

「少し妬けるなあ。」

「そういうなよ。そうだな、気付かれたんなら、ちょっと見てみる
か」

店主に刀も見せても、らりうが

「やつぱりテツに釣り合つ刀はないか」

刀を戻し店を出る。リリスが腕を組んできた。リリスの感触を楽しんでいると

「ジン、今度、一刀流見せてよ。」

「機会があればな」

・イリヤの場合・

最後の一人が、夕食と入浴の後に部屋にやつて來た。

「（イ）主人様、私が最後になりました。」

「いらっしゃい、でも今から何をするの？」

以前この時間帯に來たソフィアは、お風呂を共にしたが、今日はそれも終わっている。

「（イ）主人様もお掃除とお買い物でお疲れでしょうからマッサージをさせてください。」

「俺には、願つたり叶つたりだが、イリヤはいいのか？」

「はい、（イ）褒美です。させてください」

「そこまで言つならお願ひするよ」

そのまま座つていたベットに横になる。ベットに寝転がる俺にイリヤが跨りマッサージを始める。
イリヤはマッサージに治癒魔術と一緒に使うようでかなり気持ちいい、蕩けそうだ。

「（）主人様、質問してもいいですか？」

「なんだい」

「（）主人様はどうしてこちらの世界に来たのですか？」

「言わなきや駄目？」

「駄目ではありますん。ただご主人様の女の一人として知りたいのです。」

「わかつた。話そう、そつだな理由は、いくつかあるんだが結局俺のためなんだよな」

「ちゃんと教えてください」

「そつだな簡単なのは、神が言つには、俺でなければいけなかつたらしいんだよ。」

「（）主人様でないと？」

「精靈との相性と人格らしい、次の理由は知つてしまつたからだな」

「何を知つたのですか」

「俺が行かなければこの世界が滅ぶことを知つてしまつた。俺は他人の命を粗雑に扱える人間ではなかつたんだよ。三つ目が・・・・・」

「三つ目は？」

「たぶん三つ目が、本音だらうな。俺は前の世界で物事に本気になれなかつたんだよ。物事にあまり興味を持てなかつし、興味を持つたものでは優秀な成績を収め、すぐにやる気もなくなつた。」

「・・・・」

イリヤは、黙つて聞いていた。

「生き甲斐がなかつたんだよ。前の世界では、大事な人たちはいたけど毎日が退屈だつた。だから退屈が嫌で異世界行きを決めたんだ。だから前の世界に未練はない。ちゃんと別れを伝えられたからな。ほらな、自分のためだろ」

「そのおかげで私たちは生きていられます。」

「そうだな俺は、この世界でお前達に出会つた。俺は生き甲斐との世界大事な者を手に入れた。そして目標を持てた俺は今とても充実している。ありがとうイリヤ」

「ならどうして奴隸を解放するなどと」

「奴隸制度が気に入らないんだ。それに神は俺に好きにしろと言つ

てくれたからな。俺は、今の世界を壊し新しい世界を造ることしたんだ。」

「「ご主人様はどうのような世界を求めているのですか」

「それはだな、人と人が仲良くなつて奴隸制度がなくなりあらゆる種族が手を取り合えるそんな世界を造りたいと思つている」

「とても素晴らしいと私は思います。」

（「ご主人様あなたは、やはり素晴らしい人です。この世界に来たきっかけは退屈しのぎだとしても、精霊界での修行も、私たちを救つてくれたことも、奴隸を解放しようとすることも、この世界を導きまとめようとすることも、あなただからこそなのですよ」）

（「ご主人様）

イリヤはこの人と共に歩むことを改めて心に誓つたのだった。

その夜

「ジン」「「ご主人様」」

リリス、ミリア、イリヤの三人が部屋に現れた。まあここまでの一
日の夜でわかつていただ。

ほかの一日と違うのはその夜がとても濃厚なものになつたことだろ
う。

三人を同時に愛し合つことになつたが、先に力尽きたのは三人の方
だつた。三人ともジンの性技によつてイキまくり失神してしまつた
のだ。

三日目の夜は、疲れ果てていた三人をベットに押し込み裸の三人を抱えて一緒に寝ることにした。

31話 方針と新たな仲間

異世界41日目

朝起きると。

「ご主人様お客様が来ています。」

「誰?」

「アッシュ皇太子様です。」

「アッシュ?」

グーロム王国で、わかれでから一週間もたっていない。とても元王国領が安定したとは思えないのだが、何かあったのか?
不安に思いながらアッシュの待つ部屋に向かう。

予想通り問題が発生していた。俺達は、王城で奴隸の解放を宣言したが、数日たつて奴隸を隠し持つてやつらが目立ってきたのだ。
しかし、安易に軍を動かせば、証拠隠滅のために奴隸が殺されてしまう。

そこで個人で、貴族や商人を潰せる俺に白羽の矢がたつたのだ。

「わかった。俺の方で対処しよう。」

「ありがとうジン。できる限り手助けはするよ」

アッシュは、俺の返事を聞くとすぐに元王国領に戻つていった。
朝食後アッシュの話を踏まえて、これからのことの決めるためにみんなに集まつてもうつ。

そこで元王国領の状況を話す。

「そのようなことになつてゐるのですか」

反応はそれぞれだったが、以外とフェリスの反応が一番大きかった。
顔は青ざめて俯いている。

「大丈夫か？」

フェリスの肩を抱きながら話しかける。

「その、私、お城の奴隸の扱いを知つてて、とてもひどいことを」

顔は上げてくれたが、その目には涙があつた。フェリスには城の生活そのものがトラウマなのだろう。

「大丈夫だフェリス俺達はその奴隸を助けに行くんだからな、それにはこの俺が行くんだ絶対大丈夫」

「はい、・・・はい」

フェリスは、一番身近に奴隸がいたんだな。イリヤとリリスは一度奴隸になつたが、奴隸を体験する前に俺が助けているから体験はし

ていない。

フェリスの、記憶から王城の生活を忘れるのは、まだ時間がかかるな。

フェリスが落ち着くのを待つて話を続ける。

「俺の簡単な方針をこれから話す、

一つ目

元王国領の奴隸解放

二つ目

元王国領の残党の殲滅

三つ目

俺達自身の強化

四つ目

お金を稼ぐ

この四つがおおまかな方針だ。質問はあるか?」

「フェリスちゃんやミリアさんも連れていくのですか?あとレティーシア様はどうするのですか?」

「ああ、一人共同行する。このあと冒険者登録をしにギルドに行く。レティーシアのことは、皇帝に聞かないとな」

「それなら大丈夫だ。アッシュが、同行していいと言つていた。」

アッシュのやつ俺より先にレティーシアに話していたといつ」とは、俺が断らないこと前提だつたなあの野郎。三人の同行に反対などはなかつた。

フェリスとミリアに護符を渡す。ちなみに、ティリエルとレティー

シアは護符を元々持つていた。

レティーシアは、姫騎士と呼ばれているから不思議ではなかつたし、ティリエルはアルベルトが持たせたようだ。テツは、氣力と魔力を持たないから使えない。

「よし皆でギルドに行こう」

「み、皆でですか？」

確かに俺達は、9人と多人数だしな。

「今日だけだよ。ギルドカードの更新もしたいし依頼も受けるから。

一応は納得してくれたので、俺達はギルドに行くことにした。

「へえ、ここが皇国の冒険者ギルドか、大きいな。グーロム王国のギルドって本当に小さかったんだな」

俺たちがギルドに入ると騒がしかつたのが一瞬静かになつたが、すぐにはまた騒がしくなつた。しかし、中には元の場所に戻らず俺達に、正確には俺の女達に近づいてきた。こつちでもあるんだな通過儀礼なのか？

顔立ちは整つているが、どうも軽い感じがする金髪のにいちゃんだつた。

「ねえちゃん達俺と遊ばない。依頼が終わつてぱっかりで今結構お金あるんだよね。」

男がミリアに触れようとしたので間に入る

「彼女達は、俺の連れだ。手をだすな」

「オイオイそれを決めるのは彼女達だろ?」

「それでしたら話しかけないでください」

「喋るな」「雑魚」

「私達はジン様のものです」

「死ね」「消えろ」

穏やかなものもあるが、暴言のほうが多い。

「な、なんで、そこまで言われないといけないんだ。」

まあもつともだな。

「悪いな。皆も挑発するな。だが」「つらは俺の女だ。もう一度言う手をだすな」

「・・・ちつ」

舌打ちして男は去つていった。

「『ジン』はグーロムじゃないんだから、もえす」「し穏やかに断るうな

「」「ハーヴ」「」

「ジン!久し振り」

大きな声で呼ばれた。周りにも聞こえたのだろう。さつきの男もギ

ヨツと顔を強張らせた後、胸を撫で下ろしていた。手を出さなくてよかつた、とでも思つてゐるのだろう。

「あいつが『英雄ジン』なのか、じゃあ、あの水色の髪の女が『水災の魔女』なのか？」

「『水災の魔女』ってなんですか！？」

ソフィアが悲鳴をあげている。その引きがねになつた男が側に來た。

「久し振りだなジーク」

「もうギルドは君の噂で持ちきりだよ。やつぱりジンは、すごいな」「そうでもないよ。それよりはソフィア達を送つてくれて助かつた。ありがと」

「いって。そうだカイル～ちょっと來てくれ」

ジークは、相方を呼びよせ

「お久しぶりです、ジンさん」

あれ、カイルの口調が変わつてゐるよつな。

俺の疑問が解決する前に、さらに意外な申し出があつた。ジークが真剣な顔で

「ジン、俺たちをジンのチームにいれてくれないか？」

何故俺のチームなんだ、普通は女ばかりで入りづら」と思つんだが

「ジーク達は俺達の目的を知らないだろ。なのに何故チームに入りたいんだ？」

これに答えたのは、意外にもカイルだった。

「私達は、昔騎士だったのです。ですが私達は、戦争で主君を失いました。そして新しい主君を探していたのです。そして私達はあなた様に出会いました。仕えさせていただけないでしょうか？」

やつぱりカイルの言葉使いが変わっている。それだけ本気なのだろうか。チーム"仕えることになるのか？"だがチームの増強も必要だそれに彼らは信用できる。俺が数少ない知り合いの冒険者だ。

「わかった。チームに迎えよう、ただ俺は男には厳しいぞ」

「「ありがとうございます」」

新たに二人の仲間が増えた。その後二人はジン達の目的を聞いて。「やはりあなたを選んでよかったです」と感慨深げに呴いていたとか。

手早く冒険者登録を済ませ
新しい仲間とギルドカードを見たことがない人達のカードを見る
とになつた。
まず新しい登録組の

名前	フェリス	女	12歳	人間
ギルドランク	G			
能力ランク	総合E	気力F	魔力C	

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ミリア 女 20歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

フェリスとミリアは、完璧に魔術師タイプだな。これでは、後衛に偏ってしまうな。

新しい男どもは

名前 ジーク 男 21歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合 C 気力A 魔力D

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

ありがたいことに、三人とも前衛タイプだった（ジークも前衛だった）。これなら、チームのバランスがよくなるな。それにしてもジンの女ってずいぶん直接的なな神の野郎。残りのメンバーもカードを出す。

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

「ジン様『私『水災の魔女』じゃないですよ』

ソフィアの称号が増えていた。水災の魔女については、かなり不満そうだ。ソフィアは、あの時危ない人を助けていただけだからな。

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの護衛 熟練者

名前 テイリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

三人のカードには、変化はなかつたが、ティリエルのカードを見たときには新しい男二人は、かなり驚いたようでティリエルを長い間凝視していたので

「ティリエルを見すぎだアホども」

目潰しをしてやつた。

二人は、悲鳴をあげながら地面を転がつた。

「ここまでするか普通?」

「言つたる、男には優しくないって」

「厳しいって言つてたよ!」

「細かいことは気にするな。最後は俺だな。」

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B

気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隸の解放者 精霊術師

『英雄』が増えている。後前からあつた称号が変化している。まあ主ではないしな。

さつきまで騒いでいた二人は絶句している。そんな二人は放つておいて次は依頼だな

依頼を見に行くとまた、顔見知りがいた。クレアさんだ。

「クレアさん久し振りってほどでもないか」

「そうですね」

「家は決まりましたか?」

「それがなかなか決まらなくて、今はギルドの空き部屋を使わせてもらっているんです。」

この時、しばらく留守にする屋敷と暇になるであろう使用人達を思いだした。それならと

「クレアさんいい物件がありますよ

俺は、屋敷を使うように勧めた。最初は、遠慮していたが、屋敷の主要人物が全員出るので信頼のおける人に任せたいことと使用人が暇になることを話してやつとクレアさんは頷いた

「それなら、『厄介を申すつもり』しますね。ありがとうございます。ジンせん」

後ろの女達からは冷たい視線が送られてくるが気にしない。

細かいことを話したあとクレアさんと別れる。

今度こそ依頼を受けに行くぞ。

32話 新しい依頼と第一皇女

「それじゃあ依頼を受けるわけだが」

「だが？」

「何人かに？マークが浮かんでいる。

「この人数で一つの依頼を受けても時間がもつたいたいからいくつかのチームに分ける」

テツと男二人以外の仲間の顔に影がさしたので慌てて付け足す

「分けるといつてもそのチームが中心になつて受けた依頼をやるつてだけで、基本皆一緒に行動するからあんまり気にするなよ」

テツ以外皆安堵していた。まあテツは、小太刀だから俺と一緒に行くなつて決まつているからな。

結局皆と相談した（各自の思惑も混じつて）結果こうなつた。

- Aチーム 僕とテツ
 - Bチーム ジークとカイル
 - Cチーム レティーシアとミリア
 - Dチーム リリスとソフィア
 - Eチーム イリヤとフェリスとティリエル
- というチーム分けになつた

受けた依頼は、

Aチーム ランクA 岩窟竜一頭の討伐 5万ギル 無期限 モル

ド伯爵領

Bチーム ランクC 牛鬼五体の討伐

1万、ギル 一月以内 元

王国領南部

Cチーム ランクD ゴブリンの群れの討伐

4000、ギル 一週間以内 元

Dチーム ランクD 生熱の種の採取

30個 5000、ギル 半年以内 元

年以内 元王国領北部に生息

Eチーム ランクF 魔物五十四討伐

2000、ギル 一月以内

ニビルの森

このほかにチームとして特別クエストとして元王国領内の魔物の討伐依頼を受けた。

この依頼は、元王国領を立て直すためにクインント皇国が出した依頼で制限がない代わりに報酬は少ない、一応受けておくという依頼だ。これのおかげで冒険者が魔物討伐に積極的になるらしい。

この依頼は、ギルドカードのチームの下に

A・000 B・000 C・000 D・000 E・000

F・000

と表示されていてチーム内で混同されているらしい。

「それじゃあ、今度は武具屋だな」

フェリスとミリアの魔法を使うための媒体を買いに行つた。二人ともソフィアやイリヤのしている指輪をジンがプレゼントした物だと知つていて

「「わたしも指輪がいいです」」

「こうことになり二人に別々に媒体としての指輪をプレゼントした。

フェリスの指輪は、黒い魔石の付いた指輪で魔力増幅に重点を置いた指輪だ。フェリスの指輪はシンプルなデザインだ。黒い魔石は黒真珠に似ている。

ミリアの指輪は、緑と黄色の魔石を付けたもので風と雷の魔法が使いやすくなる指輪だ。ミリアの指輪は、魔石が一つな分少し凝っているが派手さはない上品な指輪だ。

あとティリエルの武器だが、ティリエルは、ダガーを2本選んでいた。二重強度強化がかけられた物だ。

指輪が4500と5500で1万ギル、ダガーは一本2000ギルだった。

23600 - 14000 = 9600ギル

武器の次は魔具を取り扱う店に行くことにした。

以前の討伐依頼の時にリリスを失いそうになつたことがあった。森のランクに相応しくないランクAのノワールサイが現れたからだ。それらの不測の事態に対処するためにいくつか考えていたのだ。そのひとつが魔具に頼ることだった。リリスに話は聞いたがそれだけではわからない、俺が欲しい物があればいいのだが。

入つたのは、レティーシアがお忍びでよく使つている魔具屋だ。

魔具屋といつても魔具といつてもいろいろで、魔術を込めた装飾品、使い捨ての魔符（魔術を込めた符）などあらゆる物を扱つている。魔具以外にも魔物の一部や魔石などの素材などもある。

俺が探しているのかは装飾品だ、武具屋にもあつたが、武具屋のも

のは、ほとんどが戦闘用だった。

この世界の字が俺は読めないので、店主に話して探しても「う」とした。

田当ての物は、見つかった。

『絆の腕輪』といって登録した相手の居場所がわかり、自分の危機を伝えることができる。

チームがバラバラに動くときにつけたり、お金に余裕のある家庭が子供につけたりもする。

腕輪に少し細工をしてチームの証にすることもある。

これを、人数分買う。細工はいつかしたいと思つ。

11×500=5500ギル

9600-5500=4100ギル

店を出たあと、旅の準備をジーク達に任せ先に宿に戻る。準備のお金は、ジーク達が払うことになった。もうチームの一員だし腕輪のお礼も兼ねてらしい。お金もずいぶん少なくなったのでありがたい。

皆を先に帰らせて俺は、城に向かう。馬車を借りるためだ。今の馬車では、六人ぐらいしか乗れないからだ、金もないから依頼主に借りることにしたのだ。

顔パスでお城に入る。

しかし、皇帝は今忙しいから後回しにした。

庭で暇をもて余していると、城の方から女が一人歩いてきた。驚いたことに、第一皇女とレティーシアの影武者だった人だ。

「どうしたんだ、アリシャちゃん」

「むつ、私の方が年上」

いいじゃないか、こんなに可愛いんだから、えつとそつちば？」

「アーティストも曲もねえ

「名前交換してたんだ」

「はい、レティーシア様の希望でなんど自分の名前に反応しそうになつたか」

「ハハ、レティーシアらしい、話は戻るけど、こんなところにどうしたんだ？」

「あなたがいるから会いに来た。」

「俺？」

「興味がある。あなたのことを教えて」

「条件がある」

「なに？」

最初は馬車を頼もうかと思ったが、自分の話を馬車と同じにするのは気が引けた、だから

「君のこと教えて」

「え？」

「俺のこと教えてから君の事を教えて」

「わ、わかった」

その後、一人で会話を交わした。俺の世界の「」とアリシアの思い出などあらゆることを聞き話した。

「じゃあアリシアは、ハーフエルフのハーフなのか」

「そう私は、エルフのクオーターの容姿は、そのせいだと想つ」

自分の平らな胸と身長を指しながらアリシアは言った、そのアリシヤは今では、俺の膝の上で会話をしている。レイシアさんは、少し後ろで微笑んでいる。そんな楽しい時間に水を指すやつが来た。

「アリシア姫そんなところで何をしていらっしゃる」

高圧的な喋りかたで騎士風の男が近づいてきた。明らかにこちらを見下す表情で

「そのよつなゞいの馬の骨ともわからぬ男と話しては、姫様が汚れますわ」

「お前と話す方が穢れる」

「アリシャー」いつは誰だ?」

アリシャは苦々しそうな表情で

「第六師団長で私の元許嫁」

師団長といふことは、ゲオルグよりは下だな。師団長は、所詮將軍の指揮下にある。

「おい平民、元ではない。父達が勝手に解消しただけだ。」

「こつはアホなのか、許嫁は親が決めるものなんだから親が解消してもおかしくないだろ?」

「アリシャなんで解消になつたんだ?」

「こつは素行不良、いくつか罪も犯してゐる」

よくそんなやつに師団長を任せているな。ゲオルグに相談しようかな。

「そんな『ミミ』みたいなやつに、可愛いアリシャを任せることにはいかないな」

一人の反応は、似ているが正反対だった。

アリシャは、無表情ながら頬を染めて恥ずかしがり。ゴミは、顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「貴様俺を侮辱してただで帰れると思つなよ。」

「なんだ、土産でもくれるのか?」

「殺されたいらしげな」

「やれるならやってみる」

「言つたな、貴様に決闘を申し込む」

「ジン止めた方がいい、」これはランクA。あなたの精靈術はすごいけど決闘には不向き

「ゴミは、何気にアリシャが物扱いしたこと気に付かずに

「姫様は、よくわかつている。謝るなら今のつちだぞ平民」

「アリシャ大丈夫だよ。俺は剣術もやるからな、こんな三下すぐこ倒せる」

「ならば、受けのだな」

「ああ受けでやる、ありがたく思え、師団長」

「ただ決闘するのもつまらないな、やつだな賭けをしよう!」

「賭けだと?」

「そう賭けだ。俺の方からは、そうだな・・・俺が勝つたら今後一切アリシャに近づかないで貰おうか」

「ふん、いいだらう。その代わり俺が勝つたら、お前を奴隸にして売り払ってやる」

奴隸だと、皇国で禁止されていることを当たり前のよう、適当な時に潰しておおか、その方がこの国のためになりそうだ。

「これよりジン殿とラウル殿の決闘を始める。攻撃防御は、持った武器のみ魔術や精霊術などの使用は禁止とする。急所への攻撃も禁止、急所に当たた場合当たたほうの負けとします。それでは・・・

・始め

合図をしてくれたのは、訓練場で訓練をしていた他の師団長だ。審判をお願いした。

こいつラウルって名前なんだ。そりいえばこいつの名前聞いてなかつたな、まあ興味もないしじつせすぐ忘れるいいか。

俺が使う武器は短い木刀、ラウルが使うのは長めの木剣だ。

驚きの速さでラウルが間合いを詰め、左から木剣を横に振るう。ジンはこれを木刀で受け止める。ラウルは、すぐに木剣を引きなんど

も突きを放つてくるがこれらをジンはすべて弾いてみせる。次にラウルは上段から木剣を振り下ろすが、これは後ろに飛び避ける。

「どうした、攻撃してこないのか、それとも手も足も出ないか」

「以外だつたよ、もう少し雑魚っぽいと思つてた。」

実際すべて防いでいるが、ラウルの攻撃は一連の流れになつており切り込む隙がない。今までこの世界でまともに打ち合つたことがあるのはラシードとレティーシアだが、少なくともレティーシアよりも強いだらう。

だから、まずラウルを一度蹴り飛ばして距離をとる。

「ぐつ、だがこれくらいで」

「ちよつと確認したいんだけど、いい？」

「なんだ命乞いか？」

「いや、ただあんたに本氣でやつていいか聞いひつと思つてな」

「貴様ふざけるなよ、これは決闘だぞ本氣でやれ」

「いいぜ、レイシアさんこそ木刀投げてください」

「ふえつ、・・・」、これですか？」

突然呼ばれて驚いたレイシアさんが近くの壁に立てかけてあつた通常の長さの木刀を持ち上げる

「そうですね。投げてください」

投げてもいい

「ありがとうございます」

「なんだ武器の長さの問題だとでもいうのか」

ラウルが嘲るような表情を浮かべる

「ああ違う違う」

投げ入れてもらった木刀を右手に、下からあつた木刀を左手に持つ

「俺は、二刀流だ。」

「なんだと、は、はつたりだ」

「なんだ評価は、下方修正だな。俺まだ左腕しか使っていないんだぜ」

「なつ」

「俺が刀神から習つた、神双流は左の小太刀で攻撃を防ぎ、右の大太刀で攻めるのが基本、見せてやるよ俺の本気」

本気で相手に踏み込む。左の木刀で迎撃のための木剣を受け流し右の木刀を首に添える様にギリギリ止める。

一つの動作を同時にを行うことでたつた一度の攻撃で決着をつけた。一つの武器を持ったことで動きが遅くなるどころか、重心が安定し

て動きの速さも上がっていた。

「ま、まいった

「もうアリシャに近づくなよ。師団長殿

ラウルがその場に倒れてしりもちを付く。

ジンが、ラウルに背を向けアリシャたちの下に歩きだすと、後ろのラウルがブツブツ呟いて

「・・の・・ほの・・せ・・・焼き肉へ须くせえ——『フレイム・バレット』

無数の小型の火球がジンに向かって放たれる。ラウルが、逆上し魔術で攻撃してきたのだ。審判役の師団長が止めようとするが、間に合わない。それに、このコースはアリシャたちの巻き込まれのコースだ。

しかし、俺の近くにきた炎の玉は、すべて俺の手前でしほむように消滅した。

「な、ぜ」

「精霊術で壁を作つただけだ」

風の精霊術で真空の壁を作つたのだ。炎では、これを「じえん」とは出来ない。

「今の攻撃、アリシャたちにも当たるコースだつたな、少しあ仕置きが必要だな」

ラウルに精靈術の雨を降らせる。

火で髪の毛を炙り
水で息できなくし
風を圧縮してぶつけ
土で下から土の槍で突き
雷で感電させたりした。

服は燃え、鎧は砕け、髪の毛はちぢれ、体中を痛打される。見るも無残な姿になつていくラウルに、審判をした師団長だけではなくアリシャやレイシアまで同情の眼差しを向けていた。

ラウルがボロボロになり気絶したのをみてお仕置きをやめる。同情の眼差しをラウルに向ける師団長に

「師団長ちょっとといいか」

「は、はい、な、なんで」¹やれこましじつ

すうじい慌てよつだな、そんなに怖かったかな？

「さつきの賭けの話、広めておいてくれるか。これがアリシャに今後近づかないようこ

「アリのようになつたラウルを指しながらお願いする。

「はい、わかりました。」

「頼んだよ、アリシャ庭に戻るつか」

「わかつた」

庭に戻つて、もう一度アリシャを膝の上に乗せる。

「ジンって、結構怖い？」

「敵でせらう男なら、どこまでも残酷になれるな。だけど女には基本優しくすることにしておる。」

「よかつた。それにしてもジンは強い」

「ありがとう」

「わたしもあなたに・・・」

「俺に？」

「な、なんでもない、そ、それよりジンは、お城には何をしこ？」

急な話題変換だなまあいいか、何しに来たかだつたな・・・

「ああ――――、すっかり忘れてた。馬車を借りに来たんだった」

「馬車？何故？」

「近いに旅に出るんだよ、アッシュの頼みで

「兄上余計なことを」

少し機嫌が悪くなつたような気がする。

「どうかした？」

「なんでもない」

しばらくアリシャがなにやら考ふ込んでいた。

「馬車だつたら私の頼みを聞いてくれたら用意する」

「頼みによるなあ」

「大した事じやない」の指輪をつけてほしい

アリシャの指についている物と同じ指輪を差し出してきた

「指輪？いいけどなんで？」

「あなたの、腕輪と同じような物、この指輪は特注品、相手と会話
が出来る。」

「つまり、たまに話がつてこと？」

「ククク

アリシャがすごい勢いで頷く

「姫様その指輪は

「レイシア黙る」

「は、はい」

アリシャがレイシアを黙らせている。何かありそなうだが危険はないだろう。

それに会話をしたいと思つてくれることは少し嬉しい、だから受けとることにした。

アリシャの手で指輪をつけてもらつ

「対呪、や氣力、魔力の増強などいくつか効果がついている」

「そんな便利な物をいいのか？」

「いい、ただ」

「ただ？」

「その指輪は、私以外には外せない」

「えつ何故？」

後で試したが、俺の契約破棄の力でも外せなかつた。契約とは違うようだ。

「その内わかる。馬車はレイシアに頼む。馬車が来るまでお茶にする。私の部屋に来て」

アリシャに連續で喋られ言葉を返す暇もなく、部屋に連れられて行くことになつた。

アリシャの部屋には本がいっぱいあつた。本棚で左側の壁が埋まつ

ているし机にも本の塔ができる。いる。

「本好きなのか？」

「好き、人は面倒だから」

「たしかに、皇女となると面倒だらうな」

とてもドロドロした人間関係になりそつだ。

「でもあなたは、どこにも所属していないし対等に話しても問題ないからとても落ち着く」

アッシュも同じことを言つていたな。

部屋に入つたからだろうか、やわらかい表情を見せてくれた。普段無表情な分よけいに可愛い。

その後も一人でお茶をしながら他愛もないことを話してすこした。日が傾いてきたので帰らつとすると

「使いを出す、問題ない、それより一緒にご飯を食べる」

「わ、わかつた」

またアリシャの勢いにのまれてしまい、そのまま食事を共にすることになった。

「大丈夫」

その後も何度も屋敷について話すと大丈夫が返つてきて、途中から屋敷ことを話すと大丈夫が返つてくるようになつていた。

暗くなり、やすがに帰らなこと、と説得する。

「私と一緒に帰る？」

「イヤじゃないけど、こんな急いで」

「だつて、ジン旅に出るか」

「やつこえばやうだな。やつこつことなら今日べつこまアリシャに付やく」と云ふか。

翌日アリシャと朝食を食べ終わった後、城を出立つて

「あの馬車は？」

レイシアさんに尋ねると

「やつひ昨日には屋敷についていますよ」

不思議そうな顔のレイシアさん。

騙された。

まあいかに可憐いウソは許せる。

屋敷に帰ると指輪について聞かれたが、とある人からプレゼントされたとだけ説明した。

皆気になるようだが、俺が答えないで諦めた。ミコアは、なにか

感づいていたようだつたが追求はなかつた

異世界44日目

「魔の火よ、眼前の敵を燃き尽くせ、『ファイア・ボール』」

指輪で増強された魔力でフェリスが、直径1メートルぐらいの火球がハイウルフに命中する。

「できた。できたよ、お兄ちゃん。褒めて褒めて」

「すごいぞ、フェリス」

誉めながらフェリスの頭を撫でてやる。

ジン達は、今別れて行動している。Bチーム、Cチーム、Dチームでゴブリンの群れ討伐に出ている。

そして余った、Aチーム、Eチームは実戦経験のないフェリスの魔術の練習をすることになったのだ。

今は、Fランクの魔物しかでない森にいる。

ミリアは、元レティーシアの付きのメイドだったからか、今のギルドランクの依頼ぐらいなら問題ないそうだ。

ここには、俺と小太刀のテツ、ダガーの練習をしているティリエルと教師役のイリヤと生徒役のフェリスがいる。

俺も将来的には魔術も使うつもりだから、イリヤの説明をフェリス

と一緒にしつかり聞く。

「体内にある魔力の源は、基本無色と言われていますが、これを魔力に変換する時に、色が付く人がいます。」

「色ってなんですか？」

「この場合の色は、視覚的な意味での色ではなくて、魔力の質のことで赤だと火の、緑だと風の魔術に使えます。」

「へえ」

「変換するときに色が付く人は、その色の魔術に関しては、詠唱短縮、威力増加などいくつかの利点がありますが、その代わり他の魔術を扱いづらいです。」

イリヤなんだか楽しそうだな。教えるのがすきなのだろうか？

「ちなみに、私は薄い白で治癒術が得意です。ちなみに赤の色を持つ人を炎術師、緑の色を持つ人を風術師、私の治癒術師等と呼ぶこともあります。ミリアさんは、変わっていて緑と黄色の二つを持っています。」

「それで、ミリアさんの指輪は、一つ魔石が付いていたんですね。」

「そうですよ。フヨーリスさんは無色のようでしたので増幅の指輪にしましたね。」

「じゃあ、私は得意な魔術ないんだ。」

「

フェリスが落ち込んでしまった。イリヤが慌ててフォローする。

「大丈夫ですよ。得意なものはなくとも不得意なものもありませんから。」

「器用貧乏?」

「はうー!?」

見事なカウンターが入った。

「フェリスあまりイリヤで遊ぶな」

「えへへ~」めんなさい、イリヤさん天然で面白いんだもん

「それは認めよ!」

「『主人様』」

イリヤが、可愛いらしい非難の目を向けてくる
うん、可愛いだけだな

こんな感じで緩くフェリスの練習または修行を続けた。

『プリンの群れは問題なく討伐できたらしいです。

次の依頼

モルド伯爵領の、依頼主であるモルド伯爵に岩窟竜討伐の補足事項について聞きにきたのだが

「貴様らは、岩窟竜をさしきと倒せばいいのだ」

「こればかりだ。

「ですから、討伐で5万その場から移動させるだけでも3万と依頼にあるのでその確認をですね」

補足事項とは、街道から移動させれば必ずしも討伐する必要はない、といつものだった。

「知らん知らん、さうとあの邪魔者を討伐してこい」

「では、この依頼は、破棄されるのですね?」

「そんなことないおらん、ええい、貴様らは黙つて聞いておけ」

「話にならませんね。私たちはあなたの部下ではあります。そういうことでしたら、ギルドのまつに再申請していくださー。」

「うひが、席を立つと

「ま、待て、わかった。その依頼の通りでいい」

「わかりました。」

胸くそ悪い屋敷を後にする。

今は、Bチームが牛鬼討伐に出でているので、周りは女ばかりだ。

「『』主人様、何故あのよつたな者に会いに行かれたのですか？」

「岩窟竜を説得ができるなら戦う必要がないだろ」

「り、竜を説得ですか」

「ティリエルがいるから可能性はある。それにアッシュの情報で、あいつは奴隸を持っている可能性があるんだ。」

「でしたら、その、何故捕まえないのですか？」

「目撃情報はあるんだが、奴隸そのものが見つからないんだ。今も精霊術を使って探していくんだが見つからなかつた。」

「ガセつてこと？」

「まだわからん、もう一度屋敷に入るためには、依頼を終わらせないとな」

ティリエルだけを連れて、岩窟竜に会いに行くことに。

岩窟竜は、モルド伯爵領が使う大きな街道を塞いでいた。確かに邪魔だな。

討伐されないのは、基本無害だからか？

岩窟竜から攻撃はしてこないそうだし。村の人間は、山賊がいなく

なつたと喜んでおりいた。

岩窟竜は、巨大な岩のよつた竜だつた。その体は、ノワールサイヨリさらには硬く柔軟らしい。竜ならブレスも扱うだらうから本来ならヒランクの依頼だ。それがヒランクなのは岩窟竜が本当におとなしいのだろう。

岩窟竜の頭部と思われる場所に移動する。（わかりづらー）

「ティリエル話せんづ？」

「はい、といいますか、たぶん」

ティリエルが、何故か反応に困つてゐる。

「ワシと話がしたいのか？」

「つか、びつくりした。喋れたのか」

それでティリエルが困つてゐたのか。

「ワシは、これでも長く生きておる。人の言葉くらいは扱える。それにしても珍しい組み合せじゃな、銀龍の嬢ちゃんと、うーん・・・人間か？」

「一応人間だ。話ができるなら、手つ取り早い。单刀直入に聞く、じーさんはなんでここにいるんだ？」

「お、お兄様。古龍と言つてもいい方に、じーさんはちょっと」

「じいさんかそれも悪くないが、ワシの名前はストルと言つ。」

「やうか、ならストルさんと呼ばう。俺はジン、救世主をやつてい
る」

「わ、私は、ティリエルと申します。」

「救世主？まあよからう、よろしくの。さてワシがここにいる理由
じやつたな。」

あつさり流されてしまった。まったく動じない。

「ワシは、とある村で縁あつて小人族を守つておつたのだが、一ヶ月ほど前に村の小人族が三人ほど人間に連れ去られての。特殊な方法で追いかけ、あの屋敷にいることがわかつたのだが、攻撃して事を大きくしては、小人が殺されかねん。それで、ここに陣取つてジンくんみたんなのか、屋敷の誰かが交渉に来るのを待つておつたのだ」

「小人族・・・そういうことかあのゲス野郎！、連れ去られた小人族が心配だ。ストルさんこちらの要件を話させてもらつ」

小人と聞いて、何故見つからなかつたのか、わかつた。

要件を話し終え、ストルさんは、しばらく黙考して

「ジンくんの申し出を受けよう。これは、友好の証だ受け取つてくれ。」

ストルさんがくれたのは、きれいな丸い石だった。蒼くて透明で宝石のようだった。それを三つくれた。それがなにか知っているのだろうティリエルが

「よろしいのですか？ これほどいの物を三つも

「それだけの価値が君たちにはあるとワシは判断した。」

「ティリエルこれは、なんなんだ？」

「『竜宝珠』、地に属する竜にだけつくることのできる宝珠でつくるのに長い時間を必要とします。地の竜にとって家宝のよつなもので、人にとっても市值で最低でも50万ギルはします。それにこの竜宝珠はとても純度が高いです。」

ティリエルが、興奮している。

「ストルさん一つテツに『えていいか？』

「その不思議な小太刀のことか構わんよ

気付いていたか、小太刀の姿なのによくわかるな。アルベルトとどつちが強いんだろう？

それでも、ありがたい

テツを抜き宝珠と重ねる、今までの吸収で一番強い光を放った。

「主、これすごい。力が溢れます。」

テツは、突然人型になつた。顔を見ると頬を上氣させている。瞳が蒼っぽく変化している。落ち着くのを待つて

「テツ、小太刀になつてみてくれるか」

テツに小太刀になつてもらい持つてみると、その存在感がまるで違つた。見た目は小太刀なのに大剣以上の存在感だ。斬らなくてもその鋭さが格段にあがつているのがわかつた。刀身にあつた白い龍の紋様が変化して、青い龍と白い龍が絡み合つた紋様になつていてる。

「【主私を両手で持つてみてください。】」

「いづか」

テツが光だした、光が収まつたとき一振りの小太刀が握られていた。左の小太刀に白の龍が、右の小太刀に青の龍の紋様が浮かんでいる。

「【隠し機能その二です。】」

「はは、すいいな」

「【長さもその内変えられるかもしないです。ただ力は半々になつてしまつます。】」

「それでもすいよ。せつぱりお前は最高だテツ。」

「【ありがとうございます。・・・そして私はもう餓えた『鉄餓刀』ではありません。主のおかげで『黒龍刀・鉄』へと成長しました。これで私は、主のための主だけの刀になれました。】」

「俺だけの」

嬉しさを歯み締める。

一通り感動したあと。

「ストルさん一度ここを離れてくれないか、そうしたら屋敷にすんなり入れるんだ。」

「わかった。ジンくんティリエルちゃんそれにテツちゃん後は頼んだよ」

「任せてくれ」

- はい! 「

35話 小人救出

異世界45日目

「依頼通り岩窟竜を街道から退かした。討伐ではないので3万ギルもらおうか。」

今回は、俺とテツの一人だけで屋敷に向いた。武器の携帯は認められないが、テツは当たり前のようによつて同伴している。少々危ないかもしれないから他の仲間は置いてきた。

「知らんな、証拠を見せてみろ。岩窟竜のお主達が退けた証拠を」

「実際に、岩窟竜は移動している。」

「そんなもの証拠にはならんだろう。ククク、素直に討伐しておれば証拠になつたであろうにな、ハハハハハ」

ムカつくるのでさつと本題に入る。

「正直報酬の件は、別にどうでもいい。」

「なんだもう諦めたのか、ククク」

笑いが止まらないようだな。その耳ざわりな笑いを止めてやれりつ。

「一階東側の倉庫のような部屋の小さな三つの金庫の中身」

ピクッ

「・・・何故、それを」

「企業秘密だ」

モルド伯爵の護衛一人が武器を構え、伯爵は側の呼び鈴で外の私兵を呼び寄せる。

扉から多数の私兵が入ってきて、ジンとテツを囮む。十六人か、その兵に向かつて聞いてみる。

「お前達に聞く、この屋敷の奴隸については、知っているのか？」

「だったらどうするんだ、お前はここで死ぬんだから関係ねえだろ

「そつちのチビは、俺たちで犯してや・・・る」

ドサ

テツに向かつて気持ち悪い視線を向けていた男の首より上がセリフの途中で後ろに落ちた。無音の『風刃』で頭を切り落したのだ。

「大体わかった。お前は死んでおけ、テツ」

「はい」

テツが小太刀の姿になると同時に

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇を四匹だし私兵にけしかける。

「人が刀に」

「なんだ、精霊術なのか」

動搖している兵を次々に喰らう。七人ほど喰つたところで

「『ウォーター・ウォール』」

水の壁で炎蛇を相殺される。さすがに山賊のようにはいかないか、と考えながら炎蛇に気を取られていた後ろの一人の胸を斬る。二人とも鉄でできた鎧を着ていたが、今のテツに鉄の鎧など何の障害にもならない。バターを切るよりも楽だ。

これで十人、あと六人。一先ずそのまま後ろに下がり距離を取る。

「野郎よくもやつてくれたな。」

三人が同時に攻撃してきた。狭い空間で三人が同時に攻撃してこちらの動きが制限されるが、それは相手もおなじで動きが読み易い。

「テツ、二刀に」

テツを二刀に分け、回避が出来ないからすべての攻撃を弾く。

「増えただと」

「なんだこいつあたらねえ」

「全部弾きやがった」

防いだ時間で精靈を操り地面を揺らす。

「なつ」

「くつ」

体制が崩れたところで二人を切り殺す。一人になつた敵を蹴り倒し喉を踏み潰す。

残り三人の内、すれ違いざまに一人切る。最後の一人も少し打ち合ひの後、つばぜり合いの最中に炎蛇で焼いた。

残つたモルド伯爵に

「一緒に来てもうう」

顔面蒼白の伯爵の首を掴んで、監禁されているだらつ場所に伯爵を引きずつて向かう。

途中出てきた兵は、『風刃』ですべて音もなく殺した。金庫を見つけるが鍵がかかっている。

「外せ」

「い、ここにはない」

ベキッ

「ギヤ——」

左腕を折る。

「嘘をつくなわざわざ別の場所に置く理由がない。さつさと鍵を外

二

「わかつた、信つとおりにある。」

入り口付近にあつた机から鍵を取り出して鍵を外す。

「これでいいのか？」

「ああ、ご苦労」

刀を振るい両足の腱を切る。

ギツア・・・・・な、なぜ？」

殺しはせん
たた逃げられても困るのでな
「流電」

そう言つて意識を刈り取る。

金庫の中は狭く真っ暗で、身動きも取れない。小人族は、そこに押しこまれていた。それはもう監禁ではなく拷問の域だ。

三人の内一人は、すでに事切れていた。小人族は、初めて見るから、年齢がわかりづらいが、見た目は普通の幼い子供だとしても痛ましい。他の子も小さいからか性的な虐待はないが所々怪我をしている。金庫に押し込められていて衰弱もしている。いそいで運ばなければ命にかかる。

まず、首輪を外し窓から光の精靈術で信号弾を打ち上げる。すると、すぐにティリエルが、空から降りてきた。

「急いで運び」

近くの村の宿に運びベットに寝かせイリヤに治癒術をかけてもらつ。小人族を皆に預けて岩窟竜を呼びに行く。

「ストルさん一人は、助けることはできた。だけど一人はすでに…すまない」

「…そうか、いや君のせいではない。ワシもまたなにもできなかつた。」

「他の一人もかなりやばい小人族の村つて南の奥だよな？」

「そうだ」

人間と亜人は中央と南部で住み分けている。

数年前、人間と亜人対魔人の戦争があつたそうだ。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝つた人間と亜人は、最初はうまくいっていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあります。それ違い争いが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになつていった。亜人達は、さらに細かく分かれていつた。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

そして小人族の村は、そのな中でもかなり南の奥にある。おそらく国いくつかをまたぐことになるだろう。

「小人族の一人は、今帰ることに耐えられないだろう、だから一度俺の知つているところで療養させたいんだが」

「それは、ありがたいが、そこまで迷惑をかけるわけには」

「別に迷惑じゃないさ、それにストルさんは、俺に竜宝珠をくれただろ。それにあの提案も受けてくれたし、恩を返したい」

「ありがとう、それでどこで療養をせるのだ?」

「元グーロム王国のお城だ、ここから一番近くで安全だ。ストルさんはどうする?」

「生き残った一人の顔を見たら一度村に戻ろう」

「わかった。落ち着いたら、俺の屋敷に移すつもりだから皇都のほうに来てくれ、皇国には話しておぐ」

「それでかまわない、本当にありがとうジンくん」

「それでだな、その、小人族の遺体はどうする、屋敷には置けなかつたから宿の近くにもつてきているが、俺のほうで葬ろうか、それとも連れて帰るか?」

「連れて帰らせてもらえるか、あれは親がいてな親元に帰してやりたい」

「わかった。」

異世界47日目

遺体をストルに渡し、小人族を城に運び、モルド伯爵の捕縛を命じる等、面倒なことがすべてが終わると。俺の気分は沈み込んでしまった。今はベットで不貞寝している。

氣付くと周りに女達が集まっていた。

ティリエルが

「どうしたのですか、お兄様？」

「ひとり助けられなかつた。」

テツが

「それでも主は、二人を助けました。主だから出来たことです。」

「ふたりともボロボロだ。」

イリヤが

「ならば私が治します。」

「後遺症が残るかも知れない」

ソフィアが

「それでも命は助かりました。」

「心には傷が残る」

ミリアが

「ご主人様が癒せばいいのです。私たちも手伝います。」

「死んだ子には親がいた。」

レティーシアが

「今度こそ、助けないといけないな」

「でも他にも、まだ奴隸はたくさんいる。他国にもたくさんいる」

フェリスが

「お兄ちゃんなら、きっと奴隸をなくせるよ。お兄ちゃんにしかできないと思つんだ。」

「……うだな、俺がやらないとな。そのためにもうと強く

リリスが

「私たちも、強くなる、ジンを支えて、一緒に守るよ」

「ありがとう。これからは元王国領の大掃除だ。手伝ってくれ

皆が

「「「はい」」」

異世界58日目

「帰ってきた——」

リリスが叫んでいる。

ジンたちは、依頼を終わらせ久しぶりに皇都に戻ってきていた。まずは、ギルドに報酬を貰いに行くことにした。

受けた依頼は、

- | | | | | |
|-----------|------------|--------|--------|---------------|
| Aチーム ランクA | 岩窟竜一頭の討伐 | 5万ギル | 無期限 | モルド伯爵領 |
| Bチーム ランクC | 牛鬼五体の討伐 | 1万ギル | 一月以内 | 元王国領南部 |
| Cチーム ランクD | ゴブリンの群れの討伐 | 4000ギル | 一週間以内 | 元王国領の西街道付近 |
| Dチーム ランクD | 生熱の種の採取 | 30個 | 5000ギル | 半年内 元王国領北部に生息 |
| Eチーム ランクF | 魔物五十五討伐 | 2000ギル | 一月以内 | 一ビルの森 |

ちなみに、期間については、期間がすぎるとギルドカードにカウントされなくなるので誤魔化しは出来ない。一応ギルドの支部から結果報告をする決まりだが、これは達成できなかつたときにすぐに依頼を再張り出しするためだ。

岩窟竜の討伐依頼は、依頼人を征伐したので報酬は受け損ねた。

なので

ランクC 牛鬼五体の討伐 1万ギル

ランクD ゴブリンの群れの討伐 40000ギル

ランクD 生熱の種の採取 5000ギル

ランクF 魔物五十五匹討伐 2000ギル

合計21000ギルになった。

特別依頼は

A・004

B・033

C・112

D・232

E・211

という結果だった

特別依頼の報酬は

Aランク=半金貨3枚

Bランク=銀貨1枚

Cランク=半銀貨3枚

Dランク=半銀貨1枚

Eランク=銅貨3枚

Fランク=銅貨1枚

なので

半金貨	12枚	12000ギル
銀貨	33枚	3300ギル
半銀貨	568枚	5680ギル
銅貨	759枚	759ギル

合計 21739ギル

最後に素材の売り払いでの

オオクロコダイル	Aランク
オオクロコダイルの牙	200ギル
オオクロコダイルの肝	600ギル
ブルー・コブラ Bランク	40個
ブルー・コブラの鱗	60ギル
ブルー・コブラの毒液	140ギル
ブルー・コブラの鱗 120枚	7200ギル
ブルー・コブラの毒液 瓶6個分	840ギル

合計18440ギル

総計 4100 + 21000 + 21739 + 18440 = 65279

持ち金 65279ギル

やっぱりAランクの依頼が潰れたのは痛いな。十一人の仕事としては、それほどの額ではない。

次は、ギルドカードの更新だな。まずフェリスだがクレアさんのおかげでギルドランクが一つあがつた。フェリス自身順調に成長している。

名前	フェリス	女	12歳	人間
ギルドランク	F			
能力ランク	総合D	気力E	魔力B	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	ジンの料理人	ジンの義妹		

他の仲間も

名前 ミリア 女 20歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 ジーク 男 21歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力C 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

皆順調に力を付けている。

俺自身は

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精靈王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隸の解放者 精靈術師

Aランクの魔物をはじめ多数の魔物を狩り力をつけた。今的能力ランクは、ラシード将軍とほぼ同じになっている。

「皆順調に力をつけているな、このままがんばろう」

「「「はい」」」

いい返事が返ってきた。実際皆、これから自分をどうやって鍛えるかどのスタイルを目指すか、この旅で大体の未来像が出来たようだつた。

「皆お疲れ、今日は屋敷でゆっくり休もう」

「「「はい」」」

「こっちの方がいい返事な気がする

屋敷に戻ると出迎えがあった。屋敷の使用人と小人の少女二人はわかるのだが、何故か以前ラウルの後始末をお願いした、師団長も来ていた。

まずは、小人の少女の二人が

「助けていただきありがとうございます。わたし、キリといいます。こっちは妹のユリです」

「ありがとうございます。」

可愛らしいお辞儀をしてきた。一人とも15歳らしいが見た目は10歳くらいに見える。一人とも健康そのものだ。

「よかつた、元気よかったです。不自由はない？」

「大丈夫です。クレアさんもメイドさん達もよくしてくれます。」

「それならよかつた。」

「あの、私たちは村に戻れるのでしょうか？」

「いや、失礼でしょ」

不安そうなコリをキリが叱る。

「すぐには、無理だけど必ず村に戻れるようになります。ただ一つだけお願いがあるんだ。」

「なんでしょう？」

「村に戻つたらすべての人間が君達を傷つけたようなやつらじゃないうことを村に伝えて欲しいんだ。お願いできるかな？」

「わかつた伝える。それに、ここの人たちは、優しかつたし。」

「コリもつ少し、言葉使いに気をつけなさい」

「でも、この人怒つてないし」

「それでもよ」

「別にいいよ。キリもそんなにかたくならなくていいよ」

「わざわざにま」

「まあ、無理強いはしないけどね。しばらくはこの屋敷でゆっくりすむところです」

「「はー」」

次は師団長だった。そういうれば名前じらないなどいじょよ。後ろのミコトがじつそつ

「第八師団長のタツド師団長です」

「タツド師団長殿今日ま、じつこつた用件で」

「アッショ皇子から」れをあなたに渡すよ」と

差し出してきた袋には、金貨が数枚入っていた。

「これは?」

「モルド伯爵征伐の報酬と岩窟竜の退去の報酬 金貨十三枚です。お納めください。」

「ほんにいいのか? 退去は3万だから征伐が10万といつていいが、」

「お気になさらず、モルド伯爵の資産没収でかなり稼いだようですか」

「俺が働いただけこの国が潤うところとか」

「ハハハ、そういうことになりますね。それでは私はこれにて失礼します。ああ、私のことは、タツドで構いませんよ。皇国にとつて、あなたは英雄なですから」

「わかったよ。タツド」

師団長は、城の方に帰つていった。

「よし、数日休憩したら、また旅に出るからな準備しておけよ」

「はい」

これからジン達『世界を結ぶ者達』は数ヶ月間、他国が集まるまで奴隸の解放に力を注ぐことになる。

65279 + 130000 = 195279ギル

持ち金 195279ギル

異世界58日目の段階で

【主人公の成果】

チーム『世界を結ぶ者達』を結成。人数10人+テツ

ハーレム八人

ソフィア・イリヤ・リリス・テツ・ティリエル・ミリア・レティ
シア・フェリス

グーロム王国を潰して、クイント皇国に大きくなる。
報酬として屋敷を皇帝から貰う。

お金 195279ギル

【人物設定】

主人公 ジン

前の世界ではやりたいことがなかつた。そのため、異世界に来るこ
とにあまり迷いはなかつた。そして異世界に来ることで生き甲斐を
見つける。力は精霊界で精霊王に修行してもらつた。（あと刀神に
も）

能力

全精霊王との契約・すべての精霊を操れる

火・風・水・土・雷・光・闇がある

聖痕の発動 ・属性ごとにある 光と闇はできない

火＝炎王 風＝嵐帝 水＝水龍 土＝岩皇 雷＝雷神

神双流 刀神直伝の一刀流の剣術

契約破棄 大抵の契約は強引に破棄できる

ハーレムヒロイン

ソフィア 精靈の巫女

精靈に使えていため聖痕を持つ主人公を信用した。村を救われたことと救われた時の精靈術を見て主人公に惚れる。精靈使いでもあり水の精靈魔法が得意。落ち着いた少女で髪の毛は水色。

装備 水の指輪

イリヤ エルフの治癒術師

高級奴隸として売られそうなところをリリスと一緒にジンに助けられる。

ジンのご主人様と慕う。マッサージが得意。エルフならではの美貌を持つ 金髪で天然。

装備 ヒーリング・リング

リリス 生糀の冒険者 スピード型

戦闘奴隸として売られそうなところをイリヤと一緒にジンに助けられる。

魔物との戦闘で危ないとこをジンに助けられてジンに惚れる。

活発な少女 炎髪

装備 エストック（両手突き剣）

ティリエル 銀龍

牛鬼に襲われているところをジンに助けられる。ジンをお兄様と慕

つて いる。

銀龍としては、幼く将来が楽しみ 年齢より幼く見える。銀髪

装備 ダガーを2本

フェリス 亡国の姫

一度すべてを失つたが、ジンの元で新しい人生を歩む。

ジンとおにいちゃんと言つて慕つて いる。髪は緑色。

装備 ブースト・リング

ミリア できるメイドさん

元皇族付きのメイドだったが、ジンに恩返しをするためにジンのメイドになる。

呼び方は、ご主人様。

装備 雷風の指輪

レティーシア 第一皇女

ジンの強さを気に入る。姫というより騎士に近く付いた通り名が『姫騎士』

長い金髪で少しキリッとした、美人。ジンをジン殿と呼ぶ。

装備 ロングソード

テツ 小太刀の少女

『鉄餓刀』から『黒龍刀・鉄』になる。持ち主の邪魔になるため気力、魔力を持たない。

最近二刀に分かれることができるように なつた。黒髪でジンの前以外は基本無表情。ジンに貰つた銀の首飾りは宝物。ジンのことを主と呼ぶ。

ハーレム 予備軍

クレア ギルド職員

ジンに興味を持っている。ジンに誘われて屋敷に住むようになる。

短い黒髪と眼鏡で秘書っぽい女性。

アリシャ 第一皇女 エルフのクオーター

小さいことを気にしている。ジンに、通話の出来る指輪を渡すなど積極的。レイーシアと違いしっかり皇女をやっている。

キリとユリ 小人

金庫に閉じ込められているところをジンに助けられる。キリが姉でユリが妹。キリは気が強く。ユリは気が弱い。二人とも奴隸時代の後遺症で軽い暗所恐怖症と閉所恐怖症。

小雪 精霊

ジンの子供?。ジンをパパと呼んで慕っている。

その他のキャラ

クルト

クルト・クイント クイント皇国の皇帝。レイシアの父

アッシュ

クイントの王子 今は元グーロム王国領の管理を任せている。

アイリス

アイリス・クイント クイントの皇妃

ゲオルグ

クイント皇国の将軍

ジーク

騎士でジンに仕えることを選ぶ

カイル

ジークの友人で同じく騎士ジンに仕える

アルベルト

銀竜。ティリエルの父親 戦つて友になる。S S クラスの力を持つ。

ラシード将軍

グーロム王国の将軍だった。ジンの誘いに乗る。今はクイント皇国の将軍をやつている。A ランクの実力者。聖痕なしのジンと引き分けている。

ラウル

クイント皇国の第六師団長。ジンにボコボコにされる。

タッド

クイント皇国の第八師団長。

ガルダ

元ギルドマスター、今はギルド支部長

ミーシャ

皇国のメイド、変な方向に天然

レオン

皇国の騎士

レクト

ミリアの弟 元戦闘奴隸

オルム

村長兼ソフィアの保護者

コートル将軍

グーロム王国の将軍。死亡

【ギルドカード】

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄
る男 奴隸の解放者 精霊術師 8人の女に愛され

名前 ミリア 女 20歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力C 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

名前 フエリス 女 12歳 人間

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ジーク 男 21歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 男 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 クレア 女 20歳 人間

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

数千年前、人間と亜人対魔人の戦争があつた。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝つた人間と亜人は、最初はうまくいつていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあります、すれ違いやいざこざが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになつていった。亜人はさらに細かく分かれていき国や集落ができた。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

通貨は

金貨一枚＝10000ギル

半金貨一枚＝1000ギル

銀貨一枚＝100ギル

半銀貨一枚＝10ギル

銅貨一枚＝1ギル

1ギル＝約10円くらい

【登場した力】

鬪氣

氣力によつて変動する。身体能力の強化、武器の強化。

魔術

魔力によつて変動する。あらゆる現象を引き起こせる。

属性 風

『トルネード』 無数の風の刃で切り裂く

属性 火

『ファイア・ボール』 火球を飛ばす

『フレイム・バレット』 無数の小さな火球を飛ばす

精霊術

気力、魔力は必要ないが、習得が難しく、才能に左右される。

火・水・風・土・雷・光・闇の七種類がある。

火の精霊術 『炎蛇』 火の蛇を作り出して攻撃、『陽炎竜砲』 ドラゴンのブレスをイメージした熱線。もつとも威力が高い、『炎爆』 爆音と衝撃で撹乱する

風の精霊術 『風刃』 锐いカマイタチを作り出す、『風見鳥』 偵察用の鳥型の精霊獣を作る、『削嵐』 無数の風の刃で敵を削る

水の精霊術 『水翼』 大量の水を使うための前準備、『陸津波』 陸で津波を起こして押し流す、『水撃』 圧縮した水をぶつける、『斬水』 高圧縮した水を細く使って相手を切る

土の精霊術 『土壁』 土の壁を作り出す、『岩壁』 岩の壁を作り出す、『土鉄石金壁』 土壁、鉄壁、岩壁、金剛壁を作り出す。『落とし牢』 落とし穴

雷の精霊術 『落雷』 力ミナリを落とす、『流雷』 相手を氣絶させる、『タケミカヅチ』 槍状の力ミナリに回転を混ぜすべてを貫く。

【魔物】

ランクA

ノワールサイ

黒い鉱石を纏つたサイ型の魔物。突進力と防御力はSクラス。

オオクロコ、ダイル

ワニ型の上位の魔物。かなりの巨体で、傷つけることはできても止めをさすのが難しい。噛み付きは必殺。

ランクB

ブルー・コブラ

個体の戦闘能力より、その隠密能力が特徴。見つけることができれば、Dランクの冒険者でも倒せる

牛鬼

群れと連携が脅威。武器を扱える。個体はそれほど強くない。

Dランク

ゴブリン

圧倒的な数と繁殖力が特徴。個体は弱い。

Eランク

グリーングリズリー

熊型の魔物。緑色の毛を持つ。普通の熊より大型で凶暴。あまり熊と変わらない。

バインドスネーク

蛇型の魔物。獲物を縛つて絞め殺す。

Fランク

ラビットドン

ウサギ型

ウサギが大きくなり凶暴化した。

ハイウルフ

狼を少し強化したような魔物。

魔物以外

岩窟竜

Sクラスの力を持つ。ストルは、長く生きていて古龍に近い力を持つている。

銀龍

SSクラスの龍の上位種。

37話 会合の前

異世界200日目

「た、助けてくれ」

さつきまで、奴隸の売買をしていた男が、今日の前で命乞いをしている。

「金もやる、奴隸も解放するだから」

ザシユ

「うう、あつ」

目の前の男は、首から血を流して事切れた。

「「主殿」」

ジークとカイルだ。二人は俺を「主殿」と呼ぶようになっていた。

「残りの奴隸商人は?」

「集まっていた奴隸商人の主要人物は、すべて殺しました。他の物は拘束しています。」

「う」苦労さん。」

「これで元王国領のゴミは、大体片付きましたね。これからどうするのですか？」

「俺たちの、働きで元王国領が早く片付いて。他国の代表が少しづつ集まっているらしい、だからここにいる奴隸を解放したら、一度皇国に戻る。」

「了解しました。」

この二人もずいぶん力をつけたな、ここには護衛を入れたら100人近いゴミがいたのにそのうち半分を片付けてしまった。他の仲間も、ここ数ヶ月で力をつけた。魔物の大侵攻まであと160日しかない気合をいれていかないとな。

異世界205日目

皇都への帰り道、足にフェリスとテツを乗せて馬車に揺られているとレティーシアが

「ジン殿、前方に牛鬼の群れだ。馬車が襲われているどうする？」

「・・・助けよう」

特別クエストは、三週間ほど前に終わつたので牛鬼を倒しても金にはならないが、見捨てるわけにもいかない。

件の襲われている馬車の護衛は手練のようだがたつたの6人だつた。牛鬼の数が多く馬車を守るのに精一杯のようで、効果的な攻撃ができないようだ。あのままで、いずれ牛鬼側に流れが傾くだろう魔物のほうが体力もある。

「先に行くぞ」

体に闘気を纏つて飛び出す。すぐにスピードに定評のあるリリスが後ろに続く。牛鬼の数は、ざつと22体ぐらいだ。この世界にも少しは詳しくなった、だからわかるがこの数は異常だ。その異常性は一先ず置いておいて牛鬼を倒すことに集中する。

まず馬車から離れている牛鬼に向かつて『風刃』を放ち四体始末する。残り18体

「テツ、二刀に」

テツを左右に持つて、群れに突っ込む。そのまま馬車まで突き抜けれる。抜ける間に三体の腹を搔つ捌く。残り15体

「あ、あなたは？」

馬車から女の子が話しかけてきた。

「通りすがりの冒険者だ。馬車の中に戻れ、もつじき俺の仲間が来る。」

そう言いながら田の前の牛鬼の首を刎ねる。護衛の人間も救援に勢いづき二体ほど倒す。残り12体

俺の仲間も到着し数が同等になる。そうなると後は問題なく討伐できた。一対一で後れを取る者はここにはいなかつた。安全を確認しているとさつきの女の子が

「助けてくれてありがとう。わたしは、シャール。あなたは？」

「俺はジン。冒険者だ。」

「そう、あなた達も皇都に行くのでしょ、一緒に行かないかしら。というよりうちの護衛に怪我人が出たから、『一緒に』されてもらいたい、というのが本音だけど」

開けっぴろげな子だな。ただ発言に作為を感じるな、断りづらい状況をつくられている気がする。まあなにか問題があるわけでもないし別にいいか。

「いいよ、同行しよう」

「ありがと」

まあ同行と言つてもつかず離れずに皇都を田指し野首のときに少し世間話をした程度だったが。

異世界207田田

皇都にたどりついて、すぐにシャールとわかれた後、仲間ともわかれ一人で城に向かう。

城に着き皇帝に会つために回廊を進んでいるとアリシャヤが駆け寄ってきた。

「久しぶり、アリシャ」

アリシャヤは挨拶を無視して、なんとタックルしてきた。そのままジ

ンの体に抱き付く。

「ホントに久しづり」

「指輪で話していただじやないか」

「偶にだつた」

「えつと、今から君の父親に会いに行くんだけビ

「わたしも一緒に行く」

「えつとね」

「行く」

「わかつた」

アリシャは、見た目に反して押しが強い。可愛いのでつい許してしまつ。いつもを甘え上手と言つのだらうか。

「クルト、邪魔するぞ」

「久しぶりだね、ジンくん。おや、アリシャも一緒にのかい

「ああそこで一緒になつた。」

「いつの間に仲良くなつたんだい。アリシャは人見知りが激しいの
だが」

「俺は、」この世界で組織と繋がりがないから話しゃすいから」「

「……あれ？君ってたくさん女いるよね？（ジンくん意外と鈍感なのかな？）」

「うん？まあ、この世界ではいるな。でも前の世界では、一人身だつたんだぜ」

「（そのせいかな？）えっとね。アリシャはだねへブ」

クルトが何か言おうとするのを、アリシャが手に持っていた本を投げつけて黙らせる。

「ジン、速く本題を話す」

「まあ、そうだな」

「聞かないほうがよさそうだな。

「今度の他国の代表者との会合の方はどうなっている？」

「集まりは、順調だよ。ただどうやって魔物の侵攻を信じさせるかが問題だよ。みんな頭固いから」

「それついでなんだが、大侵攻が始まる場所を、見てきたんだが、大きな真っ黒い半球ができていた。」

「『無得と魔物の大地』か」

魔物の大侵攻のある場所は、大陸の中心にある半径数十キロに及ぶ

クレーターがある場所だ。

ここでは、作物は育たず、水もない。そして、魔物をいくら倒しても強くなれない不思議な場所。なので魔物以外の人間をはじめとする、すべて生き物はその場所を求める。ゆえに、そこは誰の領土ではなく多数の魔物が生息する場所。そこが『無得と魔物の大地』だ。

「それを、見せられれば。兵を出すと思うんだが。」

「どうやって連れて行くかだね。」

「こざとなれば力ずくで連れて行くぞ」

「ジンくんそれは、ちょっと」

「やうならないよう」に、祈つていってくれ

「まあ、それについては、任せるよ。呼んだのは私だが、会合の進行はジンくんに頼みたいんだが」

「面倒だが仕方ないか、俺なら一応立つてこじに立てるしな」

「そういうこと。あ、これこの前の奴隸商人を潰した報酬ね。結構貯まつたんじやない。」

渡された袋には、金貨が五枚入っていた。

「この報酬合わせて、たしか100万ギルくらいだな。」

「稼いだねえ」

「まあな」

小人族の子供を助けられなかつた後から、俺は精力的に元グーロム王国領のゴミ掃除に励んだ。

そのおかげで、かなりのお金が貯まつたのだ。

その後、細かい打ち合わせをした後、皇帝の部屋をあとにする。

「ジン、がんばってるね」

「そうでもないさ、俺はやりたいようにやつているだけだからな。」

「あら、ジンこんなとこひで会つなんて奇遇ね」

つい最近どこかで聞いた覚えのある声が聞こえた。後ろを向くとシヤールが歩いてきた。

「ジンこいつ誰?」

「なに、この失礼な子供」

一人の機嫌が悪くなつたような。

「黙れガキ」

「ほんとうに口が悪いわね。あなたのほうがガキでしょ。」

なぜか一人は、お互いを睨み合つてゐる。

「二人とも落ち着け、何故そこまで初対面でいがみ合えるんだ？」

「「なんとなく気に入らない」」

「仲いいな」

「「よくない」」

ハモつたやつぱり仲いいな。

「えーと、」じゅちはアリシャ、そんで」じゅちはシャールな

とつあえずお互いの名前を教えてみる。

「シャール？」

「アリシャ？・・・そういうこと、なら」じゅは私が引きましょう

名前を言つただけで、争いは収まつてしまつた。分けがわからん。

「ジンあれには、氣をつけてあれば商人、油断すると金を巻り取られる」

「まあそんな気はしていたがな。」

シャールは、会話がというより交渉が得意そつだつたからな。俺たちにタダで護衛させていたしな。

屋敷に久しぶりに戻つてみると

キリとユリが、メイド姿で迎えてくれた。

「「お帰りなさこませ。」」

「一人とも別に働かなくてよいんだぞ」

「いえ、働かざる者食ひべからずですか」

「そりが、なにか」褒美をあげないとな

「あのそれでしたら、その、お願いが

「なにかな?」

「えつと、その~」

「もひ、ユリ。私が言ひよ、えつとね、ユリが夜一人が怖いから一緒に寝て欲しいんだつて、いつもは私が一緒に寝てるんだけどね」

「うへへ、キリだつて暗くて狭いところ苦手なくせに」

「うひ

そうか一人とも奴隸のこりのこりがトラウマになつてゐるんだな。

「いいよ。それじゃあ今日は一緒に寝よう。それに今一人の部屋は別々だったね。今度一緒にしてもうおつか?」

「いいんですか、お願ひします。」

キリの良い返事が返ってきた。

コリがそれを聞いて微笑んでいる。

「・・・あ」

キリが恥ずかしそうにしてくるのを

「可愛いや、キリ」

「あ」

ますます、赤くなつた。

「キリする」

「す、あるくない」

「ハハ、じゃあ夜にね。」

夜になつて寝室にいくとベットの大きさが三倍くらいになつていて、ベットを三つほどくつけてくるのだらうか。

「な、なんだこれ」

近くのメイドさんと訊いてみると

「お嬢様方の希望でベットと急遽大きくなつました。」

「なんで?、大変だつたろ」

「理由はこれからも女が増えるだらうから一度に一緒に寝られる人数を増やすため、と聞いています。大変でしたけど、そのへ、頑張ればご主人様に添い寝させていただけると言われまして」

頬を染めながらさう言つてくれる。それ自体は嬉しいんだが。

俺はまったく聞いてねえぞ。

「まあ、俺としては、嬉しいけど今日は」

「はい、今日はキリ様とユリ様が添い寝されると伺っています。それにこれからは屋敷にいることも多くなるそうですし、わたしはその時にも。」

「そう言つてくれて嬉しいよ、ありがと」

「いえ、そんな」

「ああ~ご主人様となにしてるの」

「見つかってしました。それでは、ご主人様失礼します。」

そう言つて同僚のもとに走つていく。

その夜、枕を持ったキリとユリが部屋を訪ねてきて、一緒に寝た。一人とも怖いのか俺の腕をずっと掴んだまま離さなかつた。それが

少し心苦しかった。

ジンは一人を抱きしめて眠ることにいた。そのためささやかな胸が夜通し当たつっていた。

異世界208日目

人が治める国の代表達が集まる日がやってきた。

今ジンとクルト皇帝は、会合を行う部屋で各国の代表が来るまで、これからのこと話をしていた。

「大進行は丸一日、24時間、朝晩戦闘が続く。そんな戦い誰も経験はないし、前例もない。ジンくん正直私は不安だよ」

「それでも、やらないといけない。」

「問題は、長い時間と夜の暗闇だね。こんな長時間の戦いも暗闇の中の戦いも人間はしないからね。」

「時間は、部隊いくつにも分けて何度も入れ替えるしかないし、夜は何かで光を確保して防御重視しかないな。」

「そうなるだろ？ね。夜に頑張って攻撃して同士討ちなんてごめんだからね。」

コンコン

「ウルティア国の代表がお越しです。」

「ちょっと早いな」

「ウルティア国ならかまわないよ。通して」

入ってきたのは、美しい美女だった。

「失礼します。久し振りですねクイント王。お願いがあつて早めにきたのですが、そちらの方は？」

「彼は、冒険者のジン。我が国の英雄だ」

彼女の反応は、かなり意外なものだった。女性は、入り口から走りだしジンの隣まで来て。喜色に溢れた表情で

「あなたが英雄ジンなのですか。お会いできて光榮です。私は、ウルティア国代表カルティアと申します。よろしくのお願いしますね。」

「とても一冒険者に対する態度だとは、思えない。」

「よ、よろしくジンだ。（おいくつどうじだ）」

「（私にもわからん）カルティア殿、それでお願いとは？」

「実は、彼に会つてみたかったのです。水の聖痕を、持つ彼に」

「ああそれいりいとね」

なんだ聖痕が珍しいだけか

「それだけではありません。先の戦争で水の精霊術で5万の奴隸を殺さずに無力化した、そのお手並み、その発想、その精神は、我が

国ではすでに伝説です。」

「ソレまで言わるとたゞがに恥ずかしいな。

「何故ソレまで？」

「我が國ウルティアは、湖と川の国、水といつのは我が國では特別なんです。首都も湖の上にあるんですよ」

「湖上の都市か、見てみたいな」

「是非来てください。大歓迎します。」

「ありがとうございます。落ち着いたら行かせてもらいます。それで突然なのですが、カルティア様少し質問してもよろしいですか？」

「質問は構いませんが。様付けはお止めください。國の者に怒られます。」

カルティアが面白そうに笑つて言つ。

「では、カルティアさんのお國は今回の呼びかけをどう思つてですか？」

「我が國は、ジンさんに会えるので、嬉々として私を送り出しましたよ。土産話に期待するそ�です。」

「だめだ、参考にならない。」

「えへと、では他國の反応を、どう予測しますか？」

「そうですね。書状には世界の危機とありましたが、信じていな
と思います。呼び掛けに応じたのは、クイント皇国が大きくなつた
からと旅費の八割を皇国が負担すると書状にあつたからでしょうね。
」

「つまり他国は、大いに不満であると」

「そうかと」

カルディアが少し気まずそうに同意する。

「まあ、それくらいは想定の範囲内だし何とかなるだらう」

「ふふ、楽しみにしていますね。」

しばらく会話を楽しんでいると、会合の時間が近くなり次々と代表
者が集まってきた。

参加者についてクルトから、事前に説明を受けた。

まず最初に現れたのは、

ヴァーテリオン帝国、帝王のラインツ王だった。

「失礼する」

ラインツ王の最初の印象は、王の中の王、まるで霸王のよつた男だ
つた。従者を一人連れてクルトの正面に座つた。
ヴァーテリオン帝国は、クイント皇国がグーロム王国を吸収するま
で皇国と同等の国力だった、今でも人の国では、一番目の国力を持

つて いる 大国 だ。 そし て 数は 少ない が 竜騎兵 ^{ドラグーン}を 有する 国 でも ある。 この 大陸 で 少数 の 部隊 戦 では、 最強 を 誇つ て いる。

次は リニヨン 教国 の カリウス 教皇 と 聖女 ウリア の ツートップ が 入つ て き た。

「失礼」

「失礼 し ま す。」

二人は、円卓の皇国よりの位置に座つた。教皇は白を基本とした神官服を、聖女は同じく白を基本にした巫女服だ以前ソフィアが着ていたものに似ているが質はかなり違うのだろう。布が多くて正直動きずらそうだがこれでも軽装だつたらしい。リニヨン教国は、この世界の宗教を司る国だ。人が治める国に対しても、すべての他国へ少なからず影響力を持つている。聖職者は、魔人を毛嫌いする者が多いうらしい。今後の課題になりそうだ。

次は フアーランド 王国、 国王 の ヘンリー 王 だ。

「お邪魔 し ま す。」

ヘンリー 王 は、 これ と い つ 特徴 は ない の だ が、 彼 は 王 だ、 と 思わ せ る 不思議 な 男 だ つた。 フアーランド 王国 は、 なん と 魔人 を 受け 入 れ て い る 国 だ。 そ の せいで リニヨン 教国 と 仲 が 悪 い ら し い。 入 つ て 來 た とき も カリウス 教皇 と ヘンリー 王 が 睨み 合 つ て い た。 そ し て そ の ま ま 教皇 の 対面 か ら 少しづれ た と こ ろ に 座 つ た。

次はカルモンド王国、国王のグスター王と王大使のエクス王子が入ってきた。

「・・・」

「失礼します」

グスター王は、無言で適當な席につき、エクス王子は入室の言葉を言つて席につく。正直カルモンド王国にはあまり良い印象を持つてない。グーロム王国との戦争の時に明らかにグーロム王国を援護する動きをとつていたからだ。国にいる奴隸の数も多い。それでも無視ができないのは、国内に二つの有数の鉱山を持っていて、そのおかげで経済力も軍の装備もかなりのものなのだ。しかしそれも今の国王になつてから国力は下がつていつているようだ。

次はテンプル騎士国の、騎士王ジャックとその娘、『剣姫』^{けんき}の異名を取るクリス王女が入室した。

入り口でクリスが一礼して入室する。

騎士王と格好は普通の王と変わらなかつたが、クリス王女はドレスと甲冑を合わせたような格好だつた。

テンプル騎士国は、集団での戦闘能力が高い、軍人はすべて騎士道精神を持つ事が求められる国だ。礼節は、しつかりしているが、騎士が貴族階級なためか差別的な考え方を持つつていて、平民層を守られる対象として平民を下に見る傾向がある。それもジャック王のなつて最近は減ってきたようだ。

お次は、ヤマト国の国王キリガネとその娘、『舞姫』の異名を取るトウカ姫の一人だ。

「邪魔するぜ」

キリガネは不遜な態度で、トウカは一礼して入室する。キリガネは服装は着物を崩した着方をしていてトウカは、着物を動きやすく改造した物を着ている。

ヤマト国は、武士の国で個人の戦闘能力が高い者が多い。Sランクの実力者が複数いる。この世界の武士は主君に仕える者と傭兵として世界をまわる者の一種類がいる。

そしてテンプル騎士国の騎士と傭兵は仲が悪い。騎士は傭兵を意図なき者達と毛嫌いし、傭兵は騎士を群れないと戦えないと嘲つている。

ヤマト国が座つた場所はテンプル騎士国の対面だつた。キリガネ王とジャック王は、視線を交わしていたがそこに悪感情は感じなかつた。例えるならライバルに向けるような挑戦的な視線だつた。二人の姫もお互いを見て微笑んでいる。どうやらトップ同士は敵対してはいないうだ。

次はクラフト商国のトランド王とその娘が入つて來た。その娘が

「あれ、ジン? なんでここにいるの? · · · あんたそんなにえらかつたの! ?」

シャールだつた。

「娘よ、皇国でジンといへば、『英雄ジン』のことだとおもつのが」

「つえ、そ、そういうばうね。だからアリシャがあんなになついていたのね」

「よひしへ、シャール」

「え、ええよひしへ」

「よひしへしなくていい。ジンが汚れる」

アリシャとアッシュもやつてきた。

「なんですかー！」

「シャール後にしなれー。」¹¹¹は、各國の代表がきているんですから

「・・・はー」

アリシャとにらみ合つた後、しぶしぶシャール達は、少し離れたところに座つた。

クラフト商国は、商人の国だ。経済力が高くあらゆる国と商売をしている。交通の要所があり人が治める国だけではなく亜人の国に対してもそれなりの影響力を持つている。そして獣人の狸族^{りきく}が多数暮らしている国もある。

「なにが、あつたんだ？」

アッシュがさつきのことを見ってきた。

「面倒だから秘密」

「ひ、ひどい。僕皇子なのに」

セリフとは裏腹になぜか嬉しそうだ。こいつ実はマジなのか。

「あれ？ ジンその指輪確かアリシャのこんや／ブッ」

確信を言つ前にアリシャに黙られた。それにしても『こんや』か・
・・指輪・・・、まさか婚約指輪じゃないだろうな。考えても答え
は出ないので考えるのをあきらめる。

これらの国にクイント皇国をいた9カ国が主だった国だ。
発言は主にこれらの国がすることになるだろう。

その後は、小国が次々と入室し席を埋めていった。

すべての席が埋まった。その数21ヶ国の代表が集まつた。この世
界でこれほどの、国の代表が一同に会するのは、はじめてのことだ。

「すべての代表者が揃つたよつですね」

すべての視線がジンに集まる。その中で、ジンは丁寧に始める

「それでは、この世界を守るために会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

「それでは、この世界を守るために会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

親しい国同士で会話をしていた代表たちも話すこと止めジンを注視する。

一瞬の静寂の後、ラインツ王が問いかけてくる。

「君が進行役をするのかね？」

「はい、そうです。」

カルモンド王国のグスター王が

「どこの馬の骨とも知れないものに任せて良いのですかな。」

「わたしは異世界から来ました。この場でもつとも中立だと自負しています。」

「異世界？君はふざけているのか？」

グスター王は呆れ半分、怒り半分といった感じだ。

「そんなつもりはありません」

「クルト皇なぜ彼を進行役にしたのだ？」

ジンが相手にしないでいると、今度はクイント皇国の責任を追及しきた。

それに対して面白そうにクルトが

「それはもちろん、この集まりは、彼が作ったものだからですよ」

「どうこつ意味だ？」

「つまつこの集まりは、ジンくんの主催なんですよ。」

「なんだと、クイント皇、我々を騙したのかー？」

「そんなつもりはない。わたしは呼びかけただけだし、あなた方の旅費は、彼が稼いだお金で払うのですよ。」

「・・・帰らせてもらひ」

突然グスター王が席を立ち、出入り口へ向かう

「ち、父上お待ちください」

エクス王子が止めるが、グスター王はそのまま扉に向かう。しかし出入り口には、ジークとカイルが陣取っていた。カイルは抜剣するしている。

剣の柄に手を置くジークが、

「主の話はまだ始まつておりません。席にお戻りください。」

「え、貴様らなにをしているのか、わかっているのか」

ジークはそれを無視して繰り返す。

「お戻り下さい」

「い、この」

グスター王が怒りを爆発させよつとしたところに、ファーランド国のヘンリー王が

「もう短気を起しやが、ひとまづ席に戻つて話だけでも聞いたらどうですか？」

「・・・ふん」

グスター王が不満そうに席に戻る。そこでトランド商王が商人の質問をする。

「クルト皇、先程ここに集まる者の旅費の八割をそちらの英雄殿が払つと言つたが、旅費といつてもこれだけの数だ、かなりの額なはずだ。どうやって工面したのかな？」

「それはだね。私はグーロム王国の富裕層の九割の財産を没収したんだが、その成果のほとんどは彼の功績なんですよ。その報酬で旅費程度どつとでもなりますよ。」

「これは実際に受け取つた報酬とは、また別口だ。」

「ほう、素晴らしいですね。しかし、私にはできやつにないですな」

たしかに、資産をあれだけ没収できたのは、グーロム王国が害国だ

つたからだらう。

ラインツ王が、

「そろそろ本題を話してはどうだね。」

「わうですね。わうわせてもうこましょ。」

「よいよか、と皆がジンに今まで以上の意識を向ける。ジンが真面目な顔を作つて告げる。

「皆さん『無得と魔物の大地』はご存知ですね。そこに、真っ黒い半球状の空間ができていることはご存知ですか？」

「いや知らないな」

ラインツ王が答え、他の代表達も口々に知らないと答える。

「きょうから152日後の正午に、その黒い空間から大量の魔物が現れます。世界を滅ぼすほどの規模の魔物の侵攻です。」

少しの間静寂が流れれる。

その中、グスター王が

「何故そんなことがわかる」

「神にこの世界に送られる際に教えられました。」

「今度は神か」

グスター王が、吐き捨てるよひて叫び。

神と言つ言葉に黙つていられない国がある。
宗教を司るリーコン教団だ。カリウス教皇が

「軽々しく神を口にしてもらいたくないですな」

その声には明らかに怒氣が含まれている。

「もう怒らないでください。私が言つた神は、私の世界の神です。
あなた方のこの世界の神とは、なんの関係もありません。」

この言われては、教皇も反応に困りてしまつ。

そこへ、ファー・ランド王国のヘンリー王が

「何故君が送られたのですか?」

「この世界を救つために」

「神の事情までは知りません」

「この世界の神は何もしないのですか?」

「ファー・ランド王、何が言いたい?」

教皇が先程より明確な怒氣を纏つて質問する。

「いえ、やはり神は使えないな、と思つただけですよ。」

今まで黙つていた、聖女ウリアが辛らつな言葉を吐く。

「黙りなさい。王でありながら魔人などと仲良くするなど、万死にあたいします。この売国奴」

ファーランド王もこれに、怒りをにじませ

「魔人を恐れることしかできないあなた方になにがわかる」

「魔人は敵です。魔人の中には食人を好む種族もいます。人の身でありながらどうして仲良くできるのか理解できません。」

「それは、一部の種族に過ぎないし、長い年月をかけて彼らは自分を制御できるようになった。食人は、もう彼らに必要なものではない何故それを認めない」

聖女ウリアとファーランド王が舌戦を始めよつとした瞬間

「
「
」

二人から音が消失していた。

「
「
」

驚いているようだが、やはり声は聞こえない。驚きが少しあさまつた頃にジンが声を抑えて注意する。

「……は、あなた方のための問答の場ではありません。お静かにお願いします。」

「ククク

一人は、なんども頷く。すると一人の空間に音が戻った。ジンは全く動いていない。

呆然とした聖女が

「今のはいつたい」

「音を伝えるのは、空氣です。私はその空氣の動きを止めただけです。」

「その止めるだけが難しいと思つのですが。」

「お氣になさらず。それでは、本題ですが……あなた方には『無得と魔物の大地』に軍を派遣していただきたい。」

「ふ、ふざけるな!、何故わたしが、貴様に従わなければならん」

まあ、軍を動かせといつてはいわかりましたとは、いえないだろうな。

「何も私に従え、と言つてはいるわけではありません。王の責務を果たせ、と言つてはいるのです。」

「クイント皇国は兵を出さづ」

「ウルティア国も兵を出します」

「しょ、正氣か貴様ら」

「うろたえるグスター王を見かねたラインツ王が

「ジン殿何か君の言葉を証明できる物はないのかね」

「確固たるものはないですね。」

「何かはあるんだね」

「ええ、まあ」

「それで構わない。教えてくれ」

「それでは、まずギルドカードですね。」

カードを取り出し、ラインツ王にのみ見せる。

「称号を見てください。あ、能力ランクはバラさないでくださいね。」

「

「・・・救世主だと（それにこの能力ランクは）」

円卓がどよめく。ラインツ王と周りの代表も驚いていよいよだ。

「はい、神様が私を救世主としてこの世界に送った証拠になるかと

「たしかに、しかしこれだけでは、漠然としている。」

「そうですね。状況証拠としては、最近の魔物の異常な出現が上ります。ノワールサイや牛鬼はもともと『無得と魔物の大地』辺に多く生息していました。それが最近低ランクの狩場に現れ冒険者に被害がでています。」

この件に関わりのある、シャールが援護する。

「私も皇都の近くで20をこえる牛鬼に襲われました。」

冷や汗たらたらのトランデ王。

「娘よ、私は聞いていないのだが。」

「あはは～気にしない気にしない。」

「気まずそうに、顔をそらすシャール。護衛が少なかつたのは、ケチつていたのだろう。」

「やつらが住処を離れたのは、黒い半球が関係していると思われます。状況証拠としては充分でしょう。」

「しかし、それではまだ弱い」

「ええですから、あなた方には、『無得と魔物の大地』と一緒に行つてもらい黒い半球を物的証拠として見てもらいたいのです。お願ひできませんか」

「・・・わかった。ヴァーテリオン帝国は同行しよう。すべての国で行くのか？」

「……え、主要国の、ヴァーテリオン帝国、リーポン教国、ファーランド王国、カルモンド王国、テンプル騎士国、ヤマト国、クラフト商国、ウルティア国そしてクイント皇国の9ヶ国で行きます。皆様よろしくでしょつか？」

「クイント皇国は、問題ない」

「ウルティア国も問題ありません」

「世界の危機なのです。我らコニヨン教国は同行します。」

「クラフト商国も旅費を出してくれるなら問題ない」

「……つむ。……エクス見できなさい。カルモンド王国からはエクス王子を出す」

「ファーランド王国も同行しましょう。」

次々に了承が得られる。思っていたより順調だ。しかし今までこれについて発現のなかつた残りの一国が

「テンプル騎士国は断る」

「いやだね、ヤマト国は拒むぜ」

「……何故ですか？」

「そちうは、」ひりを驅し出入り口を塞いでいる。あまりに不敬ではないか。」

「」ここまで好き勝手されて、はいわかりました。なんて言えるかよ。

「

どうやら武闘派の一団は、納得がいかないようだ。今まで黙つていたくせに、この言い様は、王として大丈夫なのか？

「必要なことでした。嫌だと申されても連れて行きます。世界の命運が懸かっています。力ずくでも連れて行きます。」

「いいだろう。力ずくでもといつのなら。そつだなジン殿、我と手合わせをして我に勝てば我が国も同行しよう」

「それがいい。うちもそつするぜ。『英雄ジン』の力、見せてもらおうじやねえか」

「……はあ、わかりました。お相手しましょう」

思わぬ形で一人の王との手合せが決まってしまった。

40話 英雄VS一人の王

勝負は、闘技場を使うことにした。この場に来たのはクイント皇国とヤマト国とテンプル騎士国とカルディアとシャールだけだ。残りは各々の部屋で待機している。

先にやるのは、騎士王だ。白と赤の全身甲冑に、両手剣だ。両手剣には、これといった装飾はない無骨な剣だが騎士王が持つのだナマクラではないだろう。ジンはテツを一刀モードで構える。

「本当に、精霊術も使つていいのか？」

「ああ、構わない。といつよりその言葉遣いが素かい？」

「そうだ。あれば、会議進行用だ。」

「まあいいや、そんなことは。やつと始めるよ。」

「殺し以外何でもありの単純ルールだな。クリスさん、トウカさん審判をお願いします。」

「はい」

「わかりました。」

「（テツこの戦いに切れ味は、必要ないから。初撃を受けたらすぐに「刀になつて。」）

小声でテツに話しかける。

「【まい】」

「それでは、両者よろしいですか。それでは……始め!」

ジャック騎士王との試合が始まった。

一瞬で間合いを詰めた騎士王が剣を降り下ろしそれをジンが受けたところでテツが二刀に分かれる。余った一振りで騎士王に斬りつける。奇襲のこの攻撃を騎士王は難なく回避する。

「ふつふつふ、君が黒刀を一刀つかうことは『陸津波』」知つてうえふ

お喋りしている騎士王に、大量の水をぶつける。一応威力は押さえである。

「喋っている時は、聞くものじゃないかね。」

「ならもうこいいか?」

「うん?ああ来たまえ」

ジンは、水浸しの地面に手を置いて

「『流雷』」

ビリビリビリ・・・バタン

トウカがジャッジをくだす。

「・・・ジン様の勝利。」

「・・・お父様、・・・はあ」

溜め息をつくクレス。

「次は、父上ですね。無様はさらさないでくださいね。」（一コラ）

トウカさん恐つ

「お、おう」

次はヤマト国のかつら王との試合だな。

キリガネは侍スタイルで武器はもちろん刀だった。

「始めてください。」

キリガネがとつた戦法は、高速移動と連続攻撃だった。キリガネは、高ランクの気鬪と独特的の歩法でジンの周囲を縦横無尽に移動して攻撃を仕掛ける。ジンは、その攻撃を一刀と風による空間把握で最小限の動きですべて防ぐ。

高速ゆえに短い時間の間に多数の攻撃をすべて防がれたキリガネの動きに隙ができる。この時キリガネが攻撃を誘っていたのかはわからない、何故ならジンは攻撃をせずにキリガネの足を思いつきり踏んづけた。そのままその足を精霊術で地中に埋め動きを封じる。

「んな」

焦るキリガネから距離をとりキリガネの周りに五つの火球を作り出す。

「『、殺しが無しだぜ。だ、だからまだ負けじやねえ』

悪足掻きをするキリガネに、聞こえないように風を操作して、他の者に耳を塞ぐように伝える。

気絶している騎士王以外が耳を塞いだのを確認して。

『『炎爆陣』』

キリガネは全方位から衝撃と爆音を浴びて昏倒した。

クレスがジンの勝利宣言を行つ。

「ジン殿の勝利。」

「捕まつたといひで素直に負けを認めていれば、みられた試合だったのに、まったく父上は

爆音で飛び起きた騎士王が起きて早々

「あれでは、納得できんもう一度やうう

ふざけたことを言つてゐる。『流雷』の後でこれだけ動けるということは、あの鎧に何かあるのだろうか。

「お父様、何を言つているのですか? どうぞお聞き下さいよ。」

「まあ、いいですよ。」

「話が早い。いくわ

ジンは、テツを一つに纏め氣を流し本氣で、振るつてきた両手剣に斬りつける。

カラ

両手剣がポツキリ折れ刀身が地面に落ちる。一度受けた時に不思議に思つてゐたが、やはりこの両手剣、ナマクラだつたようだ。しかしこのナマクラで最初の攻撃のときにテツで受けた時に折れなかつたことが凄い、よほど氣をうまく流さないと一撃目のときに両手剣の方が折れていただる。

「うつ、まいつた。」

この言葉でこの騒動は一応の、決着がついた。
そのあと

「いやあ、噂通りの腕前だね。あれで聖痕無しか、凄まじいね。」

「まつたくだ。俺の攻撃をすべて完璧に防ぐたあ大したもんだ。」

口々に褒める二人に

「よく言つ。一人とも本氣では、なかつただろう」

「あれ、バレてる。」

「そりやあジャック殿の剣なんか、ナマクラもいいところだし、キリガネ殿も剣技だけでしたし」

「「あの～」」

「一人の王の娘が、不思議なものを見るような顔で
「何故父上たちは、仲良くお話ししているのですか?」

「お父様も会議が不満で勝負を始めたと記憶していますが」

「ああ、あれかあれは嘘だ」

「その通り、つまりやらせだ。」

娘一人の周り温度が急に下がった気がする。

「・・・何故そのようなことを?」

「あそこで、ねたらジンと戦えると思つてな。」

「右に同じ」

「父上」「お父様」

「「ちよっとお話が」」

「一人の王は物陰に連れていかれ。

「娘よ、どうしたのだ?」

「トウカどうした?」

「娘よその腕はそつちこは曲がらなああああああああ

「トウカその手に持つてはいるのは、なんぞや——————」

一人の制裁はしばらく続いた。

「ああ、テンプル騎士団は、『無得と魔物の大地』に同行する。」

「ヤマト国も同行する。」

「ジン殿申し訳ありませんでした。」

「ジン様すみません。父上がとんだ粗相を。」

「いや、気にするな。俺もそんなことだらうと思つていたから。」

「??どひしてそんなことが、わかつたのですか?」

「俺の名前が出てからこの二人ずつと無言だつたし、お互ひを見て無言で相談していたみたいだからね」

「それだけですか?」

「ああ、だから確信があつたわけじゃないよ。それはともかく今日出発するには中途半端な時間だな。出立は明日元日じよつ。」

「クルト他の王にも伝えておいてくれ。」

「わかった」

「それじゃあ、俺は屋敷に戻つて仲間と打ち合わせをする。護衛の方は、クルトの方で頼む俺のチームは別のやつを守るからな

「別? まあ君のことだ、きっと考えがあるのだろう。護衛の方は任せてくれ」

「じゃあクレスさん、トウカさん失礼します。」

屋敷に戻ると、ミコアが迎えてくれた。

「『』主人様、会合の方はどうなりましたか?」

「明日『無得と魔物の大地』に行くことになった。」

「それには、私たちも行ってよいのですか?」

「ああ皆で行く。あと亜人の子達も連れて行くからお前達はその護衛を頼む。」

「亜人の人たちもですか? 何故ですか? 『無得と魔物の大地』は決して安全なところではないですよ」

「一度目の侵攻は、人間の国だけで何とかなるが、二度目の侵攻は人間の国だけでは難しいんだ。だから亜人にも協力してもらう。そのために現実を知る亜人が必要なんだ。もちろん無理強いするつもりはない、これから頼みに行く。」

「やついうことですか。でも、ふふ、『主人様の頼みを断るとは思えませんねえ』

意味深なことを言つミコアをおこしてキリとココのところに向かう。

コンコン

「キリ、コリいるか?」

「『』主人様!?」

「ちょ、ちょつと待つて」

中からドタバタ聞こえる。しばらくして、ビシッとメイド服を着たキリとコリが出てきた。

「どうされたんですか?」

「ちょっと話があるんだ。入つていいかな?」

「どうぞお入りください』主人様

「どうしたの、『主人様?』

二人に『無得と魔物の大地』に同行してほしいと理由と一緒に説明する。

「確かにちょっと危険なんだけそこは俺たちが

「いいよ」
「いいですよ」

「・・・そんなあつさりいいのかい？」

「「」主人様のお役に立てるなら。かまいません」

「私たちご主人様のこと大好きだし、その方が一緒にいられそうだし、問題なし」

「二人ともありがとう」

二人を抱きしめ頭を撫でる。

「「」主人様」」

二人の甘えた声が耳元で聞こえ、頬をスリスリしてくる。小人の体は人の子供と変わらないのでお肌はすべすべでやわらかくて気持ちいい。三人でしばらく戯れた。

「もう行くのですか？」

「ほかの亜人達にも話しに行かないといけないんだ」

「我慢しなさいユリ」

「キリ、ご主人様の服を放してから言おうよ」

「あう」

二人の頭をもう一度撫で

「それじゃあ行くね

「「はー」」

ここ数ヶ月の仕事でたくさんの奴隸が屋敷に集まっていた。屋敷にいる亜人のほとんどは、ジンが奴隸から開放した者がほとんどで皆ジンに恩を感じていてる者ばかりだったからだろう。他の亜人たちも快く同行を了承してくれた。

その夜ちょっとした事件が起きた。

「「「ご主人様添い寝させてください」」」

夕食を済ませてジンが自室に戻ると屋敷で働いているメイドたちがあられもない姿で待ち構えていた。下着姿の者もいればネグリジェ姿の者もいるさすがに全裸の者はいないが、この状況はいつたいどうこうことなんだろう?。

「「ご主人様がまた、皇都を出ると聞きましたので」

「添い寝をさせていただく約束聞いていませんか?」

「添い寝をする格好ではないと思うのだが」

「ふふ、ご主人様がお望みならばここにいる1~2名ご主人様にこの身をささげます。」

「ご主人様、こんな格好で来ているのです。お察しください

「わかった。みんなベットにこい」

その夜12種類の喘ぎ声が、ジンの寝室から聞こえてきた。

異世界209田田

「何故こうなった

今ジンが乗っている馬車には、アリシャ、シャール、カルディア、クリス、トウカ、ウリアと会議に参加した女性が勢ぞろいしていた。ジンは最初、自分のチームと一緒に行動するつもりだったのだが、

カルト皇が

「君の発案なんだから君はこうちでしょ

とこっち側に連れてこられたのだ、そしていざ出発して馬車の中を見渡すと・・・女しかいない。

右隣にはアリシャが、左隣にはカルディア、正面にはシャールが座っている。シャールの両隣にクリスとトウカが座りウリアはトウカの隣だ。

「同乗を希望した。」

「私は、ジンさんと親睦を深めたくて希望しました。」

アリシャとカルディアは嬉しいことを言つてくれる。

「君たちは?」

他の女性に視線を向けると

「お父様にジンさんは婿候補だから会つてこい、と言われまして。」

「私も、父上に似たよつたとを言われました。」

「あたしは、ジンがどれほどの器物なのか見てこいつて父が、まあ私は一度ジンに助けられているからそこんところはあんまり気にしないけどね。」

黙つて聖女に視線が集まる。
聖女が顔を赤らめて否定する。

「な、なんですか。私は違いますよ。ただカリウスが他国の動きを見て。じゃあうちも一応、と押し込まれただけです。」

それは、他の娘とどこか違うのだろうか？

「そんなことよりアリシャさん、カルティアさん、ちょっとくつつきすぎではないですか。」

「そんなことない。これでも控えめ」

「そうですよ。隣に座つてているだけですよ。」

「それで控えめって普段は、どうなつてるんですか？」

もっともな発言だった。実際にジンと一人の間に隙間はなく肩には頭を乗せるという、かなりの密着度だ。他の姫も少し赤くなつてい

る。

「見せましょうか？」

「いいです。遠慮します。」

トウカが話題を変える。

「や、やつこえばジンさんは、刀を使うのですよね？」

「ああ、一応な。」

「今度手合させしませんか？」

「私も頼みたい。」

『剣姫』と『舞姫』から手合させの申し出だ。

「いいよ。機会があればその時にでも」

「ねえねえ、ジンあの一角つてジンの仲間よね。あの一角つて何を護衛しているの各国の代表じゃないよね？」

二度目の魔物の侵攻の時は、亜人にも手伝つてもううことを話す。

「大侵攻ね～いまだに信じられないのよね

「私は信じますよ。」

そこで意外な発言をしたのは聖女ウリアだった。

「何故ですか？」

「主神オシリスから、世界に危機が迫っている」とは、聞いていましたから」

この世界の神様か、

「・・・なんで公表しないのよ。」

「内容がわからなかつたので公表できなかつたのです。内容も解決策もないのにただ危機が迫っています。などと言えません。」

「じゃあなんであの場で言わないのよ」

「あの時は判断に迷つていたのです。各国が一定の理解を示したので今お話をしたのです。」

「まあいいけど。でもこれでジンの言葉が裏付けがとれたね」

「この世界では神の存在が認められているんだな。俺の世界の神は、ほぼ人間に無干渉だつたから神はいないことになつてているのに。」

「そうなのですか？まあこの世界でも神の声が聞こえるのは、世界に一人だけで代々声を聞いた者が聖女をしています。」

「そういえば、ローレン教国は教皇と聖女の二君主制だつたね。よく成り立つね」

「教国は、内側を教皇が、外側を聖女が司つてゐるんです。内政と

外交ですね。教皇は国民に支持されたりますが、聖女は神に選ばれます。だから我が国には両方とも大事なんです。」

「つまり教皇の方が実権を持っているけど、それも神の後ろ盾のある聖女あってこそその物つてことか？」

「よくわかりますね。たしかにそんな感じですね。」

感心したようにウリアが頷く。

その後もジンは各国の姫たちと交友を深めていった。

その頃、ジンの仲間達が乗る馬車では、

「まつたくクルト皇帝は、余計なことをしてくれますね」

「「「」主人様と一緒にいられると思つたのにな〜」

「お兄ちゃんと一緒によかつたな〜」

ソフィアが悪態を付き。キリとコリとフエリスは落ち込んでくる。

「申し訳ありません。父上が」

「レティーシアはいいのよ。」

「そうですね。レティーシア様も本来ならあちらに乗つてもよかつたはずですし。」

レティーシアが謝り、リリスとミリアが擁護する。

「今頃お兄様は姫様方のお相手をしておるのでしょ、うね。」

「「」主人様を盗られた

「私は主の物なのに」

ティリエルが馬車の中を思ひ浮かべ、イリヤとフレリスが不満そうに頬をふくらませておる。

「また、増えるのでしょうか？」

「せうだらうねえ」

「しかたないですよ、わかつていたことです。」

「「」の話はやめましょ、あまり良い結果には、ならないでしょ、うし

「やうですね。」

リリスが「」などと話題を変える。

「それじゃあ、最近あつた良いことを報告して気分を盛り上げよう
「はいまずは、ソフィアさん」

「えへへ。え、えつと実はジン様との前川で水泳を教えてもらひ
ました。」

「どんなのを教えてもらったの？」

「バターカーという泳法で、これがとても速く泳げるんです。いつか海水浴に行く約束をしました。」

「「「いいな」。」「」

「そしてナイスよ、ソフィア」

「はい次、フェリス」

「「」の前チーズケーキをお兄ちゃんと一人つきりで食べました。」

「チーズケーキ! 食べてないよ」

「お兄ちゃんとの二人だけだもん」

「くわうー次、テツちゃん」

「「」の前体の隅々まで綺麗にしてもらいました。」

「な、なんですって」

「小太刀の姿のとき「」

「「「なーんだ」」

皆安堵していた。特にキリ、ユリ、ティリエル、フェリスの年少組はあからさまにホッとしていた。

「次、ティリエル」

「実は今お兄様と聖痕無しで空を飛ぶ練習をしてるんです。それがやっと形にならしてましたね。」

「……」人様は、ビルまで行かれるのでしょうか。

「やつやあ、この世界をまるまるやれるへりでしょ。」

「ねえねえ、ビルやつて飛ぶの？」

「薄い木の板を使つんです。足を板に固定して板と背中で風を受け
るんです。」

「ジン殿は、すいこな。一度乗せてもらおうかな」

「お兄様でも当分は難しいと思しますよ。」

「「「そつか~」」」

ジンの女達は、ジンのことで一喜一憂しながら『無得と魔物の大地』
への道程を過いじた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887w/>

聖痕使い

2011年10月18日22時43分発行